
夜空の三重奏

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜空の三重奏

【Nコード】

N8100C

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

中学二年生の美空葵は、夏休みを利用して一人旅に出かける。しかしそれは親に内緒の秘密の旅。思いつくまま気のむくまま。それは心に宿る負の自分を改める為に突き動かされたのである。そして、旅の途中でとんでもない事に・・・少年少女の出会いと仄かなるロマンス。キャラクターの心の成長を描いた心温まるお話です。

#1 プロローグ

人の世の 名残惜しくは 繋がり を 無くして今も 誰ぞ^{たれ}ありな
ん

美空^{みそら} 葵^{あおい} 作

今日から新たな旅立ちの道を歩むつもりだ。誰も知らない場所に、誰もあたしの事を気にも留めない場所に。あたしを、人として認識しない場所に。

産まれてこの方、人との繋がりに稀薄だった事を何度となく突きつけられる場面があった。そりゃ、繋がりを絶つつもりなんて無いけど、自分に合った人間を探すくらいなら、この世をおさらばしたい気分^{きぶん}に駆^かられることの方が多い。

たった一度だけを除いては。

例えば、同じ趣味の子と仲良くなる。音楽の話なら、その曲や、歌詞、アーティストの話。そういうお話をしてて、そりゃ楽しいね。

何時^{いつ}までもこんな話で盛り上がりたくなる。そして笑っていたいし、ふざけあいたい。

でも、気付くんだよ。この人達は、やはり自分とは死を直前にする時まで何時^{いつ}までも一緒にいられない人間なんだって事に。小学生の時に痛いほど悟った。

そして気がつくと、往来の真ん中でも、教室の中心にいても、ポツンとただ突っ立って傍観^{ぼうくわん}視している気分^{きぶん}で、この世に自分の存在^{そんざい}が在^あるのか無いのか？判^はらなくなる。

それがとても歪^{いびつ}で、無味無臭^{むみむそう}の空気^{くうき}の様な者である気がして、そこで息^{いき}が詰^づまる。

言うなれば、ただの生きる屍^{しかばね}。生^なかされてるだけの存在^{そんざい}に感じられてしまうわけ。

だから、あたしが生きてる証^{しるし}を探しに旅に出ることにした。

十四歳。季節は中二の夏休み。性別女。名前は葵。美空葵。この夏、自分の価値を探しに旅立ちます！

旅の始まりに、あたしは一つの大きな鞆を手にとった。去年、警視庁で働く立派な、誰にでも自慢したくなる父に買って貰った、中学生になったお祝いの鞆。あたしの自慢の愛用品。大きいから、旅行鞆としても役に立つのが売りだったりする。

あたしはそれに必要な衣類や、非常食、旅行に必要な石鹸、歯ブラシなどを詰め込んだ。

こうしてみると、愛用品の鞆が、子熊のように丸々として見えるから不思議。そして、あたしは、必要な金品と、中学生になってお母さんから渡されている貯金通帳とカードをショルダーバックに詰め込んだ。これがないと、旅行をしようにもできない。とあたしは思っていた。

この世の中、お金が無ければ渡り歩くことが出来ないと、自ずと知っている。ああ、こういう所、割り切りの仕方が中学生らしくなくて、夢も希望も無い人生を歩んでる気がするな。でも、それが現実なの。だからこの旅行に必要な物の一番はお金。手持ちは、五千円。通帳には残高二十万円がある。これだけあれば、何とか一ヶ月過ごせるだろう？

あたしは、素で勝手にそう思い込んでいた。

誰にも居場所を知らせず、行き当たりばつたりの新たな旅立ち。きっと、お父さんや、お母さんは搜索の手を広げてくるだろう。でも、そんな事は関係ないや。旅が終わって帰ってきて叱られても、ニュースで取り立たされても、あたしはこの旅が、今、必要なのだ。親不孝者でごめんなさい。でも、今やらなくちゃならないんだって自分でそう考えたの。真剣に。

そう思いつつあたしは、皆が寝静まったこの白い満月の夜空に煌く星々を眺めつつ、何不自由ないこの一戸建ての白い花が咲き乱れる

ガーデニングの整った家を後にした。

#1プロローグ（後書き）

こちらでは二作目です。

シリ阿斯なんだけど、心温まるものを心がけて書いた作品です。
少年少女の心の成長を見届けていただければ嬉しいです。
もし宜しければ、感想など頂けると嬉しいですv

#2 出発

さて、最寄りの駅までやって来た。でも、もう、最終列車は過ぎ去った後で、あたしは時刻表を眺めながらどうしようかと考える。まず、宛所の無いこの旅なわけで……最終地点なんて何処にもありはしない。だから、時刻表に載っている始発の時刻を見る。

AM5時20分が、この駅での始まり。それまで何処かで時間を潰そうか？と考える。この歳で、こんな駅で寝ていたら、家出してきた子として補導されるのがオチね。見た目からして如何にも中学生だと自分でも自負できる。

こういう時、少しでも大人っぽい容姿をしていたら、問題ないのに……なんて思うけど、今更言っても仕方がない。だけどそれも事実。そしてちよつとだけ、隣のクラスの佐伯さんを羨ましく思う。

彼女は、高校生並みのプロポーションで、見かけも、考え方も大人だ。去年同じクラスになったことがあり、少しだけ会話したこともあったけど、自分と比べて大人の発言をしていた。

とかく、あたし自身、大人だと思ってた節があったから、彼女の社会批判の現実論を聴いて、あたしは彼女に負けてるなって思った。その後、会話をする機会もなくそのまま一年が過ぎ去ってしまったけれど。

そんな事を考えて、あたしは、近くに在る公園へと足を向けた。ここの公園は小さい頃からよく遊びに来ていたから、身を隠すことが出来る土管のある公園であることも知っていた。

土管と言っても、工事をする時に使うあんな物ではない。遊具としての土管である。

コンクリート製というのは同じだけど、大きく繰りぬかれていて、大人二人丸々入ることが出来るくらい広い穴。そしてその外壁は赤や青や黄色などカラフルな色をしていて横になってたり、縦になってたり。

その上には、雲梯があつて、ちよつと見、小型アスレチックのようになつていたりする。

あたしはこの公園が大好きだ。ちよつと他の公園には無い遊具が一杯だったから。

滑り台も裾広がりの山のようになつていて、あたし達子供は、富士山と称していた。

その公園で、あたしは一夜を明かすため、土管の中に身を潜めた。まさかこんな所に子供が居るなんて思いもしないだろう。

土管に入つてあたしは鞆から、目覚まし時計を取り出す。そして、タイマーを五時にセットして、就寝に入った。旅立ちの第一歩の野宿。初めての体験だった。

耳元で『ジリジリ〜ン』というけたたましい音で目を醒ました。あたしは、まだちよつと暗い中、公園の脇にある水道で顔を洗い歯磨きをする。タオルもちやんと準備してるし、万事朝は快調な滑り出した。

朝も早いし、人もいない。でも、後一時間もすると、この公園でラジオ体操に訪れる小学生達で一杯になるんだろうな。そんな事を考えながら、あたしは、鞆を背負い、駅へと急ぎ、改札の前で切符を買つてプラットホームへと歩いた。

始発の電車はまだ着いていなかった。あたしは、ベンチに腰をかけて、周りを見渡した。人は疎^{まば}らで、通勤のおじさんかなと思われ、る人が白線の内側で待機している様子を見た。

後は……酔いつぶれてるのか？変なおじさんを見た。後方のベンチに横になつて寝ていた。あたしはこんなだらしない大人になりたくは無いなと心の中で呟いた。あ、これって大人に対する子供の偏見かな？後で気付くまで、あたしの偏見は続く事になるんだけどね。

時間になつて、電車がやつて来た。プラットホームも少し人が多

くなってきた、あたしは負けじと、席を確保するために前に並んだ。他の乗客は殆ど会社勤めの方達だったようで、きつちりとスーツを着込んでる。あたしだけ何だか此処にいてはいけない者の様に感じられて、それが逆に嬉しくてちよつとだけウキウキしていた。

さて、何処に行こう？今年の夏は暑くなりそうだから、北海道にしようか？ラベンダー畑を見てもみるのも一考だしなあゝなんて勝手な理想を思い浮かべていた。

直に東京駅に辿り着く。上野まで出ようかなと思った。そうしたら、北に向かつて一直線。でも何を間違ったか、品川へと向かう山手線外回りに乗ってしまったわけだったり……こういう間違いをしてしまったのも、何かの縁かも知れないと、気のむくまま、品川駅で一旦下車し、東海道線に乗った。

新幹線に乗ったのは、何時以来だろう？小学生の修学旅行時以来の気がしたり？ワクワクしながら、席に着く。さてこれから何処に行こう？あたしは、北が駄目なら、南にしようという考えに至った。沖縄も良いなあゝ南国って開放感ってのものをを感じるし？自分の中で楽園というイメージが湧いてくる。それに心を癒してくれそうだ。

特別に疲れを感じているわけでは無いけれど、そう言うのもまたオツではなかるうか？

そんな夢心地の自分のその胸に魔の手が伸びるなんて、この時は一切考えてもいなかった。あたしはのんきにそんな事を考えていた。

#3 盗難

新幹線の中であたしの隣に座ったのは、笑顔の爽やかな、紳士風のおじさんだった。

「あれ？一人で旅行？何処まで行くの？」

気さくに声もかけてくれた。あたしは安心して切っていたのだろう。何の不信感も抱かず、その人とお喋りをした。

「一人で沖縄？凄いね〜ご両親は？」

「え〜と、沖縄に居るの。あつちで待ち合わせしているの」

嘘をついた。本当は違うけど、家出人なんて思われたらそこで最後だ。

「ふ〜ん。おつきな荷物抱えて大変そうだね？そうだおじちゃんが、その荷物、荷物棚に置いてあげるよ」

にこやかに対応してくれた。

「ありがとう〜」

あたしは背が低いので、荷物棚に荷物を置くことができなくて、手荷物状態だった。だから、おじさんに、荷物を置いてもらった。

「おじさんは、何処まで行くの？」

今度はあたしが問い返した。

「おじさんは、新大阪まで行くんだよ。出張なんだ。君くらいの子が娘に居てね。今ちよつと顔を思い浮かべてしまったよ」

につこり笑いながら、そんな会話が続く。

列車は、凄い速度で過ぎていく。景色より、おじさんと話している時間が増えて、のんびり見ている時間はなかった。ま、会話が弾んでるから、それはそれで良いのかなとも思ったりしたけれど。

そして、名古屋辺りであたしは朝早くから起きて行動をしていた為に、眠気に襲われて、おじさんに「ごめんなさい」を言い、一眠りすることにした。

それが間違いだった。

新大阪を過ぎた辺りで、あたしは、眠りから一度覚めた。どのくらい眠っていたのだろう？もう隣のおじさんはいなかった。その代わりにあたしの大きな荷物がその座っていた席においてあった。きつと、おじさんが下ろしてくれたんだろうと思って、また一休みの睡魔に襲われ眠りこけて、気付くと終着点の岡山まで辿り着いていた。

そして、人間不信の泥沼の縁に落とされてしまうのである。

乗車確認する車掌さんが、切符の確認をするためにあたしを起こしてくれた。だから、あたしは、身につけているシヨルダーからの切符を取り出そうとした。花柄のお財布に入れたから、それを見せよう。しかし、そのお財布がどこにも無いのである。しかも、その財布には、カードも入っていたのに……

「どうしたの？お譲ちゃん？」

車掌さんは、につこりと微笑んで、あたしに問いかけた。

「無い！あたしのお財布が無い！」

あたしは、パニックに陥ってしまったのは言うまでも無い。これからの旅も、全財産も此処にはもう無い。こんな事が起こる確率って一体？そう考えて、あたしは、大きな荷物の方の中身を開いた。少し荒らされているのが判った。あのおじさんだ！あたしが寝てる間に、奪って行ったのだと。

「どうしたの？」

「盗まれてるんです。あたしの財布が！」

あたしは、車掌さんに向かってそう叫んだ。車掌さんは、驚いて、あたしが慌てているのを窺^{たしな}めるかのように事情を聞いてくれた。

「切符だけでなく、カードまで財布ごと盗まれたんだね？これから何処に行こうとしたの？」

あたしは、取り敢えず、沖繩に行くと言っただけ言って、後は口を噤^{つぶ}むしかなかった。

余りにもショックを受けていると思われたのだろう。取り敢えず、あたしを落ち着かせるためにも岡山のこの地で駅員さんのいる窓口の部屋に通され、あたしはパイプ椅子に座らされ事情を話さなければならなかった。

勿論、警察の方もやって来ることになる。只でさえ事情が事情だ。そうなると、名前がばれた時点で、お父さんの事を取りだたされるに決まっている。

勝手に家を飛び出して、こんな所で旅行も終わりだし、カードさえも失って……あたしは人生全てが終わってしまったのではなかるうか？と言うような、この世の終わりを思い浮かべてしまって、もう立ち直る気分になれなかった。

「お譲ちゃん？お名前は？」

そう問われても、応える気力が無かった。もう、全て終わった気がしたから。

それに、ここで美空葵の名前を出して、父にバレるのも怖かった。旅行から帰ってから叱られる覚悟はあったのに。自分の意志は、今の時点で自分の冒していることに対する負けを認めるようなことをしたくなかったのだ。

「うん。黙ってても仕方が無いよ？無銭乗車してるとは思えないから、ちゃんと応えてくれたら、ご家族にだって連絡できるんだし？お譲ちゃんも安心できるでしょ？」

言ってることが理解できないわけじゃ無い。判ってることなんだけど、あたしは喋るわけにはいかなかった。

「どうしましうかね？警察が来るまで、暫く、このまま待ちましようか？」

一人の駅員さんが言った。あたしは、警察が例え此处に来たとしても話す気は全く無かった。

「お譲ちゃん？お昼ご飯は食べたかい？お腹減ってない？」

減ってても、空腹感より脱力感で何も感じない。だから、頭を垂れ、そして、首を横に振った。

「何か訳ありなのでしょう……？」

また別の駅員さんが、陰の方で囁いているのが聴こえた。あたしは、流石にまずいと思って、その場を立ち去ろうと、パイプ椅子を押し倒してこの窓口から飛び出した。大きな鞆を置き去りにして。

後方で、大慌てで呼び止める駅員さんの声が響いた。そして、走ってくるその足音も聴こえていた。だけどあたしは振り返りもせず、走ることだけ考えていた。

#4 逃避と出逢い

駅構内は、人で溢れている。もう何処をどう走ったかなど覚えてちやいない。取り敢えず、逃げ出さなきゃならないと思い、それだけで頭が一杯だった。

あたしが、駅構内から外に出て、商店街を通り抜ける頃には、もう誰もあたしを追い掛けてくる者はいなかった。あたしは、身体は小さいけど体育は得意で、五十メートル走を六秒台で走れると言う足の速さは自慢だった。それに機動力がある。だから出来たことだと思う。

そして商店街を抜け、ちょっとした下町っぽい所まで来た時には、流石にもう走ることが出来なくなっていた。

仕方ないので、道端の縁の大きな石に座り込んだ。

「どうしよう……今頃、お尋ね者になって、大騒ぎになってしまってるかも知れない……な」

キュ〜と、お腹が鳴った。頼れる者がいない世界。本当に誰もあたしを知っている者がいない世界がここにあった。望んだことだけど、望んでない世界。こうなって初めて知った。どうにかなる！なんて事は無いのだと。

子供なのだと思い知らされた。お金がないとどうにもならない世界が広がった。夢も希望も無い。それが今だった。

せめて、誰か知っている者がいれば、声を掛けることが出来るのに！そう思って、道端の石の上で、脚を抱え込んで、体育座りをし、密かに泣いた。このまま誰にも知られずにお腹が減って死ぬのかな？そんな事を考えて泣いた。生きることがどんなに大変か？やと判った気がする。

つまり、保護下に置かれない世界。これがそれなのだと判った。父親のいない家庭や、母親がいない家庭のグレてる子達の事を初め

て判る気がした。反抗したいんじゃない、構って欲しいのだと。今の自分がそんな気分だから。

誰かに声を掛けてもらいたい。気付いて欲しい。そう言う気持ちが心の中に溢れてきた。

そんな時、一人の少年が、あたしに声を掛けてきたのである。

「どないしたの？君？」

その子は、金髪の髪を靡かせて、あたしを不思議そうに見下ろしていた。フサフサした髪の毛が気持ちとは裏腹な快晴の陽の光の下煌いて、綺麗だった。

よくよく見て不良か？と思った。まだあたしと同じくらいの年頃に感じるのに、耳にピアスまでして……けど、そんな事は後回しになった。何よりも、声を掛けてくれたことが嬉しかったのである。

「あんさん。泣いとるん？うち来るか？」

でもその後の言葉が、まるで新手の軟派の様な言葉だった。でも、あたしは、もう行く所もなければ、どうすることも出来ないので、

「家は何処？」

と問い返した。一瞬、あの新幹線の優しそうなおじさんが頭に過ぎったから慎重に越したことは無い。

「そこ。この道真っ直ぐ行って、曲がった所にあるんや」

自転車に跨った少年は、わざわざサドルから腰を下ろしてスタンドを立てると、あたしの手を取って、立つように促した。

「まだ行くって言ってないよ。あたし……」

「大丈夫やて、今のあんた、昔のオレと同じ目しとるもん」

どういう意味だろう？と小首を傾げたくなったけど、あたしは黙ってその少年の後を着いて行ってしまふ形になってしまった。

着いた先は、まるで、何かの施設のような感じを少し漂わせた、木造の古びた建物だった。

「子羊園？」

あたしは、建物の門の所にある、看板を見て言葉を漏らした。

「そ、此処がオレの家やねん。ええ所やで。入りゃや？」

少年は、あたしの背中を押して、中に入るように促した。

中は、まるで幼稚園生のお遊戯室のような内装をしていた。今日
たった今まで誕生日会でも有ったかのように、折り紙で出来た輪を
繋げた物があつたり、薬玉くすたまを割った後のような、紙が散らばってた
り。

「此処が家？」

「そや。あんさん。家は？」

その質問には答えられない。だからジツと黙ってしまった。

「喋りたないんやったら、聞きとわないで。ま、ええわ。」

すると玄関口で話しているあたし達の前に、一人の女の人が見れ
た。まるで、幼稚園の先生のように、おっとりとした感じの綺麗な
人だった。

「延光君？さつき出て行つたんとちゃうん？」

あら、お友達？初めまして！此処散らかつとるけど、ごめんなさい
ね？」

「母さんは？もう、出かけてもうた？」

「先生なら、さつき延光君と同じ位の時間に出かけられたわ。会わ
なんだ？」

「うにや、みいひんかったわ。まあええわ。あんがとさん」

どうやら、この少年は、延光と言うらしい。で、この女の方は、
お姉さん？にしては、歳が離れすぎてるよね？なんて人間観察をし
てしまった。

お母さんと呼ばれるその人を、この女の方は『先生』と呼んでる
辺り、此処は学校（幼稚園）なのかも知れない。

「延光君て言うんだ？」

あたしは、問いかけた。

「須藤延光すどうのぶみつて言うんよ。延光でええ。あんさんの名前は？」

「あたしは……葵」

思わず応えてしまった。でも、流石に苗字は名乗らずにおいた。

「葵ちゃんって言うんや。よろしゅうな？」

延光は笑ってそう言った。特に気分を害してるようには見えなかった。ので、ホッとした。

「今の人は誰？」

気になったので、訊いてみた。

「ん？亜希子さんのこと？オレの姉さんみたいな存在」

みたいな存在。って言葉は引っかけたけど、どうやら、お姉さんと言う事らしい。ま、あたしも苗字名乗ってるわけでも無いし、詮索するのは変か？とそう割り切った。

「今日、泊まるとこあるん？その様子やと、あんさん、家出して来たやる？」

「！」

あたしは、直球を投げられたので、思わず固まってしまった。何故判ったんだろう？あの大きな鞆。お父さんから貰った、大切なあの鞆が無いのにもかかわらず……

「どうしてそう思うの？」

「だって、此処の土地の言葉使ってないしな。それに、顔に書いてるやん」

あたしは、鏡が無いか探しそうになった。

「やつぱそうなんや。事情は知らんが、此処は自由やし、オレも勘繰らんとってやるから安心せえや？」

延光は、笑いながら思いつきりあたしの背中をバンバンと叩いた。

「ちよつと、痛いって！」

余りにも叩くから、あたしは悲鳴のような声をあげて非難した。

「すまんの。ま、取り敢えず、腹減つとる様やし、何か食べるか？」

あたしのお腹が、緊張から解かれてグーグー鳴っているのが聴こえたから延光はそう言った。だから、あたしはその言葉に甘えて、延光の後に従った。

「何か食べもん、ないかいなあ？」

鼻歌を歌うようにそう言った延光。廊下をずっと真っ直ぐ行った

所の突き当たりに、簡素な木であしらわれた部屋があった。と言うか、この家自体木造ではあるけれど。

その部屋がどうやらキッチン仕様になってるらしい。かなり広い部屋で、テーブルも十人位が座れるのではなからうかと思うほど大きかった。実際、椅子の数も多いんだけど。

そして、延光は普通の家庭に無いような大きな冷蔵庫を何の躊躇も無く開いた。中には、ラップを掛けたお皿が沢山並んでいるのが見えた。そして、その一つをつまみ出し、あたしの前に見せた。

「今、レンジで『チン』してやるから、その椅子にでも腰掛けとりゃ？ご飯は焚けとるかなあ？この時間やしなあ」

なんて呟いて、イソイソ動いてる。

世話焼きと言うか何と言うか……普通此処まで初対面の人間にしてくれるであろうか？あたしはそんな事を考えた。

きつとあたしが延光の立場なら、こんな世話を焼いたりしない。

それよりも、あの自転車を漕いで、何も見なかったことにして通り過ぎてしまってると思う。だって他人じゃない？もし知人、友人だとしても……一歩引いてしまつて声を掛けづらいと思う。特別な友人付き合いをしたことの少ない自分がそう思うだけなんだろうか？一般論はどう？

心の中で何度も呟く。でも答えが出るわけではなくて、より疑問になってしまふ。あたしは、非道な人間なんだろうかと。

「どないしたん？そんな顔して……お家が恋（こ）しなつたか？」

どうやら、電子レンジで温め直しが出来たらしく、テーブルには湯気のたつた野菜炒めと、お茶碗に入つたご飯があつた。

そして、目の前には家庭で使つてるのではなからうかと思われるお箸がお箸置きに添えられていた。

まるで、来客が来たときのような御もてなしの一つのように思われた。

「……本当に食べて良いの？」

あたしは、生唾を飲み込みながら一応問い掛けた。

「何言つとんのや？食べてええから『チン』したんやん？変なこと訊くなあ〜」

延光は、あたしの目の前の椅子に腰を掛けて、あたしの食べる所を拝見しよう〜！みたいな表情で両肘を突いて覗き込んでいた。

それがかなり気になったけど、お腹の虫は正直で、目の前の食事が美味しそうに感じられるから、何も言い返さず箸をつけた。

始めは、お行儀よく箸でちよつとずつ摘んでは口に頬張って食べたけど、その内その速度は早くなり、最後には集中して駆け込む感じで全部平らげてしまった。

「ふ〜〜〜う！」

食べた後、思わずため息交じりの感嘆の声が擬音として口から漏れた。もう満足だった。

何だろう？この只の野菜炒めに隠されたスパイスって物は？食感は何処で食べる物とも変わらないし、味だって平凡。でも、今まで食べたことが無いってくらい美味しく感じられた。

「どう？美味^{うま}かったか？」

延光は、クスクス笑いであたしを見ていた。

「ご馳走様でした……」

その笑いが、余りにも子供っぽくて、そして意味ありげだったから、あたしはちよつとイラついてしまった。せつかく美味しい物を食べたつてのに。感想も何も言えないじゃないか……

「美味しいと思つたらな、素直に『美味しい』って言うんやで？それが子供の常識やとオレは思つとるんやけど？」

意味ありげにあたしを見てそう言った。

「……美味しかったです」

あたしは、言わざるおえない気分になってそう言った。そしたら、延光は、につこり目の端を下げて綺麗に笑った。あたしはその表情が余りにも印象的で『ドキッ』として、目を見開いた。延光と言う人間にこんな表情が出来ると思つてなかったからである。

そんな戸惑つてゐるあたしの顔を見ずに、延光は後片付けを始めた。

流石に我に返って、あたしは、

「手伝うよ!」

と、そのお茶碗とお皿とお箸を掻っ攫って流し台に向かった。

そして、お客として招かれていたはずのあたしは、勝手知ったるこの家の子供の様にスポンジに洗剤をつけ、出来た泡を確認し、洗い物をしたのである。

#5 養護施設

洗い物も終わり、あたしはホッとして、後ろを振り返ると、延光がテーブルの椅子に後ろ向きに座って後方の部屋に当たる居間のような部屋を覗き込むようにして笑っていた。

「何してるの？」

あたしは、その延光がいる椅子の所まで足を運んで問いかけた。

「ん？あ、洗い物終わったん？」

延光が眺めている物を見た。それは、テレビだった。

「あ、もうこんな時間なんだ？」

延光が見ている番組が、自分もよく観ているアニメだと判り、今が何時なのかに気がついた。

「この、悪役って、馬鹿だよな。いつもやられて引き下がってやんの！」

クククと延光が笑った。あたしは、正義の味方より、この悪役の方が好きだったから、

「そうかな。こういうところが可愛いんじゃないかな？」
なんてイラついて返答した。

「葵っちは、悪役の味方なんや？普通子供って、悪役より正義の味方に惹かれるもんやで？」

『葵っち』？その愛称でこの先呼ぶつもりなんだろうか？と苦笑いしたかったが、それより会話を優先させる。とにかくその言葉は、どうだろう？だった。

「でも、実際悪役の方が、人の心に反映してると思うけど？」

「じゃあ何か？人間に良い奴はあらんちゅう考えか？そりや変や」「何処が変なのよ？それが人間でしょ？」

「うん。でも、皆が皆そう言う考えしとるちゅうのは、被害妄想やとオレは思うよ。確かに、中には嫌な奴とか、酷い奴おるけど、それが全てって考えは……そっか、葵っちは周りにそう言う奴が居お

らんのや？だから、人間不信になるんやな」納得」

と言つて、あたしの目をジッと見詰めてきた。何かを探るような目だったので、あたしは目を背けた。あたしの心を読もうとした。そんな気がしたから……

「慣れてないんやな。人と接すると言ふ事に。人つて、思ったより単純に出来てるもんやで？」

その言葉に、あたしはそうじゃ無いと思った。複雑怪奇だよ。人間！だから、正直者のお人よしは損をするんだ。

「天然記念物の様な人には、あたしのような人間は判らないわよ！」思わずやけっぱちに喚いてしまった。でも、延光は、それを気にも留めてないといった感じで、

「判ろうとは思わんけど、これから判ろうと思うで？そうそう、行く所が無いんやろ？そしたら、ずっと此処に居れば良いわ。此処は、そう言う人間が集まる場所やから」

そう言つて、また、にっこり笑つた。

あたしには、この延光が判らない。普通、激怒するだろう？こんな言葉投げかけられたら……もつと疑問に思つたのは、人間つてこんなにお気楽で良いのか？だった。そして、そんな事を考えている間に、気付いた時にはそのアニメは終わつて、無味無臭なC が流れていた。

「ただいま」

あたしが、キッチンの椅子に座つて、これからどうしようか？なんて事を考えている時、一人の少年の声が聞こえた。

どうやら、ここに住む延光の家族の一人なのではなからうか？と思うとあたしは此処を立ち去らないといけないと言ふ衝動に駆られた。が、延光が、

「お、帰つてきよつたな」

バタバタとその声を聴きつけると、すぐさまこのキッチンから飛

び出して行った。

何か、こう、仲の良い家族劇でも見ている気がして、またあたしは不愉快な気分になった。今頃、お父さんと、お母さんは何をしてるんだろう？そんな事が頭を過ぎった。

「今、珍客が来てるんや、おまえも挨拶しとき！」

玄関の方からそんな声が聴こえて来る。珍客にはちよつとムツとした。が、逃げるわけにも行かなくて、あたしは黙って椅子に座っていた。

「葵っち。オレの弟分の隆りゅうや。仲良してやってや〜」

延光とは違って、引つ込み思案っぽい少し陰のある、色白の少年だった。あたしと同じくらいの歳に思える。と言うか、少年なんだけど、少女にも見えなくも無い？第一印象はそんな感じだった。

「こちら、葵っち。隆、挨拶しいや？」

その隆と呼ばれた子は、一瞬ためらった感じで、一瞬だけあたしの目を見て直ぐ目を逸らした。

「こんにちは。初めまして、須藤隆と言います」

それだけ言うと、黙り込んでしまった。

「こいつ、人見知りするんや、でも、慣れたら人懐っこくて可愛い奴なんやで？」

言わなくても、少なくとも延光に比べたら人間らしいわよ！なんて思った。が、敢えて言わないでおいた。

「母さん、いつ帰ってくるんやろうな〜？今夜から、葵っち此処に住むことになるちゅうのに？」

「え？」

あたしは、呆然と立ち尽くしてしまった。

誰が何処に住むだつて？てか、延光あんな何を言ってるのか判ってるの？泊めるっていうだけの話なら尚且つ、住む？家出少女を引き取るなんて有り得ないだろうに！

「え？つて、そうしないと何処で寝たり起きたりするのさ？葵っち、ここの土地のもんや無いやろ？オレの勘だと少なくとも、東の人間

や。間違つとるか？」

その質問には答えられない。あたしは、素性をバラす訳には行かない。ま、その内搜索の手が広がるだろうけど……

「のぶちゃん？ 葵さんって、もしかして家出してきたの？」

ほら……普通そう言う風に反応するのが当たり前なのよ！ 言ってしまうところで、

「ふん。なら、お母さんに相談すれば良いよ」

って、隆さんあなたも何を言ってるんだね？ あたしが呆然としてしまったのは言うまでも無い。

それからが大変だった。引つ込み思案の人見知りをすると言う隆が、あたしの目の前に座ってあたしをジッと見ていた。挨拶した時目を逸らした人間とは思えないほど、あたしをじっくり観察もしている感じであった。

でも、話そうとはしないのよね？ 一体何を考えているのか、あたしには理解できない。だから、なるべく気に掛けないように努力して、延光と話していた。

「だから、あたしは、ここに住むなんて事は出来ないって！」

「じゃあ、帰るんや？ 家に？」

「帰れないのよ！ 無理なの！」

と言う口論を延々とした。で、切り込み隊一番長って感じて延光はこう言った。

「んじゃ、帰れない理由はなんや？ 親と喧嘩した？ 嫌な目にあつた？ オレは、葵っちの事は何も知らないわけやし。そっちから話さん限り判らんわけや。それが嫌なら、住めば良いって言ったんや！ おかしいか？」

結局そこに行き着いて、あたしはグウの音も出なかった。

話してしまえば、きつと、家に連絡が行って、あたしは家に帰らざるおえなくなる。だって、あたしは家に問題を抱えて家出した訳じゃ無い。只のあたしの我侭に過ぎない訳で……勝手すぎる良い所

の家のお嬢様同様の家出である。

なら、お金を借りて、此処を出て、また、旅を続けると言う手はある。が、そんなお金を貸して貰える訳が無い。道理が通らない話だ。

こんな口論をして得られる物は、何も有りはしない。でも、此処を出てしまえば、あたしは路頭に迷うしかない。そう思つて、

「判ったわ。取り敢えず今日は、此処に泊まらせて貰うことにする……」

我が身可愛さ。の決断。でも、明日はどうする？ 全く先が見えないのよね？

「全く……強情やな〜葵っちは。泊まるじゃなくて、住む。でええねん。なんも困るもんは此処の家にはおらんのやしな〜な、隆？」
そう言つて、隆に話を振った。

「……」

何も言わずに、ジツとあたしを見て隆は、頭を縦に振った。

ああ、よく判んない家だ。そしてこの連中は！

そんな事を思っていると、勢い良く玄関の引き戸が開く音が聴こえた。

「ただいま〜」

凄く賑やかな声が聴こえてきた。何人いるんだろう？ ってくらいザワザワとして、また声も幼く感じた。

「ただいま！」

その後、少し歳を取った感じの女性の声が聴こえた。もしかして、延光や、隆のお母さん？ とあたしは思い、身構えた。そんな状態のあたしを二人は無視して、

「おお〜帰ってきたで〜我らの主が〜！」

延光は、隆を連れ立ってテーブルの椅子から立ち上がり、玄関の方へと歩いていった。

あたしは、この後に起こる事を考えて、そして身体を硬直させた。きつと、非難の目で見られるんだと思つていたからだ。

でも、全く違った。

「あらゝ珍しい。お客さん？」

老婆までは行かない、初老のおばさんは、微笑ましい珍客とでも見るように、あたしを見てそう言った。

どう考えても、この人が延光や隆のお母さんだとは思えなかった。一体どういう家庭なんだろう？とあたしの頭の中は想像を働かせた。そして、その前に並ぶ五人の五歳くらいの子供達。

「あの子、母さん。この子葵っちって言うんやけど。今日から家の^{うち}子になるんやて！構わんやろ？」

あたしの隣にやってきた延光がいきなり説明し始めて、あたしは今のあたしの立場というものが意識として戻ってきた。

「そうねゝでも、葵ちゃん？お家はとうしたの？ご両親は？」

その言葉に、あたしは何も言葉が紡げなかった。この延光のお母さんと言う人のかもし出す雰囲気は、穏やかで、あたしを尋問しようと言うような素振りを全く見せなくて……かえってこういう大人は、苦手だ。

「そうね。何も言いたくないのなら良いわ。自分で決めることですものね？わたくしは何も言えないけど、葵ちゃんがそうしたいと言うのであれば、家においでなさい。歓迎するわ？」

そう言って、目尻に皺を寄せながら微笑む。

何も言えない自分が腹立たしくなる。けど、それは延光のお母さんのせいではまったくない。自分自身に腹を立てている事に薄々気がつき始めていた。そして、きつとこの人には何もかも話さなければならぬ日があるのではないだろうか？と言う気がしてくるから不思議だった。

「済みません。何も申し上げられません。それでも、あたしは此処に居ても良いのでしょうか？」

あたしは、ただ一言最後にそう言った。

「勿論よ。歓迎するわ」

そう言って、延光のお母さんは、優しくあたしを包み込むように微笑んでくれた。

「おっしゃ〜！んじゃ、ご飯ご飯！隆？優香と浩二と凜と鈴音と涼に手を洗うように言って洗面所にゴー！オレは、亜希子姉ちゃん呼んで来て、ご飯の準備するように言っとくわ〜！」

そう言って、延光と隆達は各々自分の持ち場へと散って行った。

「どうぞ、お座りくださいな？」

後に残ったあたしに、延光のお母さんは隣の部屋の、さっき見たテレビが有る居間の座布団に座る様に促した。そしてこう言った。

「安心なさい。此処はね、家を失った子達で一杯なの。だから、葵ちゃんがどういった経緯で此処に来たのかは判らないけれど、追い出すようなことだけはしないと約束するわ？でもね、葵ちゃん。あなたは家出をして来たのでしょうか？それも、お家に何か問題が有るとかではなく。今まで此処に来た子達と、あなたは似てるようだけど、全く違うとわたくしはちゃんと判るわ……」

あたしは、その言葉でハッと気がついた。この家は、養護施設なのだと。そして、それを見守ってるこの人が、お母さん役を買って出ているのであるのだと。この人の洞察力は鋭い。伊達に延光達の母親役をやってるだけはある。全てお見通しなのであるのだらう。

「あのね、一つだけ確認させていただけける？お家は、この辺りでは無いわね？」

あたしは、その言葉に素直に頷いた。

「そう。きつとお家の方は心配しているわ。もし宜しかったら、連絡先を教えていただけけるかしら？わたくしがちゃんと、了解を得るから。どうかしら？」

そう言ったこのおばさんは、不思議な力を持っているとあたしは思った。頑^{かたく}なだったあたしが、この人には連絡先を教える気が起こったのである。

おばさんは手帳に連絡先の電話番号と名前を控えた。

「そう。ここね。ねえ、葵ちゃん？どのくらい此処に滞在したい？」

今は丁度夏休みであることだろうし、一ヶ月位ならわたくしも面倒見ることが出来るわ？どうしたい？それを決めるのは葵ちゃん、あなたの意志よ？あなたの本当の気持ちを聞かせてくれたので良いのよ？」

おばさんは、あたしがどうしたいのか？それを考慮に入れると言う事を言いたいのだろう。

あたしは、どうしたいのであろうか？連絡を入れたら、あたしは家に帰らないといけないという気持ちに追い詰められるかも知れない。それに、カードも失った事を伝えないといけない。そうになると、家からお父さんとお母さんが此処にやってくるだろう。そして、この人に頭を下げるに決まってる。そう言うことには敏感な両親だ。

「あ、あのう……あたしは、今帰るわけにはいかないんです。まだ自分の旅を終えてないから。それに、お父さんとお母さんがきつと連絡を入れると、此処に押しかけれると思うんです。ご迷惑をおかけするわけには……」

まだ纏まってない頭で、言葉を紡ぎ出すのに苦労して、言いたい事がチンプンカンプンだっただろうに、

「そう。葵ちゃんの考えてる事は大体判ったわ。葵ちゃんは、今自分に必要なことをその手で掴みたいのね？そう言う時期が来るのが早すぎたの。それを悔いることは無いわ。大丈夫よ。きつとわたくしが上手くお話をして差し上げるわ。安心なさい。ここにご両親が来ることを心配してるのなら、大丈夫。おばさんが、上手くお話できるから。今日から、一ヶ月間は、美空の姓から須藤の姓を名乗りなさい。葵ちゃんが探してる物をその中でちゃんと見つけるの。それが今のあなたのやるべきことだとわたくしは思う。大丈夫。延光達にこの事は何も言わないから。私の胸に仕舞い込んでおくわ？それで良いわね？」

目の前の霧がスーッと晴れていくような気がした。この人は、学校の先生なんかより人を安心させることが上手い。お任せしても大丈夫のような気がした。

「はい」

あたしは、躊躇することなく返事をした。そして、一つ言い忘れていた事を言った。今自分が無くしてしまった、手持ち金とカードの事を。

「それは、何処の口座？わたくしが、指し止めするように連絡を入れるわ」

「え……と」

あたしはショルダーバックに手を伸ばした。そして一つのポケットに収まった、唯一残った通帳を見せた。

「判ったわ。安心なさい。カードだけ持って行っただのなら、暗証番号が無いと引き出しは

困難よ。今ならまだ間に合うと思うわ」

おばさんは、そう言っただけであたしの背中に腕を回して抱きしめてくれた。少しお香がかった匂い。それが染み込んでいる衣服と、肌のぬくもりが、よりあたしを安心させた。

「明日の朝、こっそりわたくしの部屋にいらっしゃい。連絡の事後報告をしてあげますから。部屋は、二階の奥の間よ」

そう言った時、延光が亜希子さんを連れてやって来た。

「ご飯の支度、まだ出来てないんやってさ」亜希子姉さん何やつとったんや？ご飯だけしか炊けてないやないの？」

さっきのご飯はあたし頂いたんだけど、大丈夫なんだろう？さう思っただけ、心配になった。只でさえ人数の多いこの家だ。炊いているご飯も限りがあるだろう。

「あの……あたしはさっき食べたから、もう良いよ？」

と、延光に言った。此処に滞在することになるのなら、それなりに自分の立場も考えないといけない。

「葵っちゃん、昼ご飯やっただけさ。さっきのは？ちやうどの？」

延光はそんなの有り得ないとも言っただけに目を細めた。

そりゃそうなんだけど、足りなくなるのは問題だ。

「葵ちゃん？ご飯は余るくらい炊いてるから心配しないでね？ただ、

おかずがね、ちよつと人数分無いかも……あ、延光君のおかず減らしちゃおうか！」

亜希子さんはそう言つて笑つた。

「おいおい！オレは食べ盛りの男なんやで？そんなん有りかいな！亜希子姉さんこそ少しダイエットしたいって言つとったやん！そう、少しくらい減らしましょ？」

冗談言つてケタケタと笑つてる延光はキッチン内を怒つて追い掛けてくる亜希子さんから逃げ回つてゐる。その様子を見てると、此処に居ても良いのかも知れないと思える。

何だろ？こういう感じの他人の寄り集まつた家庭。皆自分と他人を分け隔てなく見てゐるし、尊重もしてゐる。ここには自由という物があるように思えた。

延光が、あの時、

『昔の自分と同じ目をしてる』

といった意味が判つた。延光の真の素性は判らない。でも、家を失つた「親が居ないと取れる。両親を何故失つたのか？そして、此処に来た経緯さえも判らないけど、少しだけ、延光の事、ここに住む隆やその弟、妹達の事を知りたいと思つた。

これは興味というより、あたしが望んでゐる事なのだと感じた。そんな時、隆と、その兄妹達も手を洗い終わつて帰つてきた。ワイワイと楽しげに、キッチンへと入つてきた。

その中にある無関心でゐた隆のあどけない笑顔を初めて見た。こんな風に笑ふことが出来る子なのだと判り、それが意外で、今のあたしをととても嬉しいという気分にした。

#6 団樂

夕飯は結局七時半頃に始まった。

こんな大勢で食べる夕飯なんて初めてだった。

あたしの家は三人家族。そうあたしは一人っ子である。親戚の家は余り訪れる機会もなく、従兄弟と会話を交わしたのも余り覚えが無い。血筋関係と言う物に無縁だった。

だから、この夕飯は不思議な感覚だ。これから一ヶ月こんな風に過ぎていくのかなあゝなんて考えると、とても心が和む。つまり、あたしはこういうのを望んでいた事になる。

「えと、葵……お姉ちゃん？一ヶ月だけなの？」

と、優香ちゃんが訊いてきた。この子は目が丸くって大きくて、五人の子供の中で一番人懐っこい感じの子である。多分、延光と隆の次にお姉ちゃんではなかるうか？實際歳を訊いてないからあくまで想像だけど。

「うん。そうなの。短い期間だけど宜しくね？優香ちゃんは、あたしが居て不満？大丈夫かな？」

「そんな事無いよ！家族は多い方が楽しいもん！わたしね、歳の近いお姉ちゃんって呼べる人欲しかったんだゝえへ」

お茶碗を持って、自分の頭を小突く優香ちゃんの仕草は可愛かった。あたしも欲しかったよ妹。心で唱えてると、

「あおいおねえちゃん。わたしもうれしいよ？ゆうかおねえちゃんって、ときどきいじわるするからきらい……」

おいおい。鈴音ちゃんは言った。この子が一番年下なのかも知れないな。色白でほっそりとした身体からは考えられない一言が飛び出した。嫌いつて……

「でも、なかがわるいわけじゃないんよ？ゆうかおねえちゃんはじこしゅちようがつよいからこうなるだけだから、ね、ゆうかおねえちゃん？」

「そう言うこと！」

おおっと、こんな幼い鈴音ちゃんが自己主張って言葉を知ってるとは……しかも、それを理解した上で、優香ちゃんと会話をしている？中学生も敵いませんわ。

お隣どうして座っているこの二人の間には仲が悪いじゃなくて、どこかでちゃんと繋がってるんだと知った。うん。言葉で好き嫌いが良い合える同士って、本当は仲が良いのかも？なんて思えるくらい、この二人は心の奥底で繋がっているんだろう。目の前の二人を見てそう思った。

すると、はす向かいの方で、喧々囂々の会話が始まった。あたしは何となし気にその方を見た。

延光が熱弁を奮っていたのである。

「だからやな！オレはこの夏に、絶対四国回りをしたいねん！」

あたしの隣にいる隆はその言葉を聴いてるのか聴いてないのか？黙々とその熱弁を無視し、おかずのほうれん草のお浸しを箸で摘んで口に静かに運んでいた。

話の相手はどうやら隆では無いらしい。浩二君と、凜君、涼君であるみたいだ。

自分より歳の離れた子供相手に熱弁を奮うというのが凄く子供じみてるけど、あたしは、会話の内容に耳を傾けずにはいらなかった。

「母さんには了解とつとるんや！何か文句あるか？」

「ひで〜よ。オレら置いていく気か？延光兄ちゃんが、そんな冷酷な奴やなんて知らなんだわ！」

浩二君が箸をブンブン振り回して抗議してる。それを、

「箸は、振り回すものじゃないよ？浩二？」

と、隆が見てるのか見てないのか判らない表情で言った。

「いつから行くの？」

凜君が、ボソッと訊いた。浩二君と違って、聞き分けの良いようなどちらかと言うと、隆とよく似た雰囲気を持っている。

「せやな〜おい、隆！いつごろから行くか、考えたか？」

あ、何？隆も行くわけ？それにしては、隆ってかなり淡泊な表情でいる訳で……あたしは延光だけが行くのかと思ってたからこの話に参加してないと思われる隆は、関係ないと思っていた。

「う〜ん。どうしようか……」

「隆兄ちゃんも行くの？」

言葉を濁らせている隆の言葉に、涼君が割り込んできた。涼君は、活発な延光や、浩二君寄りな感じなのに、どうやら隆に浸透してる感じで、意外だった。

「お前な〜隆！一度決断した限りは、ちゃんと最後まで考えんかい！お前のその態度って、
見てるこっちが萎^なえるわ〜」

と延光はお茶碗を叩き下ろす様にテーブルに置いた。

こうやって改めて見ると、自己中心的で、物事に真正面から向かう延光と、何を思っているのか理解不可能で静かな隆の全く違う個性が此処にあるんだなって思った。でも、決して仲が悪いわけではなくて、それぞれがちゃんと主張はしてると思えるから不思議だ。

「はいはい。そこ。延光と、隆？お静かに。わたくしは、許可しましたが、計画性のある旅をなさいと言ったでしょう？まだハツキリしてないのであれば、お互いきちんと話し合いなさい。浩二、凜、涼？そう言うことだから、お兄ちゃん達は旅行する予定なの。妬くことは無いわ？あなた達は、わたくしがちゃんと旅行に連れて行つてあげますからね

？」

この家の主人の言葉で、今までのやり取りは静まり返った。流石主だ。延光も何も文句を垂れずに、今度は違う話題を弟達に振りまく。一家団欒の席はこうやって過ぎて言った。

「ごめんなさいね？葵ちゃん。こんな寝巻きしか用意できなくて……」

お風呂に入ったあたしは、亜希子さんに手渡されたパジャマを着た。あたしの背が小さいから、袖を通してみるとブカブカだった。

「いえ。勝手にお邪魔してるのはあたしなんです。それに、服の替えが無いのもあたしが全て悪いのですから、亜希子さんにそんな事言われると、辛いです」

あの大きな鞆を、何故持つてこなかったのか？かなり悔やまれる。あれには色々とあたしの大好きな衣類が収まっていた。

だから明日、おばさんに理由を話して、岡山駅に取りに行つてこようと思つてゐる。今そう決断できた。

「そう言つてもらえると、良かったわ。寝室は、此処しかないけど良い？私と一緒に狭くなるけど……」

亜希子さんの部屋にあたしは間借りすることになった。木造作りのこの家だけど、亜希子さんが色々改良を加えているみたい。質素だけど、モダンに感じる部屋。壁紙なども拘つてるようで、色はアイボリーを基調にしていって亜希子さんの性格を現している様に清潔感があつてあたしは好きだ。

「あたし小さいですから！狭くなつて無いと思います。すみません。亜希子さんに迷惑掛けちゃつて……」

二人、畳の上に敷いた布団の上に正座してまるで新婚夫婦のような挨拶をしている感じだった。そう思つてあたしはクスツと笑つた。

「あ、変ですよ？こんな挨拶！」

「そうね！」

亜希子さんも笑つた。きつとあたしと同じ事を考えたのかもしれない？そんな事を考えてあたしは布団に横になった。そして電気を消す亜希子さんに言つた。

「亜希子さんは、此処の人なの？え……と、おばさんを『先生』つて呼んでたのを聴いたから、判らなくて……」

気を悪くするかなと思つたけど、

「先生は、あたしの小学生の時の担任だったのよ。だから、思わず今でも『先生』つて呼んでたりするの。この年じゃ『お母さん』っ

てどうしても言えなくって」

亜希子さんは別段不快な気持ちは無いようだった。ま、この暗闇で表情を読み取ることは出来ないけど。

「葵ちゃん。先生に此処の事大体聴いてるんでしょね？……私は、高校の時に親が離婚してから、グレちゃってね。で、先生に再会してから、ここに住むようになったの」

「亜希子さんが、グレてたんですか？」

布団に二人横になってこうやって話してるのを考えると、何だか変な気分。小学生の時の友人とお泊りごっこをした時以来の様な気がした。自分の秘密を打ち明けれる。そんな雰囲気だ。夜ってそう言う開放感って物があるのかも知れない？なんて思う。

「そう。この私がグレてたなんて思えないかも知れないわね？めっちゃくちゃだったの。あの当時は……警察沙汰までやらかしたわ。レディースのヘッドなんてやってたしね？」

そう言ってくすくす笑った。あたしはレディースって物が何なのか判らなかつたけど、警察沙汰になるんだから、凄いことしてたんだろうなと思った。

「でもね、先生に再会して、話を聴いて貰って、今の私は存在するの。もし再会しなかつたら、どん底の人生歩んでたと思う。って、葵ちゃんには過激かな？」

そう言って亜希子さんはふふつと笑った。

幸せだよ。という感じの笑い方だった。

「葵ちゃんも、一ヶ月間だけだけど、此処で色々見ていくと良いよ？何かが見つかると思うからね？」

そう言った亜希子さんは、布団の中にあるあたしの手をギュッと握ってきた。あたしはドキッとしたけど、それが心の触れ合いの一つだとも言えるようなものだったので、あたしはギュッと握り返した。深い眠りがあたしを包み込む。

明日の朝、あたしはおばさんの話を聴きに行かなければならない。それでも、亜希子さんの話を聴いた今、安心して眠りに就くことが

出来た。

#7 隆の生い立ち

「ご両親と連絡が取れましたよ。葵ちゃん。あなたの思うようにするよ。との事でしたよ。だからこの一ヶ月間、思うとおりになさい」

朝起きて、あたしは、二階の奥の部屋にいるはずのおばさんに会いに行った。そして、まるで書斎のようなその部屋であたしはその言葉を聞いた。

どうやって、あの両親を納得させたのか？まるで、魔法をかけたかのよう……かなり疑問だけど、きつと、このおばさんの持ち味が、あたしの両親を納得させたんだと思う。

「怒ってましたか？馬鹿な娘だと……」

「親が、子供を心からそんな風に思う事は無いと思うわ。葵ちゃんが生産を産んで育てたら判ることでしょうけど。確かにこの世の中に馬鹿な大人は沢山居るわ。でも、わたくしは、信じてるの。そんな大人ばかりで成り立っていることは無いって。ね？」

おばさんは少し辛そうに微笑んでそう言った。

「そう、ですね。あ、その……あたし、岡山駅に荷物を取りに行きたいんです。昨日……」

あたしは、昨日岡山駅で自分が仕出かした事を包み隠さず洗いざらい話した。

「まあ、それは大変ね。わたくしが、駅の方に連絡を入れておきますね……そうね。お昼はわたくしが行く事はできないから延光が、隆と一緒にいきなさい。あの子達は岡山のこの地に詳しいから」

そう言っ、微笑んだ。あたしは、この土地には不案内だから、誰かに来て貰うのは確かに心強い。だから、おばさんとの話を終えると、一階の、皆が集まっている談話室兼居間に足を伸ばした。

「よう！おばようざん！」

延光は歯ブラシを口に含んだままあたしを見てその声を掛けてきた。そして、洗面所に駆けて行った。遠くでグルグルガラ音を立ててるのが聴こえる。暫くすると帰ってきた。

「葵っちの歯ブラシ、昨日渡されなかった？」

「あ、うん。貰ったよ。亜希子さんに……」

「なんのこっちゃ？」

「歯磨きせえへんの？」

「え？ご飯が終わってからするよ？」

ふん。という風にあたしの目を見てきた。

「歯磨きつて、起きたらするものやと思つとつたんやけど、ご飯食べたらするものやるか？」

全く訳が判らない……

「どつちでも良いんじゃないかしら？」

「あ、そうやな？人それぞれちゅうもんやしな」

でも納得がいつてないみたいな表情に、納得出来てない気がするのはあただけか？

「顔は洗ったん？」

「うん。洗ったよ？」

全く何考えてるのやら？延光の思考回路があたしには理解不可能である。でも、こいつって憎めないんだよね？意志がハッキリしてるから、嘘つくタイプに見えないし、此処に連れて来たのもこいつだし。ある意味有り難い存在なのかも知れない。

「あ、今日、岡山駅に行きたいんだけど、延光君か、隆君のどちらか自由利く？」

「岡山駅？オレは大丈夫だけど？暇もてあましてるしさ」

夏休みの宿題はどうしたんだね？と言いたかったけど、あたしも同じだし言える訳なし。

「おーい！隆？お前は今日空いてる？葵っち岡山駅に用事なんだとさ？」

すると居間の中心に居る隆に向かって延光は問いかけていた。

「うーん……大丈夫だけど？」

隆は、余り関心がないような返事をした。

ちよつとあたしはそれが気に入らなかつたけど、まあ、そんなものかもね？と思った。まだあたしはまともに隆とお話したことあるわけでも無いんだし？

「んじゃさ、ご飯食べて、勉強終わったらお昼から行こうや？あ、そう言えば、葵っちって何年生？」

勉強？こいつからその言葉が出てくるとは思えなかつたから、少しだけ見直した。

「え？中二だけど？」

ま、隠すことも無いからそう応えた。

「ラッキー！オレ、一年生なの。勉強教えて？」

前言撤回。小首を捻りながら可愛く頼もうとするな！あたしは苦笑いしながら『良いよ』と言った。

「ばか者！何でこのくらい解からないの？」

あたしが答えてばかりじゃないか！

数学の勉強を見ると言う事で、あたしは勉強室に通されて、座椅子用の机に向かつている延光の頭を今にも殴りそうな勢いで怒鳴っていた。一年下なら、何も怖い物がなくなつたのも手伝って、言葉もさばけてしまった。

考えてみれば、男の子とこういう会話をしたこと無かつたなとは思うけど、何だか延光の場合、出逢いが出逢いなだけに、男の子という印象が無い。何だか気が知れた友人のような感じ？

「数学苦手なんだよ！素数とか、方程式とか……チンプンカンプンなの！将来こんな物必要なのか？足し算や引き算、掛け算、割り算が出来たら十分じゃん！」

ってそんな事言つても、数学勉強してるんだから仕方ないだろう！文句なら文部省に言つてくれ！とも思ったが、あたしだって数学は苦手なのよね。実際……

「延光君？勉強はちゃんとやらないと、後で痛い目見るよ」と言う事で、このXを、ここで移動させて……」

あたしは、ま、判る範囲の事を教えるしかなかった訳で？一番苦労した数学の勉強は終わった。

丁度その頃には、お昼ご飯の時間になり、あたしは、延光と共にキッチンに向かった。

食事を終えたあたしは、部屋に戻ろうとする延光を捕まえて、

「時間大丈夫？」

と、問いかけた。

「あ、そうや、岡山駅だったよな？んじゃ、隆呼んでくるわ！」

延光は、ニツと笑ってバタバタ隆を呼びに言った。

隆は、一分後に延光と一緒にやって来た。余り浮かない顔をしていたので、嫌なら来なくても良いのにと思ってたけど、延光が背中を押してるからあたしは何もいう気がしなくなった。延光の強引さって一体何処から来るのかしら？と思うよ。ホント。

あたし達は、自転車で岡山駅まで行く事になった。というか、結構距離があることを知った。あたしは、駅員さんから逃れる為に無我夢中だったからそんなに遠いと思わなかった。が、改めて地図を見てゲッソリしてしまった。もうこの距離を走るのは勘弁……

「自転車、亜希子さんの借りたから……」

延光が自転車置き場で自転車のチェックをしていると、隆があたしにボソツとこぼした。

「あ……ありがとう」

前籠のあるママチャリという物だった。でも、綺麗に磨かれててあたしはありがたかった。

隆は、青い自転車で、ギア付きのを用意していた。どうやら私物のようだった。

延光は、黄色の昨日あたしと出逢った時に乗ってたのと同じ物を用意して、一番先頭を切って走り出す。

「んじゃ、行きますか？」

こうして、のんびりとあたし達は目的の地、岡山駅へと向かった。景色は流れてゆく。東京のあたしの家の周りと変わらない家々。でも、一戸建ての家が多いな〜なんて思った。それに緑も多い。住みやすい環境がここにあるなと思った。

少し行くと公園が有った。あたしの大好きな公園より広い気がする。遊具も沢山有るし。でも、あたしの好きなあの公園みたいな富士山は無かった。滑り台はごく普通。

何て事を考えて、あたしは周りを意識しながら走った。

あの時は、一気に走って来たから、周りを見るなんて事が出来なかった。こうして落ち着いてみると、色んな発見が出来るのに……そう思って今を楽しんでいる自分に気が付き、不思議な気持ちになる。

そこから十分ほどしたところに、商店街があつた。

「なあ、何か買って行かんか？おやつの時間に食べたいしな〜」

自転車を急停止して、延光があたしの前で止まった。

「あ、うん。でも、あたしお金持ってないよ？」

「う〜ん。そうなんや……」

「じゃあ……ボクが買ってあげるよ。のぶちゃんはお小遣い決まっているだろうし？」

と、隆が初めて気が利いた言葉を発した。

あたしは、驚いて、

「え？いいよ……あたしは、食べなくても平気だし……」
と躊躇った。

「良いわけは無いでしょ？二人だけで食べる訳には行かないもの……」

隆は、ちよつと不機嫌に言った。あたしにはこの隆の事は本当に判らない。何故、不機嫌な顔したんだろう？

「んじゃ、決まり！その駄菓子屋さん美味しいの沢山有るから、買って行こうやないの！」

と言つて、お店の前に自転車を止めると一目散で延光は中に入つていった。あたしは、少し躊躇つてたけど、隆が延光の後に従つて自転車を止めたので、あたしもそうせざるおえなかった。

駄菓子屋さんの中は、テレビで見る浅草みたいな下町のお店屋さんみたいな雰囲気だった。あたしは初めてこういう店に入つた。

表に並んでいるのは、延光が言うにはガチャガチャと言うカプセルの中に玩具が入つた物だそうだ。中は中で、金平糖や、烏賊の薄っぺらいお菓子や、丸いガム。色んな大きさの飴や、チョコレートなどが並んでいた。あたしは、暑い夏に備えて、ナイロンに入つたジュースのようなアイスを買つた。延光は、レモンシロップのカップに入つた力キ氷のアイス。隆は、色つきの大きな丸いガムを五個ほど買つた。

後で気がつくことになるが、この暑さで、カップ入りの力キ氷アイスを買つた延光は泣きを見る羽目に合うのだけだね。

そこから、また岡山駅に向かつた。二十分ほどで、あの商店街に着いた。あと少ししたら、岡山駅。昨日の駅員さんに会つのが少し怖いけど、ここは腹を括るしかない。と言う事に今更気がつくあたしも、ちよつと鈍感だったかも知れない。なんて反省してみる。

そして無事到着。あたしの大事な鞆を返してもらうべく、岡山駅構内、あの、駅員さんのいる部屋へと足を向けた。

「あ、隆？お前、葵っちに着いて行つてやつてくれへん？オレ、ちと野暮用」

「え、良いよ。あたし一人で行くからさ」

つて言つてるそばから、延光は一人で勝手に行動してしまつた。残されたのは、勿論あたしと、隆。

「あ、隆君？あのさ、あたし一人で大丈夫だから」

ちよつとさっきの不機嫌顔が頭に焼き付いて忘れられないあたしは、隆にここで待ててもらおうと思つて、話し始めたんだけど、

「……ん。じゃあ行こうか？」

と、あたしの前に一度はだかつてから、ズンズンと、駅構内と入って行った。

「あの、ちよつと！」

あゝん。よく判らない！この隆が……と思いつつ、あたしも負けじと後を付いていったのである。何だか、立場無いじゃない。あたし……とも考えながら。

駅構内は、人で混み合っていた。あたしは、隆がその波をスルリとすり抜けて行くのを後ろから眺めた。何だか慣れてるとでも言う感じだった。あたしはモタモタと人にぶつかりながら、その波を超えようとして、隆の後を追った。そして、終にあの場所に辿り着いた。

「此処からは、あたしが行くから！」

でも、隆は、勝手知ったる。と言う感じで、その部屋の中に入ってしまった。

「……」

変な子だ。全く……

先に入った隆は、その部屋で、結構年を取ったご年配の駅員さんと仲良く話していた。

「よう、隆君やないか！久しぶりやな！大きくなって！」

一体どういう繋がりなんだろうとも思ったが、あたしは、今は隆の事より自分の事に集中しようと思い、昨日の侘びも込めて、

「済みません。昨日、此処に来た者ですが！荷物を取りに来ました！」

裏返りそうな声を抑えつつ、頑張って大きな声で言った。

「ああ、昨日のお譲ちゃん」

と対応してくれたのは、あたしの切符が無いと公言したその駅員さんだった。

「須藤さんから電話で聞きましたよ。切符の件は、もう良いですからね。そうそう、荷物

は此処にちゃんと保管してますから、一応署名だけ下さいね?」

と言つて、あたしにその紙を渡した。

「名前……書かないと駄目ですか?」

「うん。ごめんね。書かないと、この荷物の受け取りがちゃんとなされました。と言う証明にならないからね?」

訳ありなのだと聴かされてるんだろう。だから、あたしは、迷つたけど、実名の『美空葵』という名前を書いた。

「それじゃ、この荷物、ちゃんと返したよ? 良い鞆だね。これ?」

駅員さんは、自分も欲しいといった感じでそう言つたみたいだった。あたしは、

「そうでしょ? あたしの宝物なの!」

と、笑顔でそう言つておいた。そして、その駅員さんを捕まえてあたしはコソつと問うた。今、この部屋の者達が、隆君に目が行つていたから。

「あ、……あの。隆君つて此処の人達と仲が良いんですか?」

すると、駅員さんが、

「え? あ、うん。彼は此処の申し子だから」

「?」

あたしには意味が判らなかった。申し子つてなんでしょう? よく利用してるとか? でも、JRでしょ? この駅は……ますます隆の事がわからなくなった。駅員さん達と、隆が話を終えると、隆はあたしの存在を思い出したかのように、

「葵ちゃん? 行こうか?」

と言つた。

「あ、うん……」

あたしは、先に出て行く隆の後に続いた。

「驚いたよ。隆君つて、駅員さん達と仲が良いんだね?」

あたしは、隆の気持ちを察することなく、そう言つた。

「……葵ちゃん。隠す事は別に無いんだけどね。ボクは此処に捨てられてたんだよ……」

あたしは、その言葉を聴いて、二の句をつげなかった。今、何て言った？の？

「産まれて、三ヶ月くらい経った朝、此処の駅員室の前に捨てられてたんだって……名前だけ書かれてた紙がダンボールと一緒に入ってたそうだよ。ま、今では関係ないことだけどね」

捨てられてた？それをまるで何事も無かったかのような冷静な表情で言うこの隆は、一体どう言う人間なんだろう？と思った。

「別に、不思議じゃ無いだろう？この世の中、そう言った事件って多いんだしね？それに、コインロッカーに捨てられてた。と言うよりははまだ、マシだよな？」

そして、すくっと先を急ぐように隆は歩き出した。

コインロッカーってのも酷い話だけど、此処に捨ててゆく親も親だ。その事をどう思ってるんだろう？もう人間なんか信じられないだろうに……

「ねえ、隆君？人間不信にならなかった？」

あたしは必死で後を追いつけて、問いただした。何でこんな気持ちになったのか判らない。こんな風に人のことを詮索するようなことをするなんて……でもあたしにはそう言う状況が判らないから。

「ボクは、恨むより、情けないと思ったから……それに、物心ついた時には、もう、『子羊園』の住人だったしね。寂しい思いはしなかった。お母さんや、亜希子さんが居てくれたし……それに、一つだけボクはツイていた事がある。このボクにちゃんと、お金を支払ってくれてる人物が居るってこと。多分親じゃないかなって思うんだけど。顔を出さないから、もう、会うつもりも無いんだろうし、このまま利用させていただくことがボクにとって、一番良いかなって感じかな？」

凄くサバけた返事だった。

こんなに長い事言葉を紡いだ隆を見たのも初めてだ。

「隆君はそれで良いの？会いたくないの？」

その答えに、冗談だろう？って表情をした。あたしはそれを、ど

う受け止めて良いか判らなかった。

「そうだよね……育てる資格の無い親だもんね？逢いたくないか……」

お金だけ仕送り。それ以外は、音沙汰なし。お金が全てだとあたしは今の今まで思っていた。だけど今は心の問題だと気付かされた。そして動揺する自分がいる。

お金が全てだと思っている自分が、否定しなければならない状況を今、この話の中で作り上げてしまった。それが尾を引いたから、だんだんこの世の中が虚しく感じられて、そして、愛が欲しいなんて事も考えて、訳が判らなくなった。だから次のように考えた。

もしかして、世間体が悪いとかそう言った内容で捨てられたのかも知れない。そこまで考えて、あたしは、隆に話すのを止めた。

あたし達はそんな雰囲気のまま駅構内を出て、そしてお日様がサンサンと照りつける駅前に辿り着いた。

「おーい！隆に葵っち！どう？荷物はちゃんと返して貰えた？」

元気の良い声が周りに響く。今の今迄真面目な話をしていたのに、ガラッと世界が反転した気分だった。延光が、自転車に跨って、手を振っている。それを見て、一瞬あたしは、野暮用だと言って去っていった延光が、実は、そんな物はなくて、ただ、隆に機会を与えてあげたのかなと思ってしまった。

頭、悪いけど、こう言う事に敏感なのかも知れない？

そう言えば、岡山駅に行くって言った時、迷わず隆を誘ったし。

あたしは、延光を見直してしまった。もしかして、こいつはあたしよりもずっと大人なのかも知れない。人のことを考えられるなんてとても凄いことだよ！

同じ『子羊園』で育ったなら、知ってるはずだよな？隆の過去の事も。だったら、そんな捨てられてた場所に誘うだろうか？普通可哀相だからとか、思い出したくも無い場所だろうとか。そう思っただけで避けるはず。でも、分かり合えてるから、こうやって誘うんだ。凄すぎるよ。延光！そして、こうしてやって来て、駅員さんと会話を

する隆も強い！

あたしは、今日一日で、この二人に好意を抱けると思ってた。

8 二者択一

「帰りに、岡山城行かね？」

駅のロータリーの所で、あたし達は、おやつの時間と称し、途中駄菓子屋さんで買った、お菓子を袋から取り出した。

あたしのは、もう溶けてしまつて、ただのジュースになつてしまつてたけど、延光よりはまだマシ。延光のは、食べることが出来る状態じゃなくて、カップの中でレモン色の水がチャポンチャポンと鳴っている。仕方ないので、一回家に戻ってから、冷凍庫で冷やし直し。だから、隆のガムを二個ほど貰つて食べていた。

そんな時思い付いたらしい、延光の発言。

「岡山城？」

あたしは、素っ頓狂な声を上げてしまった。

お城なんて見て面白いんだろうか？が本音だった。

「隆、どう？」

「うん。ボクは別に構わないよ？今日は特別用事も無いことだし」

無表情にそう言った。

「葵っち、岡山は初めてなんじゃないの？良い所やで此処は！歴史に触れて見るのも一興やと思う！オレ、詳しいんやで？岡山城は！」

そう言つて、ツラツラと、歴史を語りだした。あたしは、それをふんふんと聴いてみた。

どうやら、岡山城は別名、烏城。金烏城。というらしい。時代は南北朝時代からその城は有ったとされているらしく、歴史深い。その時の当主は神高直で、その後、戦国時代に金光氏が居城としたらしい。その後また城主が変わり、宇喜多直家になったとか。

お城も、名古屋の白鷺城と比べられるらしく、漆黒の板張りでお城で、今年、国にも認められて、日本百名城に選定されたとか。

聴いてると、色々有るみたいだけど、行つて見ないと良く判らないと思つた。

「のぶちゃん？そんな説明より、行ってみるのが一番だと思うよ？」

隆は、小難しい事より、まず見ることを勧めた。うん。あたしもその方が良い。

細々としたことをまだ言うつもりだった延光だったけど、二人の意見ももつともだと感じたらしく、直ぐにこの場を離れて、岡山城へと自転車で向かったのである。

岡山城は、平地より少し高い所にあった。そして、思ったより小さかった。

でも、あたしは、この場所に相応しいお城だなと思った。白鷺城のように白を基調とした、綺麗なイメージは無いけれど、こう言ったお城もまた良いなと思う。

本丸の金の鯨（しほ）には驚いたけどね。名古屋の物よりは立派じゃ無いらしいけど、これが有るのとないのでは、格式はまた違ってくるのではなからうか？そんな事を考えてあたしは、延光と隆の二人と一緒に色々と見て回った。

こういう時間って今まで取った事が無くて、ちょっとした、歴史に触れてロマンという物があたしの心に広がった。

岡山は最高だよ！此処の土地を愛した人達の心が時代を重ねて有るのだと思った。

あたし達が、岡山城を見て回って、帰宅したのは、夕飯時刻くらいで、丁度良い時間帯だった。

夕飯は、カレーライスだった。鶏肉のカレーライスというのは初めて食べたけど、牛肉とは違って、あっさりしてて、肉の厚みもあり、あたしはこれも有りだなと思った。

そして、今日もまた、延光が四国巡りの話を延々としていた。隆はまたもや無視を決めきってしまったけど、あたしは逆に聞き入っていた。どうして、そんなに四国巡り（こたわ）に拘るのか？それが気にな

って仕方が無かったからだった。

「はいはい。延光？その話は、隆とゆっくりなさい。今は、もっと違う話をして下さいね」

？

終におばさんは、微笑んで嗜めた。

あたしは聞きたい事が沢山ある。もしかすると、あたしもその旅行に参加したい気分が襲われ始めていたからかも知れないな」と今は思う。そう、この時は、この二人に便乗して四国に行く事になるとは思ってもいなかったけれど……

夕飯後に、延光は隆と居間でゆっくりこれからの話を始めた。

あたしも何故かそれに加わることになる。優香ちゃん達と遊ぶのも楽しいんだけど、延光達と話してる方が、歳が近い分何だか落ち着くからかも知れない。

「んじゃ、取り敢えず、高松までは電車に乗って行くってのはどうや？」

延光は、心に描いてる旅行という物があるらしい。で、隆といえば、

「高松までって、その後はどうするつもり？」

四国は香川県、愛媛県、高知、徳島ってあるんだけど？」

あたしは、四国の名前を全部言えるかというのと、言えない訳で……この二人の会話に出てきた県名を覚えるのが精一杯だった。

「そんな所まで考えてないわ！とにかく回りたくないや。絶対に！」

「はいはい。のぶちゃんの気持ちは判った。でも、お小遣いが決められてるでしょ？それに見合う旅行を考えなくちゃ？」

隆は、行き当たりばったりの旅行はNGだと言っている。計算できない事はしないタイプらしい。実に堅実的である。

「んじゃ、お金なくても、ヒッチハイクすれば良いじゃん？」

「うわっと、凄い発言……」

「却下！お母さんにどう説明するつもり？納得してくれる訳が無い

でしょ？全く、のぶちゃんは、『当たって砕ける精神』なんだから……」

あ、それは隆の言ってることが正しい。ヒッチハイクなんてそんな事して上手く行く訳がない。あたしは、隆の良識に相槌を打つように聴いていた。

「そうか？良いやん。バレなきや……それに、オレ達は子供なんや。そんなコトで上手く行かない旅行って何や？」

でも、延光は引くことが無かった。頑固者だ。あたしは苦笑いしてしまった。

「あ、今笑ったな！んじゃ、葵っちはどうすれば良いと思うんや？」

「お小遣いでいける所を考えたら良いじゃん？延光って無鉄砲すぎるよ」

あたしは、自分の事を棚に上げてそう言った。あたしは今、無一文……なんですけどね？

「んじゃ、葵っちも一緒にくれば良いやろう？お手並みってのを拝見してみたいね」

それには承服しかねた。だって、あたしは無一文。そして、ご厄介の身の上ですが？

「あたしは、無理。無一文ですから」

何ておどけてはぐらかそうとした。が、延光は許してくれそうも無く、

「隆？旅費はお前の方はどうや？」

まさか、隆？またお金を出そうなんて言わないよね？あたしは引き攣ってる顔を戻す事が出来なかった。

「うーん。何とかなると思うけど？」

おい！男二人と少女の図ってやばいんでないかい！突っ込みを入れようとした時、おばさんが、居間にやって来てあたし達の会話に加わった。

「あら、旅行に葵ちゃんも行きたい？なら、こちらで出すことが出来ますよ？優香達の旅行も有るから、どちらに参加するか？考えて

みて。この家を少しの間空けないといけませんしね？」

と、それだけ言って、微笑んで去っていった。これには閉口してしまった。だって、一人この家で留守番なんて出来ないじゃないですか？

ということで、あたしは、どちらか一つの選択に迫られたわけである。

「どうするの？葵ちゃん？」

寝る時、亜希子さんが真っ暗なこの部屋で問いかけてきた。でも、あたしはその答えを出せずにいる。

「悩んでるの？どうしたいかは、自分で決めることなのだから、こういう時悩んでおくのも良いわ。優香ちゃん達と、先生と、私と一緒に来るか？それとも、延光君、隆君と一緒に行くか？二つに一つ二者択一なのはまだ良い方よ？色んな道を模索するより、限られている道を選ぶのはまだ簡単」

その言葉に、確かにそうなんだけど……

まず、優香ちゃん達と一緒にいくとする。小さい子達と話を合わせられるほど、あたしは子供慣れしていない。でも、亜希子さんや、おばさんが一緒なら大丈夫かなとも思える。で、延光達の場合、男二人に女のあたし一人。と言う形になる訳で……確かに優香ちゃん達よりは話は合うだろう。がしかし、この歳の女の子が、男の子と一緒に旅行なんて考えられない。修学旅行だって、女の子は男子と一緒にの班になるなんて事はありえないし……言うなれば、どちらも何かが引っ掛かるわけである。

でも、どちらかを選ばなければ、あたしは一人此处で留守番。そんな大役なんてあたしには無理。

だから、どちらかを選ぶことに自動的になるのだ。

でも選べない。何故だろう？

「あの、亜希子さん達は、いつから旅行に出るんですか？」

そう、期間を訊いてなかった。その事にハッと気が付き問いかけ

た。

「月曜からよ。だから、明後日からって事になるわね？」

明後日から？ そんな……考える時間がもつと有ると思ってた。なのに、一日？

「どのくらいの期間、旅行する予定なんです？」

そう。期間も大事。

「そうね。二週間くらいかしら？ その辺りは先生が取り仕切ってるの。わたしもハッキリしたこと聴いてなかったりね」

「そうですか……」

あたしはちよつと頭を抱えてしまふ状況である事にやっと気が付いた。

「ねえ。今の自分に、どちらが必要か？ 考えてみたらどうかしら？ 葵ちゃん。悩んでるんでしょう？」

「え？」

それは勿論、悩んでますが……

「時間と言う物はね。一定方向に時間軸を作っていて、決して平行線歩く事は出来ない物なのよ。で、後になって気が付くんだけど、あの時こうしてれば良かった〜なんて事が沢山出てきてね？」

「はい……」

「よくよく考えてみると、必要だったのは、あっちだったって事がよく有る訳なのよ」

「はい……」

「それだけ……」

オチはそれだけ？ 何て思っていると、隣の布団から寝息が聴こえて来た。

亜希子さんの言いたい事。それを考えた。今日は眠れそうにない。あたしにとって後々大事になってくる事。それは、どちらだろうか？ あたしは、一人旅をしたくて此処まで来た訳である。それなのに、お金を盗まれて、旅行が出来ない。あたしは何故一人旅をしたのだろうか？ その論点がずれてしまったら、意味が無いのだ。

あたしは、人との繋がりを絶ちたかった。そう言う場所に訪れて、一人自分と向き合いたかった。でも、自分はその事態に陥って、他人を求めた。そう。その原点が、延光だった。

そこまで考えて、一人が三人になってもおかしくは無い。よね？男とか女とか……そう言うことを考えてしまったら、人間と言う物がわからなくなってしまふ訳で……

だから、あたしが選ぶべきは、延光達ではなからうかと思う。人間として、向き合うべき場所がそこに有るのではなからうか？

と言う決断があやふやながら出来上がったような気がする。その時ふと眠気が襲った。寝ても大丈夫な気がした。安心して眠れる気がしたのである。

#9 押入れの星

ピチピチという鳥の囀る声で目が覚めた。

頭の中はスッキリしていて、何だか昨日の夜悩んだと言う感覚など微塵も無い。実に爽快な気分だ。

隣に眠っていたはずの亜希子さんは、先に起きたらしく布団はもう、片付けられている。朝御飯のために、亜希子さんは大忙しなのである。そんな事を考えて、今日ハッキリとさせなければならぬと言う意欲で一杯であった。

「おはようございます」

あたしは、着替えると直ぐに洗面台に行き顔を洗った。そして、キッチンへと足を伸ばす。

お味噌汁の具を亜希子さんが大鍋に入れている所だった。

「あら、早いよね？ 葵ちゃん、おはよう」

亜希子さんは、何も変わりがなかった。昨日と全く同じように接してくる。出逢って三日目。考えてみれば殆ど初対面なんだけど、昔からあたしと言う存在を認めているかのような対応。だからまた安心できた。

「昨日の夜、色々考えてみました。初めは寝るコト出来ないくらい悩むのかなって思ってたんですが、亜希子さんの言葉で、自分で選ぶ事が出来ました」

そう言ったあたしの顔は晴れやかだったので、亜希子さんは、

「そう。良かったわね」で、どちらを選んだの？」

きつと、亜希子さんは判っているのである。訊くまでも無いけど、訊いてみようかしら？ と言う無邪気な微笑をあたしに返してきた。

「はい！ 延光君達と一緒に旅行しようと思います！」

まるで、これでは宣言だななんて返事だったけど、

「そうね。それが良いわ？」

と、亜希子さんは、また子供のような笑顔であたしに笑いかけた。

あたしにはその言葉だけで十分であつた。

「あ、あたし、何か手伝いましょうか？」

早く起きた事だし、あたしも何か手伝いたい気分。亜希子さんに助言して頂いた御礼もあるしね。

「あら、お願いできるかしら？ そうね、今お味噌汁の方終わるから、今冷ましている卵焼きを切つて貰えるかな？ あ、包丁気をつけてね？」

亜希子さんは、助かるわ、と言いながら隣のコンロに水を張つた大鍋を置いた。

「何作るんですか？」

あたしは問いかけた。

「ほうれん草の和え物よ。ほうれん草は身体に良いの。茹でてからゴマと和えようかな」と思つてね？」

そうか。そう言えば、此処に来た夕方もほうれん草のおひたし食べたな、なんて思った。この家ではほうれん草は付き物なんだ。何て納得したり。

しかし、亜希子さんつて器用なのよね。この歳で、つて言いながら実際の歳はわからないけど……和風の料理を作るのが得意だな、なんて思う。味付けもあたしの口に合うし。

つてのは、うちの母が洋食派だからそう思うのかも？ 家で、こういった物は一切作らないな、と考えてみたら。カレーとか、ハンバーグとかばかり。というのも、子供のあたしの口に合うように？ つて配慮がその背景に有るのかも知れないけれど……実際、母が何を考えて料理を作つてるかなんて知りはない。

それに、あたしは余りキッチンに立つたことがない。母は手伝つて？ なんて事は自分からは言わない。専業主婦だからか？ それともあたしにキッチンに立たせたくないからなのか？ 全くと言って無い。だから、あたしは学校の授業でしか包丁を扱ったことは無い。で、家庭科の成績も余り芳しい物はなかったり。唯一、洗い物くらいは完璧に出来るくらいだ。

もし、旅行を終えて、この一ヶ月を終えて、家に戻ったら、母に問いかけてみようと思う。母の事、そんなに理解出来てない自分にまた一つ課題が出来たな。そんな事を考えてしまった。

「この位の幅で良いですか？」

あたしは、亜希子さんに切った卵焼きを見せた。

「うん。大丈夫だよ、均等に切れてて良いよ。口に入れるサイズ的にもバッチシ！」

そう言いながら、亜希子さんは、鍋にほうれん草を入れていた。

「じゃあ、人数分のお皿に盛り付けてくれる？お皿はその水屋に有るから。小皿で良いわ。そうね、二段目の棚に有るので良いよ。いつも使ってるし」

人数分。って言葉で一体何人この家にいるのか？考えた。まず大人が二人。子供が、延光に、隆に、優香ちゃんに、鈴音ちゃん。浩二に凜に涼。の九人か。

「九人ですね？」

あたしは指を折って数えた。そう九人。

「何言ってるのよ、葵ちゃん、自分をちゃんと入れた？」

その言葉に、と自分を忘れていた訳で……

「そうですね。十人ですね？」

あたしは、自分を入れ忘れていることに気が付き、情けなく笑った。亜希子さんは、自分がいつも作ってる人数を理解してるから、あたしが自分を入れるのを忘れてるんだと思ったんだろう。

「葵ちゃんは、面白い子ね」

ほうれん草が茹った頃に亜希子さんはスツとそれを取り出して、クスクスと笑った。あたしは、へへっと、照れ笑いをした。

「あ、もうこんな時間！葵ちゃん！皆を起こしに行ってくれかしら？」

七時を回った頃に、亜希子さんは大変と言った様子で、取り皿をテーブルに並べているあたしに言った。

「おばさんですか？」

「先生は、もうちゃんと起きてらっしゃるから、子供達の方をお願いするわ！」

あ、おばさんはもう起きてるのか。此処にいないと言う事は？書斎に籠ってるのかも知れないな。なんて思つて、一階の優香ちゃん達、ちびっ子の部屋をまず覗きに行った。

一階と言う事に関して、子供達は、二階は流石に危険だからと言う配慮なんだろうと思う。

あたしも、小さい頃は一階で寝ていた。二階に部屋を移して貰つたのは、小学生になった時だった。自分の部屋が出来るとかなり喜んだ覚えありなんだよね。何て言うのかな？大人の仲間入りって感じでしょうか？自分の部屋を持てると言うのもまた秘密基地みたいだし。或る意味凄く新鮮ですな。

そんなことを思いながら、優香ちゃん達を起こしに行く事にした。廊下は板間になっていて、壁も木の板で出来ている。均一に窓があつて、外を覗くと、それなりに大きい校庭が広がっていて、一瞬此処は施設じゃなくて、本当の幼稚園校舍つて感じである。あたしはその風景を見ながら廊下の突き当たりの部屋に着いた。

亜希子さんの話だと、ここが優香ちゃん達の寝室になっているらしい。

あたしはこの中を覗いたことがなかった。

この廊下から見ると、そんなに広い部屋と言う感じはしない。こんな部屋に五人の子供達が本当に眠ってるのかしら？何て思った。

あたしは引き戸をガラツと開けた。

中は、雑魚寝状態で、布団が五人分敷き詰められてて、とても窮屈そうに感じられた。が、皆を起こして、布団を畳み終わると、ガラツとした部屋がそこに在った。幅はそう無い。奥行きがあるんだなと思つた。

「葵お姉ちゃん？おはよう」

欠伸をしながら、零れて来たまだ眠いよゝ状態の涙をゴシゴシ、

パジャマの袖で拭きながら優香ちゃんはにつこり笑いかけてきた。

「おはよう。優香ちゃん。昨日はちゃんと眠れたかな？遅くまで起きてたら駄目だよ？」

「うん。寝たのは早かったと思うんだけど、まだちょっと眠たいな〜って感じですよ」

あらあら。

「朝御飯、もう出来るから、着替えたら顔洗っておいでよ。皆も、早くね〜」

ゾロゾロと動き始めている子供達は、あたしの顔を見てニコツと笑った。人懐っこくて皆可愛い。此処の子達は、施設だと知っていてもこれだけ明るく生きてられるから不思議である。でも、それはあたしにとって、良い傾向としての日常風景。この世も捨てた物じゃないと思えるのだ。

「あ、あおいおねえちゃん。りょこうはどうするの？」

あたしが引き戸を閉めようとした時、鈴音ちゃんがあたしの脚に纏わり付いてきて問いかけた。まるで、子犬のような眼差しで問いかけられたから、あたしは返事に窮した。だって、あたしは鈴音ちゃんとは違う旅行を選んでしまったのだから。

「……うんとね。まだ考えてないの。決めたら鈴音ちゃんのお母さんに言うつもりだから。ね？」

と、取り敢えず誤魔化しておいた。だって、この小さな手を振りほどく事が容易に出来なかったから。でも、今日皆判っちゃうんだよね？あたしは、引き戸を閉めながら頭を下げた。ごめんね？と、心の中で呟きながら。

さて、あとの二人。延光と、隆。

まず、あの子達が起きてるかどうか？この二人は、お互い違う部屋をあてがわれてるらしい。そう言う部屋に土足で入り込むと言うのもちよつと大胆かも何て思う。これが、姉弟と言うのなら全く問題ないのだけど……一応他人な訳だし？一人っ子のあたしには免疫がないわけで……って、旅行の時は？何て考えて、ちよつと頭を抱

えた。今から免疫付けるべきかも？

ま、先にキッチンに戻ってみようかな？そうしたら起きて来てもかも知れない？と思ってキッチンに戻った。

しかし、キッチンには亜希子さんの姿しか見受けられない。うむむ……やはり行くしかないか！と決心し握りこぶしを作ってあたしは、軋む木の階段を一步ずつ上った。

階段を曲がった所で、あたしは、隆と鉢合わせた。

「あ、おはよう……今起こしに行く所だったんだけど……一人で起きたみたいで良かったわ。もう朝食の用意殆ど亜希子さん済ませてるから、支度してね？」

あたしは、ちよつと引き攣った顔でそう言ったのかも知れない。隆が、ちよつと考えるようなそぶりを見せてクスツと笑った。此処に来てから、こういう隆の笑顔を直にあたしにしたのが初めてだったから、あたしはちよつと頬を染めてしまった。

「な、何か可笑しかった？」

あたしは、気を逸らす為につっけんどんな声で膨れて見せた。

「あ、うん。困ってたんだろうな。なんて思っで。ちよつと可笑しくなっただけ。のぶちゃんも多分爆睡してると思うよ？今頃」

見抜かれてしまったか……と思っで苦笑いしてたんだけど、延光が今頃爆睡？と言っ言葉を反芻してあたしは、

「ちよつと！それっでまさか、寝てなくて、今頃寝ちゃったって事……じゃないわよね？」

あたしは、ゲッソリしてしまった。

「あ、多分そう。のぶちゃん、時々徹夜してるから……この時間に起きてないと言っ事はその可能性大だな」と思っ。いつもボクより早く起きて起こしてくれてたりするし？」

てことは……隆の言っとおり、今頃徹夜疲れで寝てるってことか

……

「あ、起こすのだったら、気をつけてね？かなり寝起き悪いから。」

のぶちゃん」

あたしは、その言葉を聴いて、げっそりしてしまった。どう起こせば良いんだろうか？

「何か良い方法無いかなあ？」

隆なら何か知ってるかも？何て思っ^{すが}てあたしは縋りたい気持ちだった。

「それじゃあ……一緒に行こうかな？ボクも？」

と言ってくれて、あたしはホッと息がつけた気がする。

階段を上りきった所を右に折れ、二部屋目が延光の部屋だった。

一体どういう内装なんだろう？何て事を考えて、男の子らしく汚れてるんだろうな。何てこと思いつつ、隆が開けた引き戸の先を拝んだ。

でも中は至って整っていた。で、注目すべきなのは、壁や天井に貼られた無数の天体？の様なポスター。机の前には、天体写真が沢山、コルクボードにピンで留められていた。

延光は天体マニアなのかしら？そう思わせるだけの部屋だった。そして、あたしは、何処に延光がいるのか？それを搜した。部屋にはいなかったからだ。

「ねえ、のぶちゃん。起きてよ」

あたしは、隆が何処に向かって言ってるのか判らなくて、一瞬この部屋を見回し、そして、隆の視線の先をみた。

まさか……そう、隆は、閉められた押入れに向かって声を発していたのである。

「ちょ……ちよっと、隆君？もしかして……延光君で、押入れの中で寝ているの？」

恐れ恐れ問いかけた。在り得ないよ！

「うん。そうだよ。のぶちゃんは、徹夜した時は大体押入れで寝てる」

「何で！」

何でと言われても……判らない。みたいな隆の表情だったが、

「多分、のぶちゃんは押入れが、好きなんだと思う」

「は？」

訳が判りません。って。隆ももっと、不思議に思えよ！思わず突っ込みを入れたくなったり。

でも次の瞬間、

「のぶちゃん開けるよ」

と、隆は押入れの襖をそっと開いた。何……これは？

ほんの少し開いた時点で、光が中から溢れ出た。そして、収まる。何があったのか、あたしは不思議で仕方なかった。ので、襖の中を思いつき覗き込んだ。異様な好奇心と言う物だと自分でも思う。

「……………眠い。あつと！」

延光が、あたしの顔が目の前にあったので驚いたんだろう。ガバツと起き上がり、頭を天井にぶつけ抱え込んで落ち着いた。

あたしも、初め何が起きたのか、判らなかったけど、ふと気がついて、バツと後ろに引き下がった。

「起きた？のぶちゃん？」

頭大丈夫？とは訊かずに、隆は笑いを押し殺して起きたかどうかを問いかけた。

「これで起きんかったら、どんな人間や！隆の、ボケ！」

って、あたしを非難している訳ではなさそうだ。あたしは、隆の影から、

「ごめん……大丈夫？」

って問いかけた。

「あ、うん。平気や……別に葵っちが悪い訳や無いから、気にすんなや？」

「ほう、ほう」

隆が茶々を入れてきた。が、あたしは、さっきの光が何なのか？それに心が揺れてて、思わず問いかけてしまった。

「ねえ、ねえ？さっき、光が中から溢れたんだけど！何？」

そうすると、ああ、と言う表情をして、

「これか？」

と何だか凸凹した球体の……そうそう、言うなれば地球儀みたいな物体を、押入れの奥から取り出して、延光があたしに手渡した。

「何？これ……」

あたしは、間の抜けた声で訊いた。

「ああ、これが何かわかんないんや？これはな……あ、そうや、隆も一緒に中に入りいや？勿論葵っちも！」

と言う事で、説明は抜き！みたいな表情で延光は、狭い押入れにあたしの手を引き、引きずり込んだ。全く強引で、マイペースな奴だなと思う。

中に隆も入った所で、襖を閉めた。暗いなーと思っただけど、暫くして延光がさっきの地球儀みたいなもののスイッチを入れた。その瞬間、あたしは幻想的な気分襲われた。

「な？判ったか？プラネタリウムやねん！」

狭い空間に、キラキラと光が散りばめられていた。何て言うんだろう？こんな星空を見た事なんて無いあたしには、凄く新鮮で、無限な可能性を秘めた空間を感じた。

「綺麗……」

「そやろ？これ、玩具みたいな物やけど、オレ、頑張って買ったんや。此処ってそう田舎と言う訳や無いしな。こんな星空拝めんやん？気休めやけど、これで満足やつたり」

そう言っで、延光は狭い押入れの天井に映った星空を眺めていた。「のぶちゃん。押入れじゃなくても、部屋に暗幕つけてそれ使ったら良いのに？」

あたしは、そんな事を考えていた隆に、確かに広い空間の方が良いんじゃないかって、思った。

「それも考えたんやけど、押入れの方が、秘密もつとる様で良いやん？秘密基地みたいでな？」

それも一理有る。あたしは思わず自分の事のように眉間に皺を寄せてムムムと唸った。

「さて、あんま寝れんかったけど、そろそろ起きるとするわ。明日には、旅行開始やしな？その事考えてたら、寝れんかったわ……」
その言葉を聴いたあたしは、先の考え事をしてて、すっかり言葉を見落とすところだった。

「……？ちよつと、待つて？延光君達つて、明日から行くの！」

確かに亜希子さん達一行は、明日から出発つて事だったけど、延光達が明日つてのは聴いてなかった。それに、どうするって話が出たのは、少なくとも二日前……

かなり焦つてあたしが問いかけたので、

「葵ちゃんには、話さなかった？かな……亜希子さん達と同じ日に旅行に出かけると言う事にしたんだよ」

聴いてないよ！んじゃ、もう、延光や隆は旅行支度を始めてるつて事？

「いつまで？つて言うのは、延光がまだ考えてないから、判らないんだけれどね？」

つて落ち着いている隆も隆だよ……

延光の事だから、とんでもない事考えて、その果ての旅行つて事になるんじゃないの？あたしの背中に冷ややかな汗が伝った。

「あ、そう言えば、葵っちはどっちの方に行くん？もう考え終えたん？」

ええ。考えましたともさ。でも、かなり不安だよ……あんたと一緒に言うのがさ！ブチブチ言いたくなつたけど、

「延光君達と一緒に行く事にした」

とハッキリ言った。

「……けど、ちよつと不安だよ。ちゃんと旅行出来る？つて、あたしが言える立場じゃ無いけどね？」

一度失敗してますから？あたしは……

「そっか。オレらと一緒にちゆうことかい。歓迎するし、無茶な事は……」

で、止まった。何が言いたいんだ？

「ま、何とかなると思うから、葵ちゃんは安心してて？」

隆が言い添えた。不安材料は残るけど、この隆が一緒なら、旅行は無事終えられるかと、心のどこかで心配事有りのあたしは、自分を納得させておいた。

#10 旅行前夜

「そう。判ったわ。それでは、延光達と一緒に行くのね？葵ちゃん」

朝食を食べ終わったあたしは、亜希子さんの片付けを手伝い終わり、おばさんの書斎に向かった。そして、明日からの旅行の自分の身の振り方を伝えたのである。

おばさんは、特に注意をする事はなかった。逆に、

「あの子達となら、葵ちゃんの探してるものが見つかると思うわ？」
と言って、微笑んだ。何故、延光と隆との旅行の方を選んだ事が、あたしの探すべき物が見つかると言ったろうか？なんて不思議に思いもしたけど、自分もやはり、同年齢の子達の方が、馬が合うし、それに話も合う。ま、延光とは、悪役と正義の味方の意見が食い違ったかも知れないけどもね？

でも、話す事は沢山あるだろうし、同じ物を見て、共感できる環境づくりってのは必要だと思う。

例えば、延光の部屋の秘密の部屋。

延光にあんなロマンを感じる趣向をする所がある所なんか見て、実際共感できたし。隆は、あたしにとって、信頼できる人間であるし。時々延光に毒されてる所有るなっと思ったりするけど……でも、二人とも良い奴である事は、間違いない。

「それでは、これ。葵ちゃんの旅費ですよ。余り、うちの施設も余裕が無いものだから、大した金額にならないけど。使ってね？延光と同じだけ入れておいたから」

と、一通の茶封筒を渡された。中には、福沢さんが十枚入っていた。

「え？でも……」

あたしは、これを手渡されて、焦ってしまった。が、
「東京に戻ったら、返してくれて良いから。気にしないで使って？」

と、おばさんは、別段何事も無いかのように笑った。

「おばさん。此処の住所教えてください！必ずお返しします！書留で送りますから！」

あたしは、自分を信用してお金を貸してくれたんだとそう判断し、言葉を返した。

「ええ。待つてるわ。このメモ帳に、書いておいてあげるから、無事自分の旅を終えて帰ってらっしゃい！それをわたくしは祈っているわ？」

「ありがとうございます！」

あたしは、おばさんに感謝の気持ちを込めて深々と一礼し、書齋を出た。

「葵っちー！旅行の用意は出来たんか？」

あたしが書齋を出て、一階に下りた時、そんな呼び声が響いた。

どうやら、延光があたしを捜しているらしい。あたしは何だろう？と、急いでその声の方へと小走りで駆けた。

延光は、自転車置き場に居た。隆もそこに居た。

「葵っち？自転車、これ使えや？」

と、指差したのは、ちよつと古い型のギア付き自転車だった。

「これって、何処から？」

「奥の倉庫探してたら出てきたんや。オレも、このギア付き五足の自転車使うつもりなんよ。やから、葵っちも使えや？」

って、それに跨ろうとしたが、ママチャリに慣れてるから、こう言ったギア付きの自転車って跨るのが難しくて、片足付いてよろけた。

「女の子乗りしても駄目だよ。こつやって、後ろから前に脚を回す感じで……」

と、隆が実際解説してくれた。

うむむ。これはスカートって訳には行かないな……って思った。

この旅は、ジーンズか短パンしか着れそうにないや。

ちよつと海辺でスカートが靡いてる自分の姿とか思い浮かべたが、
全て煙のように消えた。

「ま、もう一回乗ってみるや？練習しとき？自転車で、瀬戸大橋付
近まで出るんやから！」

ん？今、何と言ったかね？延光！

「ちよつと待つて！列車での移動じゃないの？隆君！延光君が何を
言ってるのか？あたし理解不可能なんだけど！」

あたしは、グラグラする頭をどうにかしたかった。何を言ってる
んだ？この男は！

「うん。どうしても、四国四県回りたいから、予算が足りないんだ
つて。だから、ヒッチハイクすることにした」

ヒッチハイクー！だー！

足先まで響くくらい頭を殴られた気がした。

「隆君！止めてよ！延光君を！」

てか、有り得ないから！

「だってさ。諦めなよ、のぶちゃん？僕も無謀だと思うよ？」

隆は、だから言ったでしょ？つて表情で延光を見た。が、延光は
引かなかった。

「んじゃ、他に何か良い方法有るか？無いやろ？」

と言う事で、また話が行き詰った。

「あのさ、何で四国なの？他に近場でも良いじゃん！海渡らないで、
済む所とかさ？」

あたしは、何故こんなに延光が四国に拘るのか？それが理解出来
なかった。

「四国四十八箇所。お遍路さん回りたいんよ？」

と、言つてニチャッと笑った。どうもそれは何かを隠す口実のよ
うな嘘のように感じられて、あたしは疑いの目で見た。

「まあまあ、落ち着いてお二人さん？」

隆が慌てて、あたしと延光の間に入った。

「葵ちゃん？祐ちゃんは四国に行かなきゃならないんだよ？どうし

てもね？」

と耳打ちした。

「取り敢えず、ヒッチハイクは無しにしないかな？ 堅実的では無いとボクも思う。海を渡るのには、橋。または……」

と言つて、そこで区切れた。

「そっか、船つて手が有るんか！」

「そう言うこと！」

と言つて、隆は指を一本立てた。

もしかして、隆はこの事に気がついていたのか？とあたしは薄々感じたが、どうしてもつと早くに言つてあげなかつたんだろう？と腑に落ちない。ま、あたしはこっちの方がまだ健全だと思つて何も言わずにおいたけどね？

「んじゃ、近場の港探さんとな？ 何処か在つたか？」

自転車置き場の内の一つのサドルに一枚の地図が載せてあつた。

それを延光は手に取ると、地面に置いておっぴろげてしまった。

「あ、宇野港があるな。これで、高松まで行けるんか？ この航路使えたら、乗せてもらうんも良いし？ どうやる？」

目ざとく見つけた延光は、勇気ランランな感じでそう言つた。

「問い合わせてみたら？」

隆は、そつけなく言つた。さつき庇^{かば}つたのに、今度はそんなにあつけなく突き放す？ あたしはこの二人のちぐはぐな所が氣になつてしまつた。

でも、それには何か理由があるはずだとも思う。さつきあたしに囁いた、『四国に行かなきゃいけない』と言う理由。そこに、延光という人物に係わる何かがある訳だ。でも、その旅に同行しても良いつてこと？ まあ、隆も行くんだから、それに関して隠し立てをする必要は無いつてことよね？

「そうする！」

延光は、一目散で家の中に飛び込んでいった。

「ねえ、隆君……四国に何があるの？」

あたしは、今この場で聴きたかった。今なら延光は居ない。機会は今しかないと思う。

「追々、判ると思うよ？ただね、のぶちゃんの前では余り四国を非難するようなことは言わないでおいでくれない？」

事实は結局判らずじまい。でも、延光にとつて、四国は大切な場所なのだと判った。それだけでも、良いよね？何て考えてる自分がいた。

十分後位に、延光は戻ってきた。

「二百円で行けるやん！自転車は、別に三百四十円掛かるみたいやけど！」

どうやら、何とかなるらしい。それも、一時間弱で着くなんて凄いことだ。

「後は、時間やな。何ていうか、便は結構有るみたいなんやけど、こっちは自転車で宇野港まで行くわけやろ？途中どう言う事になるか判らんしな。」

なんて、延光らしくない言葉を吐きやがる。言いだしつpeg、張り切らんでどうするよ？

「それだけ判れば何とかなるよ。のぶちゃん？その後は、やるだけやってだから、大丈夫だと思うからね？」

ああ、今度は隆の優しい言葉ね。呆れるわよ。何て思ってた、あたしは浅はかだった。その時は……

旅費が浮いて、後は四国一周に掛かる食事代や、宿代。

結構な金額の旅費を持つてるわけで……次は気をつけなければならぬ。もう、失う訳にはいかないのだから。そう思うと、あたしは、旅費を、色んな所に隠し持つことにしようと思ひ立った。

「夕食も終えて、皆、明日からの旅行に心躍ってるね？」

あたしは、朝の自転車練習を終えて、少しだけ疲れ気味だったが、隆のその言葉に、確かに皆ウキウキしてるのが判った。優香ちゃん

なんて小躍りしながら足が地に着いてないような感じ。開放感一杯である。

あたしも、一人旅をしようと一夜野宿してから、此处にたどり着くまでは、端から見るとあんな感じだったかも知れないななんて思う。で、つけ込まれた訳だ。あのおじさんに……

気をつけよう。何処で何が起こるか判らないのだ。旅行って物はなんて考えるとちょっと悲観的か？思わず苦笑いした。

「隆君達は、荷造り終わったの？」

あたしは、余りバタバタしていない隆に問いかけた。

「うん。もう、支度は昨日終わらせたから。ただ、のぶちゃんは未だみたいだけどね？」

用意周到！流石、隆って感じ。

「手伝ってあげないの？」

「うん。のぶちゃんは、自分でしたがるだろうから。手伝わなくても大丈夫」

心配をしてる風ではない。また、突き放してる風でもない。全く何を考えてるのやら？

「んじゃ、あたしも、少ない荷物を纏めて来るね。色々女の子は大変なのよ？」

クスクスと笑って、あたしは居間を出た。

二階に上ったあたしは、早速お父さんに買って貰った鞆の中の服を整理した。タンクトップと、Ｔシャツ、ジーンと半ズボン関連を全て取り出して、綺麗に畳み直した。

後は、シヨルダーバッグの中身も必要な物とそうでない物との仕分けをした。通帳なんかは必要ないし、お財布は取られてしまったので、亜希子さんにがま口財布三個と、普通の財布を貸してもらって、お札を入れ、色んな所に別けた。

一つにしまったら、それこそ落としたら最悪。なので、シヨルダーの中身は、一万円しか入ってない状態。これでも結構な額だ

と思ったけど、今はそれも仕方が無い。福沢さんが一枚ペロリと入っている状態だ。

「もう、旅行の支度は出来たの？」

やっと片付いた所で、亜希子さんが入ってきた。

「はい。今度は完璧です！」

まるで、二度と失敗しないように気を付けました。みたいな良い回しだなと自分で言った後に気がついた。

「そう。良かったわ。あ、お風呂沸いてるから、入ってらっしゃいな。延光君達との旅行でゆつくりお風呂が入れるかどうか？な旅行になりそうですものね？」

亜希子さんは、これから荷造りを始める所のようだった。でも、きちんと整理されたこの部屋を見たら、亜希子さんの用意なんて直ぐ出来てしまುದらうななんて思う。

「じゃあ、あたしお風呂借りてきます！」

ゆつくりと、あたしは腰を上げて、此処であつらつて貰ったパジャマと、下着関連を持ちお風呂へ向かった。

ゆつくりのんびり入るお風呂は、今日から二週間ほど出来なくなるのか？何て思つて、髪や身体を洗い流した後、湯船に浸かった。決して広くはないお風呂。換気扇の無いお風呂。ジェットバスでは無いお風呂。自宅とは全く違つてタイル張りのお風呂。

初めは驚いたけど、こうやって入ってみると、凄く落ち着く。ごく普通のお風呂つても良いものだ。

湯気で雲つて、設しつえているガラスは自分の顔も映し出さない。それを、手で拭つて露を取る。髪。切つてきて正解だった。なんてことを思う。

実の所、夏休みが始まつて、この旅行を切つ掛けに、長い腰まで有る黒くて艶のある自慢の髪を切り落としてきた。

只でさえ、子供体系なのに、髪の毛を切つて、より幼くなった。というか、もう、少年と同じだ。

此処に来てから、陽に晒されることもあつて、顔が小麦色に変色してきている。

きつと、明日からの旅でもっと色が黒くなるんだろうな。なんて考えると、夏休み明けには誰だか判らない別の誰か？になつてゐる事だろう何て考えておかしかった。

まあ、それも良いか？ひと夏の、良い経験と言つ物だ。

あたしは、湯船から出ると、一流しし、少し日焼けした少しパサついた髪をタオルで巻くと、気持ちを切り替えて、お風呂を出た。
そして旅行当日を迎える事となる。

#11 いざ出発！

朝、五時起床。

昨日、延光達と考えたプランで行くと、この時間に起きて、六時には出発と言う寸法だった。

「あ、おはよう」

洗面台には、隆が居た。あたしも、

「おはよう」

と、普通に返した。心は旅行気分で盛り上がってるんだけど、それを悟られるのもちょっと恥ずかしいので止めておいた。隆はいつも通りだから、それが無難だ。

「のぶちゃん、見かけた？」

あたしと入れ替わる時に、隆は問いかけてきた。でもあたしは、まだ延光の顔を見てなかったたので、

「ううん？見かけてないけど？」

否定の言葉を返した。

「まだ寝ているのかな？ちょっと、見てくるね」

隆は、のんびりした口調で、延光の部屋へ行くと言って、この場から去った。

あたしは、昨日徹夜状態だったみたいだから、まだ寝てるんじゃないかしら？何て思いながら、歯磨きをした。

でも、どうやら違ったようであった。隆君が、バタバタと、二階から下りてきたのである。

「のぶちゃんが、部屋にいないんだ！」

「は？」

と言う事で、あたしにとっての始まりの旅行は、延光捜しから始まったのである。

まず、家の敷地内を隆と手分けして捜した。

隆は、建物内を。あたしは、校庭や自転車置き場を捜した。が、

しかし、延光の姿は無かった。

「居た？」

「うっん。居ないよ……何処行っただろう……まさか、先に出発したなんてことは無いよね？」

落ち合った玄関であたしと隆は、お互いの状況を話し合った。

「まさか……延光君が先に出るなんて事ないでしょ？家の中に居ないって事は、どこかに出掛けてることになるよね？」

この旅行の首謀者が、そんな事をする訳無いと思われる。それに、あの延光が、だ。

「じゃあ、自転車置き場、もう一度行ってみよう。出掛けてるなら、自転車置き場に戻ってくる可能性あるからね？」

あたしは、姿を見たわけじゃなかったから、自転車が有るかどうかまでは見ていない。なのでそう提案した。

自転車置き場にあたし達は何も喋ることなく、揃ってもう一度見に行った。

「あ、のぶちゃんのいつも使ってる自転車が無い……」

着いて隆は直ぐに気がついた。あたしは、どれがどれやら……これだけ沢山有ると判らなかつたので、見分けられる隆には違和感があるのだろっ。

「てことは、何処かに出掛けてるってことだね？こんな朝にどこに行ってるのかしら？」

その疑問に、隆が応えてくれると思ってた頃に、延光が、自転車を押して建物の側から顔を覗かせたのである。

「お！おはようさん！元気か？」

延光は、あたし達が捜し回ったこと等全く知らないの、いつもの調子でにこやかに笑いながら、自転車を押して来た。

「ちよっと、延光君！何処行ってたのよ！心配したんだか……って何？その大荷物！」

あたしは非難するつもりでそう言い掛けた言葉が、目の前の大荷物に目が行きすっかり忘れ去った。

「のぶちゃん……もしかして、廃材置き場にも行ってきたの？」

何、それ？廃材置き場？

「ご名答！ん。丁度、手ごろなキャンプにでも使えるテント見つけてきたから、持って行こうかなと思ってな」

かなりなご満悦状態ですけど、それって、かなり大変じゃ無いの？何てことを考えて、

「そんな物を、自転車の何処に積むつもりよ！無理でしょ？」

あたしは、有り得ないから！って言うつもりでそう言ったのを、

「三人で、別けて積みめば良いやん？そしたら、そんなに荷物にならへんで？」

いともあっさり返してくれやがった。しかも、この荷物を三等分？ちよい待ちやがれ！延光の勝手さにも呆れてしまった。

「ちよつと、延光君！それを三等分にしたら、あたしの自転車に重りが付くって事だよな？」

あたし嫌だよ！それ！

はつきり言っただけでやらないと、こいつは絶対譲らないだろうと思っただけからあたしは言っただけ。

「のぶちゃん。確かに、葵ちゃんの言う事は正しいと思うよ？勝手に持ってきて、皆で持とうだなんて虫が良すぎるよ……」

隆言っただけ！あたしは心の中でそう呟いた。が、

「ボクとのぶちゃんですって言う事で良いじゃない？それで決定と言う事で。ところで、のぶちゃん。いつから起きて廃材置き場に行っただの？……」

あれ？ってことは、あたし一人が持たないって事？隆は延光の方を持つって事？何だか仲間外れみたいじゃ無いか……そう思ったけど、今自分が発した言葉を引っ込める事なんて出来無いし、もう、なるようになれって事で、あたしは二人の会話の後姿に歩いて歩くだけになってしまった。

「そんでは、いってきま〜す！」

あたし達三人は、おばさん達より先に旅立つ時間になったので、まだ休んでいる子達には挨拶できなかったけど、行って来ますと言つて家を出た。

「氣をつけてね？」

そう言つて送り出してくれたのは、亜希子さんだった。

昨日の夕飯の残りを朝御飯として用意してくれたから、亜希子さんには本当に感謝！実の所を言うと、朝飯抜き。覚悟の旅立ちだったのである。でも、腹が減つては戦は出来ぬ！ですからね、なんて言葉が頭の中に浮かんだったり……ありがたく頂戴致しました。

さて、自転車置き場に到着。天候良好！全く良い感じの滑り出しだ。

「おい！喝入れていこや！」

「何？その喝つて？」

突然の延光の申し出に、あたしは首を捻った。

「はいはい、手を出して！」

延光は、あたしの質問なんか無視して、腕を掴んでそう言つと、三人が輪を描くようになった形になった。これって円陣つてやつですか？あたしは、この体育会系という言葉に並ぶような事をやらされるとは思つてなかったもので、一瞬身を引きそうになったが、

「葵っち！逃げんなよ？」

て、肩を掴まれて、結局、

「レッツ・トライ！ネバー・ギブアップ！」

「おー！」

延光の言葉に乗せられて、掛け声掛けちゃつてた。全く乗せるの上手いやこいつは！

各々の自転車に荷物を載せ。そして、跨ると、取り敢えず、延光を先頭に自転車は出発した。あたしは隆の後ろを着いて行く形になる。そして、昨日延光が地図を見て考えたルートとして、岡山駅を取り敢えず目指すと言つてた事を思い出した。

そこから、宇野港とやらを目指す事になる。

地図上で見た限りでは、二十キロ以上有るとみなされる。

「は〜」

ま、体力無しって訳でも無い。まだ若いあたしが溜息ついてらないんだけどね？そこで思わず苦笑いしてしまった。

景色はドンドン過ぎていく。流れ去る時間が止められないように、まるで、景色も止める事が出来ないのでは無かるうか？そんな事を思う。

帰ってきたら、この街並みの何処かが変わってしまったのではなかるうか？常に変わらないものなんて無い。緑の木の枝から零れるキラキラ光った光を感じながら、あたしは過ぎ去る光景を目に焼き付けていた。

岡山駅まで南下した頃にはもう、陽も完全に昇っていた。あたしは、此処から先、どんな事が待ってるのであるうか？なんてちよつとワクワクする気持ちを抑えて、隆の後ろを走った。

そして、左手に岡山城を、遠めで見ながら自転車を漕ぐ。ああ、あの場所に一度訪れたんだなあ〜なんて感慨も有ったりする。

街中のゴチャゴチャした道をあたしと、延光、隆は時々信号を気にしながら走った。

延光はこう言いながら信号待ちをしていた。

「二号線を出てから、三十号線に入ろうと思うんやけど？それでええか？」

岡山の地図を片手に持ち目でその地図を追う。

「それで良いと思うけど？のぶちゃんが良いと思うんなら？」

隆はそっけなく言った。あたしには訊こうとはしなかった。そりやそうだ。岡山っ子である延光と、隆はまだ土地勘というものがある。しかしあたしはどうだ？全く無い。だって、あたしはこの土地の人間ではない。二人ともそれを良く知っているから、問いかけないのだろうと思った矢先、

「葵っちは着いてくるだけでええよ。道なら何とかこのオレが把握

してるんやからな」

仲間外れをしてる気がしたのであるうか？一言添えてきた。

「あてにしてるから。宜しく！」

あたしは、気にしてないよ。と言った所で信号が青に変わった。その瞬間また自転車を走らせ始めた。

黙々と走る。景色は街中からちよつと離れたところを走ってるのが感覚的に判ってきた。

建物の様子が変わってきたから。

もう、陽は完全に昇りきり、背中も腕も汗だく。気持ちが悪いよ。なんて言葉が口から漏れ出てきそうだった。真夏の陽差しが強い。こんな事なら、薬局で陽焼き止めクリーム的一本でも買って来るべきだったか？なんて思う。

あたしは、焼けると赤くならず、直ぐに黒く変色する肌の持ち主だ。塗っても意味無いかも知れないけれど、女子として気にならない訳もなかった。昨日お風呂に入った時それも当たり前の事として考えていたんだけど、実際この陽射しは脅威だった。

あれからどれだけ走ったんだろう？腕時計は持ち合わせていない。時間というものの感覚が判別できなくなってきた。今は宇野港までの道のりのどの辺りを走ってるのであるうか？そんなことが頭を過ぎり始めた。

と言う事は、もう、走りたくないと言う事になる……まあ、あたしは長距離より短距離向きの性格だ。だからちよつと弱音を吐きだくなってきたのだらう。

でも、前を走る荷物の多い延光と、隆はスイスイとペダルを踏んでいる。それを見ると負けたくないと言う気持ちも出てきた。

あたしって意外に負けず嫌いだったんだなってこの時やっと自覚したりして。そう思って笑いが込み上り、そして、あいつらに続く勢いでペダルを思いっきり踏み込んだ。

景色はどんどん変わっていく。変わらないのは、頭上に有る青い空

だけ。

そして、潮の香が鼻につく頃、あたしはやつと海が近いことを悟ったのである。

児島半島。その山並みを見ることができる場所に、宇野港は存在した。

潮の香りがあたしの心を驚づかみ。そして、東京では見たことの無い海が目の前に広がっていた。

「瀬戸内海を見るのは、初めてやないんか？ 葵っちは？」

そう、初めてなのである。

それに、海に来る事なんて、どれだけ振りなのだろうか？ 幼稚園生の時、両親に連れ添ってもらって、太平洋側の湘南の海に行った事くらいしか記憶に無い。友人と行く事もなかった。海なんて、映像や、印刷物の中の物としか理解して無かった。

「キラキラしてて、綺麗だね」

沖縄や、ハワイなどの南国の海に比べたら、綺麗だね。なんて到底思えないものだった。どう考えても、一般にあるだろう海の碧さではなからうか？それに、珊瑚礁も無い、平凡な港の海。だけど、今のあたしの瞳には、これほど無いくらい、眩いくらい綺麗な物に映った。

「そう思ってもらえて嬉しいよ？」

隆は、あたしの顔を見て、にこやかにそう言った。この海を見せたかったんだとでも良かったそうな、表情だった。それがこそばゆくて、あたしは、ちょっとはにかんだ笑顔で隆を見た。そんな時、
「さて、そろそろ時間がくるやん。切符買って用意せなあかんわ！」

のんびりしてる場合では無いと慌てて、この港のフェリー乗り場へと、自転車を移動し始める。二十八分おきの航行とのことだから慌てることも無いはずなのだけど……その辺りは延光らしい計画性の無い発言だ。

それをあたしはもう笑って促した。だって、それがこの旅の醍醐味だと知ってしまったからである。一人旅では出来ない面白さ。そして、計画性の無い旅。どちらも、今あたしは体験している。それも、自分の足で培っている物だ。移動しながらあたしはそれを、じつくりと噛み締めたのである。

船内は、一時間旅行の間に必要な物しか置かれてなかった。と言っても、船旅に必要なものが何なのか？なんて知りもしなかった訳だけ。色々探索して気付くこともある。

まったりとくつろげる船内と、ちよつと遊ぶことの出来るゲーム機の置かれている船内。

そして、香川で有名な讃岐うどん。それを食べる事が出来るという船内は、この船の売りなのではなからうか？

ちよつと食べたいなあなんて思ったけど、やはり、ここで使うとお金の無駄使いになるのではなからうか？と思い、ぐつと我慢しようと思ったが、

「なあ、葵っち？食べてかん？」

何て延光は平気な顔をして言った。

「それ、良いと思う。食べよう食べよう」

隆までそう言った。

「でも……」

あたしは、まだ考えている訳である。だって、これからの旅を考えると、ここでそんなお金使う事が出来るのか心配だったから。

「お腹減ったやん！此処で昼飯や！讃岐うどんやで？食べな損々！」
って言いながら、すでに注文している延光。そんな時しり込みしているあたしに隆が、あたしの背中を押してきた。

「何なら、僕が出そうか？」

なんてボソツと言って来た。それは勘弁！だったので、付き合った。

讃岐うどん。初めて食べた感想は、コシが有って、歯ごたえが良

うどん。それだった。

汁もあっさりしてて、スルスルと喉ごしも良い。お腹の減ったあたしの胃袋はうどんで満たされ、心地良い満腹感という物を味わうことが出来たのである。

その後もあたし達は船内を歩き回った。そして見尽くした時、

「なあ、ゲームしてもええ？」

全部見終えた所で、いきなり延光は提案してきた。

「のぶちゃん……お金の無駄使いはしない方が後々良いよ？それより、外に行こうよ！瀬戸大橋とか鬼ヶ島とか見たいよ！」

なんてことに話を振った。

『鬼ヶ島』？って、確か、桃太郎に出てこなかった？何てことがあたしの頭に浮かんだ。

「ねえ。桃太郎に出てくる、あの、鬼ヶ島なの？」

早速問いかけた。

「うん」

隆はあっさり肯定した。

「葵っちは知らなかったん？桃太郎伝説の元は、岡山では有名なんだよ。岡山駅の前に銅像もあるし、きびだんごでも有名なん。桃太郎大通りもあるし、お祭もある！」

延光も、ゲームの事をすっかり忘れたかのようにそう言って割って入った。

「あ、ごめん……全く知らなかったよ」

あたしは、自分の知識の無さにちよつと恥らったが、

「普通知らないんじゃない？ボクも、小学校上がって知ったくらいなもの」

と隆は言った。

「ふふふ……ん。オレなんか、幼稚園上った頃には知ってたわ。

駄目やなあ……お二人さんは！」

なんて、『今の今までゲームを口にしていた者の言葉かい！』突っ込みを入れたくなっただけ、ま、延光に言葉では適いつこないか

ら止めて置いた。

「んじゃ、外行こうか？瀬戸内海に、イルカとか居るかも知れへんし？ゲームでお金くい潰すのもどうかなあゝやしな？」

駄洒落かとも思ったが、延光の一声で、三人揃って、室内を出た。空は、青々と広がって、旅日和。本当に出だしの良い天候に見舞われた。

雲はゆっくりと形を変えながら東へと流れている。様にあたしには見える。こんなにじっくり空を観察することなど無かった。こういう時間もまた必要なのかも知れないなあゝなんて思う。

風は適度に吹いていて、心地良い。あの髪の毛の長かった頃の自分だったら、仄かな潮の香と、シャンプーの香りが混ざって凄く複雑な物を感じてたかもな？と思う。髪を切っていて正解かも？そんなことを考えた。

「ほら、あれが、瀬戸大橋だよ！」

隆が、指をさして言った。

「大きいね！」

「それだけで驚いちゃあかんで！これは鉄道・道路併用橋としては世界最長って言われとるんや！」

「へえゝ」

あたしは、色んな島をまたいで架けられているこの橋に見入った。そして、大変詳しく調べている延光にも感心した。

「のぶちゃん。よく調べる時間があつたね？いつ調べたの？」

その言葉に対して間髪入れずに、

「昨日！」

あ、ははは。一夜漬けかいな……隆の問いかけに、ふんぞり返るように答えた延光を見てあたしはなんのこっちゃと、今感心したばかりなのにと、ちよつと空笑いした。

あたしたちは、その後何も言わずにジツとしたままその光景を見ていた。

風があたし達を包み込む。周りの観光客を取り残したかのように

……
そして、時間はただ一定方向にのみ過ぎて行く。あたし達は、このまま香川県、高松港へと運ぶこの船の上で、それぞれの思いを抱えて乗っている。それは、今この時点では計り知れない物だった。

「あ、鬼ヶ島や！」

高松港に近くなってきた頃、延光が今までの沈黙を破った。三人三様、手すりにもたれ掛かって、思いに耽っている時の事だった。「どれ？」

あたしは目を凝らして、あの童話に出てくる鬼ヶ島を是非見たいと身体を前に乗り出した。

「ほら！あれや！」

ぼうつと見えている小島がそれなのかしら？と、あたしは興味深々だった。

「通称鬼ヶ島。でも、本当は女木島と言うらしいんや。あと、男木島も並んで在るらしいんねんけど……どっちがどっちかまでは判らん！」

つまり、見た事は無かったわけね？あたしは、また乾いた笑いをした。だけど、

「……鬼は、本当に人間に悪戯をしたかったんやろか？ただ寂しかっただけや無かろうか……？」

延光はボソツとそうこぼした。あたしは耳を疑った。だって、あの、延光が、悪役である鬼に対して『寂しかった』何て言葉を吐くとは信じられなかったからである。

悪役を卑下すると思ったのに、この言葉は違和感が有りすぎて、あたしは思わず、

「鬼は悪人でしょ？桃太郎は正義の味方じゃない！何言ってるのよ？」

らしくないから、そう問いかけた。

でも、延光は、それに対して、何の返事も返さずに、寂しそうに

笑って、

「そうやな……」

とだけ言って、笑った。

何か言いたげなのに、何を言いたいのかわからない。だって、あたしは表面上の延光しか知らないから……延光が、一人になったところを見たことが無い。一人でいる時の顔を見た事がない。だから、あたしはその後何も言い返せなかった。

「後少しで着くね？見るものも無くなってきた事だし……」

隆が、そこで雰囲気を変えるように、言いかけた瞬間、『バシャン』と言う物音が聴こえた。

「何？今の音！」

あたしは、不思議になって周りを見渡した。
すると、音の原因がわかった。

「イル力だ……！」

隆が、凄く嬉しそうに、乗り出して見ていた。あたしも、それに便乗して慌てて身体を乗り出す。

イル力の群れが、船の周りで飛び跳ねながら泳いでいるのが判った。水族館で見るイルカじゃなくて、自然に生きている野生のイルカ。いるんだ、本当に！何て思いながら見ていた。すると、

「ほらほら！のぶちゃん、見なくちゃ！」

まるで、延光の心にある何かの不安を癒すかのように現れたイルカだよ？みたいな言い回しで、隆は、延光の肩に腕を回して言った。

延光は、その事を理解しているのか？いきなり、

「おっしやゝ！着いて来いやゝ！」

なんてはじめて言った。

あたしはそれを微笑ましいとも思ったし、あたしの知らない何かが行進してるとも思い、嬉しいのか寂しいのかはつきり判らない複雑な心境で、高松港に着くまでイル力達を眺めていたのであった。

#12 心の傷

船は、程なくして高松港に辿り着き、下船の時間が来る。あたし達は、手荷物を持って自転車の有るところまで降りていく。

船の旅もここまで。これからは、また過酷な自転車の旅が始まる。全く見知らぬ土地に終に来てしまった。

本土を離れたことの無いあたしにとっては、凄く不思議な空間。別に、ここ高松が、田舎だなあ何なんて事を思った訳ではない。けれど、また本土とは違う雰囲気がある。これが四国と言う所なのだと知った。

同じ空の下。ここは日本なのに、何故こんなに違う雰囲気があるのであろうか？不思議に思うけれど、それは、不安ではない。あたし一人での旅なのでは無いのだから。

それにしても、のんびりしている。岡山の人もそう、慌てる事をしてなかったけど、ここ高松もそんな感じである。

あたし達は、これからの旅行の為に、下船後一度地図を見た。

地図を広げた瞬間、延光は予讃線が通っている道を行くと言っていた。まず、香川県の地図を広げた時判りやすい道がそれであった。「高速道路で自転車が乗れたら良いんやけどな、何で駄目なん？」

それに関しては、全くだと思うけど、無理でしょ……という気持ちもある。だって、車は百キロ近くで走る。そんな所を自転車が通れば大事だ。事故が起ること請け合い。そんな危険を冒せる事は国土交通省だって首を縦に振る訳が無い。だから、あたしは、

「下から行っても良いんじゃない？危険な事は嫌だわ。地道に行こうよ！」

と言った。それが始めの旅行プラン。

「葵ちゃんの言うとおり。確実に地図を見ながら行こうよ。のぶちゃん！」

「……うん。せやな。目的は、四国回り。そして、お寺回りやもん

な……？まずは、八十番所の国分寺かな？通りがけに行けそうやし？」

って、本気でお寺回りをするつもりだったのか！とあの時冗談で流しておいた事を、穿り返したい気分になられ、

「冗談じゃなかったの？何故お寺回りなのさ！」

と突っ込んだ。が、

「お寺が好きだから！それに、弘法太子の縁の地やん？変か？」

と、延光は何を言つとるんや？みたいな目で見た。言つたやろ？と言いたいみいだつた。それをまさか、本当だと思えるわけ無いでしょ？お遍路さんなんて、こんな年齢の子がするなんて思えないし……

あたしが余りに有り得ないと言つた表情をしたものだから、延光は不服なのか？と、ちよつと不機嫌な顔に早代わりした。

だけど隆はその会話を挟んで、と言うか、延光に賛同するかのよう

に、
「んじゃ、国分寺に走ろうよ？まだ昼間だし、何処まで行けるかなんて判らないけど、ボクは、ここで迷つてるより良いと思う」

そう言つて、自転車に跨つた。

「ちよつと！隆君！」

あたしは釈然としない。このまま走る気になれなかったので、隆に駆け寄つた。

「ごめんね。のぶちゃんは、四国にそのために来てるんだ。葵ちゃんは旅行気分かも知れないけれど、これだけは譲れないことなんだよ、のぶちゃんにとつて。ボク、初めに言つたよね？四国を悪く言わないで……」

「別に悪口は言つてないよ？納得できないだけだよ！一体何が有るつて言うの？何も言つてくれないと、あたしだって困る！」

余りにも突っかったから、隆もちよつと怒ってるようだった。

「詮索されて、嬉しい人っていないよね？葵ちゃんだって、自分の事話さないでしょ？それと同じことだよ。他人を知りたくば、自分

の事をちゃんと話さないかね？」

それって、駆け引きって事？あたしは、確かに自分が何者で、何故家を出たのか？なんて事は話してない。確かに平等ではない。

「でも隆君は話してくれたじゃない！それはどうして？」

そうなのだ。隆は自分の事をあつさりと言つてのけた。それなのに、延光の事に関しては一切言わない。まるで、守秘義務があるような感じだ。

「それは、ボクは自分で話したただだから。それに隠す事なんてボクには無い。人それぞれ事情や、考え方は違うでしょ？その違いが判らないと、人と係わる事は出来ないとボクは思うよ？」

もう話す事は無いと、あたしから目を背けて、

「それじゃ、行こうよ。のぶちゃん？」

話をもう切り替えて、隆は延光の方に向けた。

何よ！あたしが心を開かない限り、延光の事は理解出来ないって事？そんなの……って思った時、自分だって話せない事情と言う物が有った。それを振り返った。

詮索しない。

って延光と出逢った時言った言葉を思い出した。そして、あたしは今まで何も話さなかった。もしかしたら、延光にも詮索されたくは無いのかも知れない？それが延光とあたしの見えない壁なのだとやっと判った。

自分から壁を作り、それを叩き壊すと言う事は、それだけ自分を知ってもらいたいと言う事の表れ。そして、相手を知るための手段。話さないと判らない領域。

一人で居たいけど、誰かと心を交わしたい。なんて事を今更ながらに考えていた自分が、愚かしく思える。

だって、あたしは今、延光と言う人間を知りたいと願つてゐる。そう。願っているのだ。

まだ時間は有る。もしあたしが洗いざらい、話をしたら、延光はその話を聴き、そして、自分のことを話すのだろうか？否、それは

判らない……隆とはまた違う。でも、隆は知っている。そう。知っているのだ。それは家族だから？それとも、ちゃんと向き合って話をしたから？

頭の中はそれで一杯になった。

だから、決心した。

あたしはこの旅行で、自分の事をちゃんと話そうって。そうしたら、今の自分を変えられるのかも知れない。

そう、あたしの旅の目的を果たせるかも知れないんだ！

そこまで考え、急いで自転車に跨り、二人が走っていく道を走り始めたのである。

自転車で走る事五時間。もう街中を走っている。陽も傾きかけた夕方間近い時間帯。

これってどの辺りなのだろうか？何て事を考えてみるが、はてさて？

とにかく標識を見て、ここがどこだかの見当だけつけてみる。高松市内だけは間違いなさそうだった。

そんな時、走らせている自転車を止め、延光が、後方を着いて走っているあたしに言った。

「汗かいたやん。一つプロ浴びたい気分とちゃう？」

あの一時沈んだ表情はそこには無かった。いつもの笑顔がそこに有った。あたしは少しだけホッと胸を撫で下ろした気がする。

「ねえ。国分寺って、今日中に着く？あたし、無理そうだと思うからさ、この街の中でホテルなり探した方が良いと思うんだけど？」

と一考を投じた。このまま夜まで走り続ける気分にはなれない。だって、夜まで走り続けて、着きませんでした！なんて……馬鹿げている。それに実際この汗は気持ちが悪かった。

「のぶちゃん？おなかも減るし、今日は市内のどこかに泊まろう。その方が良いのかも知れないよ？ちょっと、ハードスケジュール過ぎると後半が持たないと思うしね？」

隆も、いつもの隆と変わりがなくて、あたしはホッとした。険悪なままで居るのは勘弁だった。

「うん。近くの安い旅館みたいな所に泊まることにするのも一考やな？ 民宿みたいな所とかないやるか？」

と言う事で、あたし達は、カプセルホテルみたいな簡易的なところを捜し始めた。

が、せっかく見つけた処は中学生お断り！ みたいな事で、追い出されてしまった。

「うーん。この際、普通の旅館探そうか？ 在るんかいな？ オレ等が泊まれるような所って……」

でことで、やっと見つけた所は、古びた年代物のホテル。宿泊料も高くなって、それなりにしつかりしたところを選んだ。

「やはり、中学生だけで、アポ無しに泊まるのって、世間では通用しないもんやな」

つくづく、世の中って子供に優しくは無いものだ。

「でも、何とか安く泊まれるんだから文句言わない！ 明日からはこんなに上手くは行かないと思うよ？ これからドンドン泊まる所なんてなくなるって僕は思う」

その言葉で、あたしは余計心配になつてくる。見知らぬ土地で、自転車旅行。この年で出来る事なんて限られてくる。しかも、お金は余り使うことは出来ない。無駄遣いは禁物！ なのだから。

「それもそうやな？ 何のためにテントなんか運んでるんか判らんもん？ 食べ損なつたらまずいから、これからは非常食として何か買い足していくか？ でも、コンビニくらいは在るやろか？」

何て会話に繋がった。きつと延光も現実世界って物を理解し始めたらしい。って遅いわよ！ そんな風に愚痴りたくなる気分だ。

何にせよ、今日は高松市内の、そのホテルに泊まることとなつた。夕飯込みで、三千円は丁度良い気がする。五千円も使つたらそれこそ問題である。でも、三千円もきつところだったり？ 何て事を考えながら、三人一緒の部屋を取った。始めは、あたし一人別部屋

にしようかと思っただけ、兄弟と言う事で、家族旅行へ何て事を打ち立てたものだから、別部屋を取るわけには行かなかった。

ああ、無情……

男の子と相部屋だなんてマジ寝れそうにない。って、思ってた。う。が、延光はそう思っただけじゃないらしい。隆も平然としている。あたしって、女の子と思われてないのかしら？ってまた愚痴りそうになった。

「先に、風呂行けよ。葵っち？オレ等、番しておいてやるから！」
って、ここ、ユニットバスなのですが？番も何も無いじゃん！あたしはまた突っ込みを入れたくなった。しかし、
「女の子優先しなきゃね？」

隆がまるで補足するように言った。それで、そう言うことかと澁々ながらも、先に風呂を頂いた。

シャワーだと、お風呂に入った感じがしない。それに狭いものだから、着替えも、持ち込むスペースを作るのがかなり難しい。

ここに泊まる人達ってどうしてるのだろう？何て事を考える。

でも、シャワーを浴びて、少しだけでもスッキリした感じがした。あの汗を洗い落とせる事がこれほどとは思わなかったさ。

シャンプーもリンスも備え付けだし、石鹸も有る。至れり尽くせり。

終わったところで、新しい寝巻き用のＴシャツと半ズボンをはいて出ることになる。

結局次に入ったのは、隆。あたしは、テレビも何も無い所で、肩にタオルを引っ掛けて、延光と話をする体勢を取ろうかどうしようか迷って、そして、結局何も話せ無いままで、隆が出てきた。

「早かったんやな。どれ。オレも入ろうか！」

と言う事で、ユニットバスは延光の番をむかえる。あたしは、鼻歌交じりに入っていく延光の背中を見送って、今度は隆と向き合った。

「あたし、ちゃんと、延光くんに話すから！それだったら、応え

てくれる？」

率直に言った。だって、風呂の時間ってそんなに長くは無いのだから。

「良いんじゃない？そう言う事なら、のぶちゃんもきつと話してくれると思う。のぶちゃんの傷は深いけど、それを全部話すのって嫌な訳ではないみたいだしね？」

余り、関心は無さそうだったけど、隆の場合、嘘はつかないし、こつこつという話を真剣にする事を望んでいるみたいだった。

傷……

それはあたしにも有る。今迄誰にも話せなかった傷。延光にも、隆にもそれぞれ違った傷。人にはそれぞれ持ち合わせている傷があるけど、そう見せない演技が必要なのだ。

判ってる。そうして生きていかなきゃいけない事も。

「出たよ〜ん！さて、飯食いに行こうや！」

ジーパン姿にＴシャツの延光は、もう、腹ペコみたいな表情で、カラスの行水並みの速さで出てきた。

「何だろうね〜ご飯って！」

「さてな〜うどんやったら勘弁。昼食べたもんな？」

「葵っちも支度していくで〜乗り遅れたら損や！」

そんな感じで、まず風呂に入ったあたし達は、バイキング形式の軽めの洋食風の夕食に有りつけたのであった。

#13 隆の歳

朝は、六時に起きてチエックアウトを済ませ早々に旅立った。

昨夜は、皆疲れが溜まっていたのか？確かに筋肉痛だけど……直ぐに就寝に至った。おながが膨れたのも手伝って、気持ちの良い睡眠。同じ部屋のお年頃？の男女とかそんな事も考えずに、ボタン・キューって感じだった。

近くに、スーパーを見つけて、お惣菜や弁当類。ドリンクを詰めるだけの物達を掻き集め、そこからまた再出発をした。

そして分かれ道に到着。道は、右と左。

「さて、どうしましょ？右に行けば愛媛県。左に行けば徳島県。って、国分寺って決めてたんやから、右かいな。」

あやふやではあるが、結局流れ的に愛媛県に決定。あたし達は、キコキコと自転車を漕ぎ続けることになる。

お昼時、栗林公園への道はまた違う道にそれた所。その辺りまで漕いで、一旦自転車を降りる。

「飯食うーオレ腹減ったんにや。」

お前は猫か！『にや』って何だ！突っ込みたいけど、あたしも実際おながが減ってその位言いたくなる気分だったり。只でさえ朝早くに起きて、止まることなく自転車を漕ぎ続けているのだから、おながが減らないわけは無い。

「栗林公園にでも行ってみるか？」

隆は提案した。だけど、脇道にそれたら国分寺にいつ着くかなど判りはしない。だから、結局、もう少し行った所のちょっと休憩できる所で昼食を採った。

「今日中に着けるんかいな？」

休憩時に、ボソリと延光は言葉を発した。何だか焦ってる？そんな言い回しだった。

イライラしてる感じは微塵にも見せないけど、あたしは感じた。

「何とかなるわっ！って言ったのどこの誰だった？何とかするしかないんだよ？のぶちゃん！そう思うんだったら、夕方までに到着する意欲を見せようよ！」

隆は黙々とご飯を食べてる様だったのに、どうやら一言一句聞き逃してはいなかったらしい。隆には恐れ入りますよ。本当に延光の扱いに慣れてる。

「そう言えばさ？隆君って、何歳なの？あたしと同学年？」

そうそう。考えてみれば、隆って年齢訊いてなかった気がする。

一見人と余り係わりたくない風に見える。突き放したクールな面を持ち合わす隆の年齢をあたしは知らなかったわけだ。

「ボク？あ、言ってなかったかな？そう言えば。小学六年生だよ？」

割り箸を置きながらそう言った隆は、不思議そうにあたしを見ていた。それを訊いてどうするの？見たいな目。

「え？小六？って、延光君より年下な訳？嘘だ？」

あたしは、つい思ったことを口に出してしまった。だって、間違ったらあたしより年上に感じられるんだもん……

「ひつで！オレの方が年下って思ってたわけなんや？葵っちは！」

延光が、男の沽券に係わる！みたいに、あたしの言葉で突っ掛かってきた。

「いやさ、小六には見えないんだもん！別に比較してそう言ってるわけじゃ無いんだよ？誤解しないでよ！」

あたふたと、言葉を編み出して、あたしは何とか延光の頭に昇ってる怒りを取り除こうと必死だった。が、隆が、

「二人とも、ご飯食べ終わっただんなら行こうよ？のんびりして場合じゃ無いと思うけど？」

当の本人にそう言われて、延光とあたしは残ってるおかずを全部平らげ、ゴミを掻き集めて、また自転車に跨った。

三人の中で一番隆が大人なのだと、この時悟った瞬間であった。

時間が経つのが早いのか？それとも、あたし達の自転車を漕ぐ速

度が速いのか？大きな通りをひたすら走り、国分寺へ夕方前には到着した。

「着いたね？どう？目指してた所にたどり着いた心境は？」

あたしは、晴れ晴れとした気分で問いかけた。

「うん。最高や！さて、これからお参りしてこないとなあ？行こうや！」

延光は、先頭を切って走り出した。

実際には第八十番札所『はきゅうざん白牛山せんじゅいんこくぶんじ千手院国分寺』と正式名称が有

るらしい。寺の中は意外に広くて鳩が一杯いた。

松が綺麗に整えられた仁王門。入母屋造り九間四面という本堂。

その右手に在る大師堂は二重の塔みたいな感じで白く綺麗な壁で出来ていた。

その塔の前には、千体の水子地蔵が祭られている。

「可哀相にな。生まれて来ること適わんかったんやろ？それを考えると、オレらは幸せなんよな……？」

自分を指して言うのか？それとも、身近に居る隆に対してそう言ったのか？それは判らないけれど、その言葉に隆はこう応えた。

「そうだね。こうやって生きて、色んなものを見て。幸せだよね？」

「食べてつてのも有るな？」

「それはのぶちゃんが特に！でしょ？」

「あははは」

二人の会話に入ってるわけでも無いのに、あたしは思わず一緒に笑った。

そして、金堂跡礎石を見て、梵鐘を見て周り、あたし達は静かにこの国分寺を後にした。

国分寺を離れたあたし達は、次に何処を回るかの計画を立てるため、近くの『ジャンボうどん』と言うお店に入った。夕食も兼ねてである。

あたしは、釜あげジャンボを頼む。延光と隆は、冷やしジャンボを頼んでいた。

名前の通り、凄い量で、あたしは満腹感一杯で、食べ終わると思わず背もたれに寄りかかるくらいだった。

「でと、これからやけど？もうホテルなどはないと思ってくれた方が良いかもや。って事は、自動的に、野営。覚悟はええか？」

それについては、もう、判りきっているよ。とあたしと隆は頷いた。そして、夜半近くまで走る事になると言う事で、七十九番札所の天皇寺を目指す事になった。そこはもう坂出市に入るかは入らないか？の所である。

「そこで、密かに一旦野営させてもらって、大きな通りで行くとやな……この辺りかな？」

三人で地図を覗き込む。あたしにはちょっと判りづらいけど、県道三十三号線から天皇寺を少し戻って、十一号線とやらを、ひたすら走るつもりでいるらしい。

「明日は、お寺周りはしないで、一気に愛媛県へと突っ込んでいくつもりでおこうや？ま、寄れるんやったら、曼荼羅寺にでも寄りたいなあゝ思つとるんやけど？どうや？」

曼荼羅寺まで縮尺で換算すると、約十六キロ。いけない距離では無いと思う。途中何かアクシデントが無い限りは。だって、二時間余りで人は四十二キロ近く走れるんですものね？無理じゃない無理じゃない！

「それじゃ、そろそろ、プランも立った所だし、出ようや？」

あたし達は、ゆっくりと立ち上がったのである。

天皇寺に辿り着いたのは、一時時間後くらいだった。自転車の電氣をつけて走らないと危険だったりでしたので、思ったより時間が掛かった。でも、無事辿り着いたので良かったと思う。

第七十九番札所、『金華山^{きんかざん} 高照院^{こうしょういん} 天皇寺』歴史としては、崇徳上皇^{とく}の縁の地だと言う事らしいが、歴史に疎いあたしにはチンプ

ンカンブンであった。

もう、夜になってしまつて、周りが余りはつきり見えない。こんな感じで、本堂まで行き、あたし達はお祈りをした。

「さて、寝るとこ確保やな？」

そう言つて延光は、張り切つて、お寺の中の木々が有るところを探し始めた。

「ちよつと待つた！お寺の中で寝る気なの？それは罰当たりだよ！あたしは、余りに非常識だと思つた。だけど、そのほかに何処？と言われても、余り意見出来ないんだけどね？」

「良いんじゃない？罰は当たらないと思うよ？だつて、ボクら一応お遍路さんしてるんだものね？その位、仏様も見逃してくれると思うんだけど」

隆まで、そんな事を言う！全く呆れ果ててしまふわよ！でも、二対一の意見で結局この地にテントを張る事と相成りました。

「葵っち！その杭、きちんと持つててや！今これで打ち込むんやから！」

あたしは力仕事をしないで補佐役に回る。そりゃ、力仕事よりこちらの方が楽だけど、こき使われてる気がしてちよつとムツとしていた。隆は隆で、飄々と、テント張りしてるし。慣れてきたとは思つても、やはり変な二人だと思う。で、三十分後には初めて張つたテントが完成した。

あたしは、早速中に入った。

「ねえ！これつて三人ちゃんとは入れるの？狭い気がするけど？」

そう、中に入って初めて気がつく事はそれ。

体を密着させないと、絶対入れない広さ。

「入れる、入れる！気にするんやない！」

延光は、何も気に止めてない様にして中に入ってきた。

うわっ。汗臭い！ってあたしもか？と思つて、鼻を腕に近づけて臭つた。

「うっ！」

自分も臭い。みんなの事言えないので、じつと我慢していたら、
「何か臭うね」あ、消臭剤持ってきたから、振りまこうね？」

凄い！そこまで考えてたのか隆は？あたしは隆に感謝したい気分
になった。

本日は、お風呂に入れない事決定。もう、後は寝るだけ？だな
なんて事を思い、あたしは、タオルケットを握り締めて、テントの
一番奥に引っ付く感じで寄り添った。

「さて、明日の事も有る、寝よか？」

そう言つて、延光は付けている懐中電灯の明かりを消したのであ
る。

#14 葵・過去の傷

朝は澄んだ空気の中目を醒ました。

窮屈で、暑くて仕方なかったこのテント内。しかし、横になつて暫くすると眠りに入ってしまったのだから不思議である。

お寺に有るお水を頂戴して、あたし達は歯磨きと、洗顔をした。まだ白んでいる空の下、さっぱりして気持ちが良くて仕方が無い。

「昨日はよく眠れた？」

あたしは、延光や隆に問いかけた。

「うん。よく寝れたわ。隣で凄いイビキかきよるんがいても平気やったもん」

「そうそう。ついでに寝言まで言うんだもんね？」

え？それって誰の事かな？あたしは二の句が告げなくなった。

「ま、でもすすきり快眠だね。気持ち良く寝れたよ？誰かさんと同じくね？」

うっ。これは、よほどだったと言っても過言ではないのかも知れない……って思ってみても、詮方ないが、頭を不意に横から殴られた気分だったり……言葉が胸に刺さります。

「と言う事で、テントを畳んで直ぐに出発！朝御飯はもう少し待つて貰う事になるけどええか？」

そりゃ、先にテント畳まないと、場所が無い。あのテントの中で食べるご飯なんて嫌だ……って思う。

なので、直ぐ様テントを畳み終えて、非常食のカロリーメイトを食べた。しかし、食べたって気がしないのは？何で？これだけで事足りる物なのに……

「それはやな？今旅をしていて、十分身体を使ってるからや！酷使した身体に、必要なご飯って物は有るんやからな！」

と、延光は応えた。そうなのね……今まで気が付かなかったあたしも間抜けだけど、こういう機会が無かったし？だから余り感じた

事がなかったのかも知れない。

「さて、行くか？」

「はい」

「うん」

皆賛同して、自転車に荷物を詰め込むと、十一号線まで引き返し、そして、一先ず曼荼羅寺へと向かったのである。

過ぎ去っていく風景が、あたしの脳裏に焼きつく。全く知らない場所を走っている自転車。そして、乾燥している空気があたしの体を擦り抜けて行く。

香川県は、池が多い県として有名らしい。あたしはその光景を一目見たかった。淀む池に張った水。しかし、その水嵩は雨のないこの時期にはカラカラに乾いてしまいうような気がした。実際そう言う所も有るのかもしれない。

あたし達は、何も会話を交わさず、ひたすら自転車を漕ぐ。これは或る意味仏に仕える苦行僧の様にも見えるし、思える。

今日は、雲ひとつ無い空。それが心にどう響くのか？ 気持ち良いとも取れるし、また、真つ青な空が冷たくも感じる。

この空は、どの地方にも繋がっている。そう考えると、今、あたし達以外の人達もこの空の下、何かに打ち込んでいるのだろつなと励まされた。

三時間後、回りは田園地帯。そこにあたし達は、曼荼羅寺を拝した。

第七十二番札所『我拝師山^{がはいしざん} 延命院^{えんめいいん} 曼荼羅寺』西行法師も訪れたことが有ると言われているお寺。弘法大師の先祖を祀るお寺。それがここだった。

山門をくぐると、石橋があり、境内に入る。

三百七十枚の格天井と言う物は、内陣と、外陣の二つで構成されてて、まるで、この世の真理を莊嚴に映し出しているようである。内陣は天空を意味する『二十八宿』の星座を描き、星座中央には、

『法輪』を、四隅には『羯磨^{かつま}』が配されていた。外陣は、緑色を基調とし、仏の世界で言うところの莊嚴花である『暈網^{うんげん}の花』が一面に描かれていて、それに見入ってしまった。あ、このガイドは、延光が持っている本で、知ったことだけど。

そして、このお寺には桜の木が沢山植えられていた。もし今の時期ではなく、桜が咲く春ならば、とても綺麗だろうな。なんてことを考え、あたしは今見れない桜を想像して、目の前の桜の木を拝んだ。今は青々とした葉が莊嚴と目に映っている。

ここでのお参りも無事終わり、あたし達はさらに先を急いだ。何処までも続く道。

途中、昼ご飯を食べる時間を取らないといけなくて、標識に有る豊中町で、一時休憩した。道端だけど、この旅で培ってきたことが役に立っているのかいないのか？恥をかき捨てて昼食の非常食を頬張る。

「凄く喉が渇くよね？自販機無いかなあ？」

あたしは、お腹も減っていたけど、それより何より喉の渇きが気になっていた。

「あそこに自販機があるみたいだよ？買ってきたら？」

隆が見つ付けてくれたその場所に行き、あたしは小銭を取り出して、ペットボトルのお茶を購入した。

「延光君や隆君は喉渇かないの？」

帰って来た時に二人に問いかけた。だって二人とも喉を潤わそうなんて考えは無いようだったから。

「うーん。喉は渇かないなあ。その代わり、マジお腹が減った」

だとさ。汗として排出した水分を取り戻した方が良いのに？変なの！

あたしはそんな事を考えてしまった。

そして、食べ終わると、

「このまま愛媛県へと入るまで、突き進もうと思うんやけど、異存ないやろか？」

地図を片手に延光はそう言つてのけた。

「てことは、ここから二十七キロ弱だね。川之江と言う所に入ると言う事なのかな。このまま行くと、海岸線が見える行路だね？」

隆は、十一号線を手でなぞつてそう言った。

「海が見えるの！素敵〜ねえ、泳いだら駄目？凄く泳ぎたい気分なんだけど〜」

あたしは、今、泳ぎたい気分になられていた。だって、本当に暑いんだもの……

「葵っち、水着持つて来とるん？」

延光は、凄く用意周到だなあ〜みたいな目であたしを見ていた。隆も、驚いてるような目で見ています。

「水着なんか持つて来てないわよ！ただ、この格好で入ったって何も変わらないじゃない？汗でびしょびしょなんだもの〜」

「なんや。そう言う事か〜ええよ？海岸線で泳げる場所があるようやったら、泳ぎや〜昨日風呂も入れへんかったしな！オレらも泳ぎたいし〜」

皆考えてる事は一緒かも。

こんな感じで、またプランは立った。あと少しだ！県境まできたら、楽しみがまた増えると言うものさ。

あたしは非常食を鞆の中に仕舞うと、また、長く続く道を自転車で走り出したのである。

道をただただ進む。

真夏の太陽が照り付ける。慣れたはずの肌が、ジリジリと音を立てるかのように焼けていく。その肌に汗が流れ、まるで、サウナに入っているかのような感覚を覚えてしまう。

さつき飲んだお茶の分だけ汗が流れた。

なるほど、汗をなるべくかかない為に、水分を採らないようにしていたのか。延光と、隆は……そう思い、あたしも必要以上は採らない様にしなくちゃと思った。

脚はもう、筋肉が痙攣を起こしそうなほどパンパンに張ってしまい、自分の脚の様に感じない。だから、漕いでいる感覚も希薄。

ただ、前に進むために勝手に脚が動いている感じである。

今しなくちゃいけないこと。それはペダルを踏み、前を見て走る事。それだけだ。

そうして、あたし達は三時間後位に、香川県と愛媛県の県境にいに到着した。

潮の香りが鼻につく。港と変わらない潮の香り。時々右側をチラチラと見る。寄せては返す波が見える。

テトラポットが遠くに見えた。

「海だよー！」

あたしは思わず声を張り上げて、延光と、隆にこの喜びの気持ち伝えようとした。

すると、延光が、キキッと、自転車を前方で止め、そしてそれに気がついた隆も止まった。

「うわっと、急になんで止めたのさ！」

「いや、どの辺りだと泳げるんやらかゝ何て思ってたやなあゝ」

なんて言いながら、瞳はランランと輝いてる。気になってたのに、そう見せないで置こうって事だったのかな？なら、素直にそう言えば良いのに！あたしはクスクスと笑った。

「何笑つとるねん？あ、あの辺り砂浜あるでゝはよいこやゝ！」

もう心が躍りまくってるようですね？っていうあたしも、はい。同じですが？

「早く走らせなさいよゝ！は・や・く！」

前方が詰っているものだから、あたしは思いつきり声を張り出して先を促した。

満潮では無い様子な海。

砂浜がとてもサクサクしていて、靴を履いているあたしの足音は、心地良かった。綺麗な砂浜。ちょっとだけ荒い石もあるけれど、そ

れでもこの砂浜は綺麗だ。

そして、荒い波の無い海は穏やかで、寄せてくる波から逃げるように足を運ばせ、そして、返す波に向かって挑むように走る。

そんな遊びを子供みたいにしていたら、延光が、靴もジーパンのズボンも脱ぎ捨てて、ザバザバと波の中へと入って行った。あたしはモロに、延光のトランクス姿を見てしまった。

「ちよつとゝ女の子の面前でそんな堂々と脱がないでよゝ！」

恥ずかしいなあゝもう！何て思っていると、

その後を続くかのように隆まで飛び込んで行く。まあ、隆の場合、半ズボンだから脱ぎはしなかったけど……

「葵っちもこんかいなゝ！気持ち良いってよゝ！」

沖の方へ泳いで行く延光と、プカプカまるで波に身を委ねるかのように浮かんでいる隆を見ると、あたしだって入らいでかゝ何て負けじと靴を脱ぐ。そして、パシャパシャと、波際から海へと入って行った。

あ、気持ちが良い！

膝丈まで入っただけでも判る。この海水の冷たさ。そして、焼けた肌に少しでも沁みる。

でもそれが心地良い。

こんな良い天気にも、そして、こんな旅の間に海水浴が出来るなんて思ってもいなかった。

あたしは、さらに沖へと足を運ぶ。

そして腰まで浸かった時、思いつきり腕を上げてクロールの体勢に入った。

「さて、鬼ごっこだよゝあたしこれでも水泳得意なんだからね！」

あたしは、延光目掛けて言い放った。体が凄く軽い。これなら誰にも泳ぎ負け等しない気がする！なんて調子に乗ってしまった。

「おつとゝそうきたんかい！捕まえられてたまるかい！隆！鬼ごっこや、葵っちに捕まるなよゝ！岡山県民の意地にかけてやゝ！」

なんて、罵声を上げて沖へ沖へと逃げてゆく。

ふつと笑いがこみ上げた。だって、こんな事言つて、遊びに誘うのなんて、有つただろうか？無かつたはず。あたしの記憶の中を探してみた。誘われた事はあつた。だけど率先して行動に起こした事など無い。だから、凄く新鮮で、こんなに楽しいなんて思つてもいなかった。これって病み付きになりそう／＼何て事を思ふ自分に、新しい自分を見つけた気がしたのであつた。

時間は、遊んでいるあたし達を置き去りに過ぎていき、太陽はゆつくりと傾き始める。

こんな時間は直ぐに経つのだと知つた。このまま時が止まればいいのに？なんて思ふ自分。過去に有つた思い出が蘇つた。もう忘れてしまつたと思つていたこと。本当は心のどこかで忘れられてなかつたのだとこの時痛感して、そしてふと我に返つた。

まだ、忘れられないんだな……と。

「葵つち？そろそろ上るで／＼このまま川之江の何処かで飯食わんと！」

既に砂浜に足を着けている延光の声で今に戻つた。

「あ、うん。今行くよ／＼」

あたしは振り切るように急いで、砂浜に戻つた。

「あゝあ、気持ち悪／＼」

延光は、ジーパンを履きながらそう言つた。

下着が塗れたその上に乾いた服を着たからである。

「どうせなら、少し乾かしてから行く？少ししたらもう少し乾くと思ふよ？」

隆はクスクス笑いながらそう言つた。

あたしは、空笑いしか出来なかつた。面白いんだけど、思い出してしまったことが頭から完全に離れなかつたからだつた。

そして太陽は、そんなあたしの心を知らぬ振りして、サンサンと照らし続けていた。

#15 延光と延光寺

川之江市内で、あたし達は少し早い夕食を食べた。

そうそう、ここ川之江市は、今では四国中央市と言われているらしい。地図が古い物だったから、その事を知らないあたし達は、一瞬呆然としてしまった。が、道行く人に尋ねてやっと理解した所。

どうやら、最近やたらと多い市町村合併と言うものが有ったらしい。東京でもあった。色々な大人の問題？で、行われる物。でも、それってあたし的には良い事だと思う。けど、郵便屋さんは大変だろうなって思うけどね？

そして、あたし達は先を急ぐために、食事を終わらせると直ぐ新浜市と言う所へ向かった。この分だと、夜九時ごろには着くだろうという計算の元に決断付けられたのであった。

にいはい
新浜市には予定通り九時頃に到着した。

さて、泊まる所を探さなければ。と言う事で、ウロウロと街中へと移動。しかし、田舎のようで、泊まれそうな所が見つけれなかった。が、一軒だけ、旅館を見つけることが出来て、あたし達は急いで飛び込む。

「お願いします！そこを何とか！」

初め不審げに見られた。確かに潮の香のする服を着た、汗だくの子供達三人を、不審に思わない訳が無い。

「でもね」

そんな感じで渋っているおじさん。でも救いの神が現れた。

「どうしたの？」

若女将なのか？ほっそりとした優しげな女性が着物を着てホールから現れたのである。

「若女将？この子達が一晩泊めて欲しいと言って来てるのですが…

…」

なんて事をいった。完全に怪しまれている。

しかし、その若女将は、

「良いじゃないの。何か問題があるの？確かに若い子達だけど、泊まる所が無いのに追い出すの？それの方が問題だわ？」

「そうですか……」

「ねえ、君達、きちんと泊まれるという保障があるのよね？」

と、訊いて来た。

「勿論です。先にお支払いしても結構ですよ？」

隆が、クールに返した。

「なら、良いじゃ無い？お泊まりなさい。そうね。奥の間はまだ空いてる筈よね？そこは安く泊まれるし、宜しいわよ。さあさ、お入りなさいませ。夕ご飯は食べられて？」

なんて感じで、カウンター奥にあたし達を通してくれた。

狭い廊下。そして、木張りのそれは『子羊園』を思い起こした。

奥に行くと、八畳くらいある畳が襖の向こうに広がっていた。
「どうぞ。夕飯食べてらっしゃるのですしたら、お風呂ね？その格好だと」

といってクスクス笑って、あたし達を見た。潮でバリバリしたTシャツを見たのだろう。一日ぶりのお風呂！そう考えると凄く嬉しい気分になる。

「お洗濯はその時した方が良いわね。今日の夜も良い天気みたいだから、外の物干しに干せば、乾くのも直ぐよ。では、ゆっくりなさってね。お風呂は一階の右奥にあるわ。では、わたくしはこれでごゆっくりなさいませ。小さなお客様」

と言って、若女将は去っていった。

「捨てる神なんて居ないのやな？ホッとしたわ」
襖を閉め終わった瞬間延光は零した。

「助かったね。若女将さんが良い人で！」

あたしは、世の中本当に捨てたものじゃ無いと思った。

「さて、お風呂借りるか」久々に湯船に浸かれると思うと、感涙っ

てやつや」

「そう言えば、三日間入ってないよね？もう三日？なんだね」意外と持つものだね？」

男連中はもう、お風呂道具を用意し始めていた。あたしも慌てて用意する。

今回は、男湯と女湯が違ふと思われる。露天風呂という触れ込みも無い旅館。ホッと息がつける、つかの間の命の洗濯。そう思うと、ゆっくりのんびり入りたいなと思うあたしであった。

お風呂はごく一般的な、銭湯の様な感じだった。

白いお湯が良い匂い。

そして、ここ新浜市と言う所が、水が綺麗な市として有名だと言う事を知った。

美白効果とかあるかしら？なんて焦げてしまった自分の肌を見ながらそんな事を考えて笑ってみる。

だけど、昼間のあの思い出したくない昔の出来事を思い出し、その笑った顔が思わずスツと引くのを感じた。

昔の思い出したくない事。でも忘れることが出来てたはずなのに、忘れてはならない事だったのだと思い、今の自分が情けなく感じられた。

あの子はもう居ない。

あたしの前から去ってしまった。

もう二度と逢うことなど出来やしない。

もう、二度と……

そう思うと、乾ききった筈の目尻から涙が零れ落ちた。思い出せば思い出すほど涙が込み上げてくる。

あたしは、あの子がいないと駄目だった。

人を愛したのは、あれが最初で最後。

もう二度と、人を愛することなど無いと思っていた。

でも、今あたしは確実に人に興味を持ち始めている。断ち切るた

めに新しい事を見つける旅。そして、それは、あたしの中に増幅し、そして、今この時点で走馬灯の様に思い出している。

あの子の屈託の無い笑顔が脳裏に渦を巻く。

大好きだった。かけがえの無い子だった。そしてあの事を忘れてしまいたくて、人からまた離れた。生まれた時から人に関心を持たない人間に戻った。

だけどそれは、自分が傷つきたくないからだ。判っている。もう二度とあんなになるまで傷つきたくは無い。その一心で、人との距離をとる。

今年の中学生の夏休みの宿題に出された短歌。

あたしは、それを貰ったその日に仕上げた。

切っても切れない人との繋がり。それを欲しているような解釈の短歌。

そう、あたしは人に何かを求め、だけどそれを求めて傷つく事を恐れている。人の輪に入ること。それが目的ではない。かけがえの無い者を失っても強く生きる力の源を欲している。それは、都合の良いすぎるあたしのエゴかもしれない。だけど、このまま社会人になつて本当に幸せなのか？あの子はそれを望んでいるのか？

そう考えると、自然と人との繋がりを大切にする自分でありたいと、心のどこかで願わずにはいられない訳である。

「ごめんね。あたし、幸せを自分のこの手で掴むよ？それでも、あなたは許してくれますか？」

ボソリとあたしは湯船に浸かったまま呟いた。

「葵っち、遅かったんやなあ？のぼせたりせんかったか？」

余りにも風呂から帰るのが遅かった為か、待ったやん！みたいな表情で延光は襖を開けたあたしに向かってぶつくさ言った。

「せっかくの湯船だもの、葵ちゃんも、気分が良かったんでしょ？のぶちゃんそんな言い方は無いよ？」

女の子の事情をも把握してるようで、隆の言葉はありがたかった。

「何？明日の予定立ててるの？」

あたしは、地図をおっぴろげている既に布団が引かれた畳の上を歩いて、その地図を見た。

「うん。そうなんや。明日なんやけど、今治市まで回る経路と、そのまま愛媛の県庁がある松山まで行くか？考えとるのや。地図見たら、今治結構お寺あるし周りたいんやけど、かなりの距離走らなあかんのやな……それを考えると、松山まで出て、そこから内子辺りに行くのもええな。何て思っとる。と言う事をさっきまで隆と相談してたんやけど……」

「そうだね」

あたしは、まだ心の整理が着いてなくて、地図を見ながらちよつと上の空。なので、今、肝心な話の内容について行けてなかったり。「今治は、タオルが名産らしいよ。でもって、お寺も沢山あるし。とか考えててね。葵ちゃんは、どうしたい？」

「うん。でも、大変な旅になるよね？あたしは、松山に行く方を取るかな？」

と言いつつ、楽な選択をしていた。

「そうやな。高知を回って、徳島までの経路を考えると、やはり、松山まで出てしまう方が得策か」

延光はちよつと残念そうにそう言った。

「そうそう。松山まで出るのは良いけど、その後が大変なんだよね。高知まで山を越えないといけなくなるから。四国山脈って、越えるの大変そうだし」

隆も同じ意見を持ち出してくれた。

「そんなに大変なの？高知県に入るの……」

「山道がめっちゃ凄い！この経路見てみい」

あたしは、その道を辿る指を見ていた。

「うわっ。山ばかり！でも、海岸線通れば良いんじゃない？かなり遠回りだけどさ？」

「それは、かなりな遠回りだよ。どのくらい時間が掛かるか……そ

れに、のぶちゃんの目的のお寺は、此処だものね？」

「いって、指し示したお寺は、第三十九番札所、延光寺^{えんこう}。だった。

「延光寺？って、延光君の名前と同じ漢字なんだね？」

ふとその名前を聴いた時、延光はちよつと影を落とした表情に切り替わった。何かあるのであるうか？このお寺に？

「読み方は違うんやけどね。同じ漢字や。ま、何処にでもある名前やし、別に関係ないわ」

と言つて、延光は、肩を落としてるように見えた。

「さて、道は決まつたし、明日はこの道を行こうか！お寺周りは、五十一番札所、石手寺にしておくか？此処有ならしいしなあ？」

と地図を見てみると、道から離れた所だと気付く。が、愛媛県のお寺は大きな道沿いには無いらしいことが判った。有るには有るけど、東予市手前で固まっている。が、延光は余り興味を示さなかった。

「それじゃ、そう言うことで。明日は、道後温泉で一晩明かそうね。聖徳太子も入りにきたと言う温泉だから、興味深いし？」

という隆の言葉で、この計画は打ち止めされた。

「明日も早めに起きて、頑張つて走らないとね？今日は泳いだし、体がクタクタだから良く眠れると思うよ？」

と言う事で、地図は仕舞われた。

縮尺で測ると、百キロ有る事に気がついてしまったあたしは、早く休もうと思った。

布団は客用にちゃんと清潔感のある真っ白なシーツで包まれている。

あたしはそれに潜り込むと、五分もしないうちに夢の中に誘われた。

あの子が、あたしに笑いかける夢を見た気がした。それが少しだけ心を癒してくれた。

そして早朝から大戦争。

昨夜洗って干しておいた自分の服を鞆にしまうと、一直線に洗顔や歯磨きをした。歯磨きつてご飯を食べてからする習慣があるのだけれど、そう言うのはこの際無視。人前に出るのに、歯磨きしてないのはちよつと嫌だなんて思ったから。

「あら、もうお出かけになられるの？朝食の用意できましてよ？」

バタバタやっているあたし達を、若女将が見てそう言った。

「そうなんや！やったら、食べてから出ようか？」

きちんとした食事を摂らずに出るよりまだ良い。延光の判断は正しいと思い、あたしと隆は頷いて、朝食を食べてから、チエツクアウトした。

さて、此処からは長い道のり。

途中、山も有るから今までみたいに楽な自転車旅行と言うわけには行かない。

目指すは愛媛県松山市！

あたし達は、目標を定め、コンビニで昼食用のお弁当を買い込むと、一気に道を走り出した。

標識は西条市、小松町、と此処まではなだらかな普通の道だったので漕ぐ事もそんなに苦ではなかった。

問題は、川内町に入るまで。

山道は辛い、あたし達は、ひいひい言いながら、自転車を漕ぐ。前だけを見て。

何処まで続く道なのか？山の空気を味わいながらそんな事を考える。遠回りしても、今治から行くべきだったか？何て事まで考える。が、後悔先に立たずであった。

汗のかき方が今までと違うなあゝなんて思いながらも、黙々と前に進む。そして、左手に見える桜三里入り口辺りで、予定より二時間遅い昼ごはんとなった。

「ねえ、これってちゃんと着くの？」

あたしは、不安が過ぎた為、延光をちらり見ながら言った。だって、まだまだ山道が続く。下りは良いけど上りの大変さはもう勘

弁だと思った。

「道がある限り、辿り着かないわけが無いやん。ぐつと我慢や！」

「仕方ないね。そう言うことだと思う。納得してこの道を選んだんだからね？」

それを言われると、頭が痛い。自分が言った事なんだから、今更
愚痴る事は許されない。

「さて、もうそろそろ、川内町に入る頃やん？後は下り一本。ファイトファイト！」

延光は至って元気そのものだ。隆は飄々としてる。相変わらずの
面々がそこに居た。

#16 道後温泉

そこから川内町に入るのは一時間後。かなりペースは速かった。坂道を対向車に気をつけながら下る。そして、眼下に平野が広がった。

そこからまた西を目指す。なるべく大きな通りを選んであたし達は進んだ。そして、国道三十三号線に出た。

車の往来が今までとは違って多い。大きな道に出たのだと判った。その道を、北上。ズンズンと進む。

もう、松山市の端に到達していた。

「このまま、地図を北上して、どうすれば良いんや？どっかに細かい地図売つとる本屋なかるうか？」

なんて話していると、左手に、大きな本屋を見つけた。

「おつしゃ、あそこで、地図見させてもらおうや！」

買わずに見るのね……

あたしは、延光のそのちゃっかり加減は、関西人のそれと同義だと思ったりした。

って良く考えると、延光って関西弁を喋るんだよね？関西出身なのかしら？

彼の生い立ちを知らないから、そうなのかどうなのか判らないけど、一々耳につく。関西弁。隆は標準語しか喋らないから、余計に耳に残る。

でも、この旅で、判る事であるし、今知る必要なんて無いんだと、この勘ぐり精神を抑えた。

本屋を出たあたし達は、真っ直ぐこの道を進む。そして、本屋で仕入れた（そこだけ書きなぐったメモ用紙）地図を頼りに、この街を探索して、ようやく道後温泉へと辿り着いたのである。

道後温泉に着いたのは、夕方前。

その近くの格安四千円程度のホテルに一先ずチェックインして、初めての愛媛県のお寺、石手寺を目指した。

道後温泉から南東に位置するお寺。

第五十一番札所『熊野山 虚空蔵院 石手寺』と言っらしい。

線香の香りが絶えずするお寺である。

四国でも名の通っているお寺であるらしい。が、見栄え的に見ると、あたしにはどう異なっているのかさっぱりである。そして、四国霊場でも、髓一の寺宝・文化財を有する名刹らしい。　って言われなくてもあゝ？

本堂は至ってシンプルで、階段をひよいひよい上っていくと直ぐそこにあつて、あたし達は、普通にお参りをした。

そして、国宝と言われる三重塔を見た。これって中に入れるのかしら？何て思つてあたしはのんびり外からそれを見た。塔って何のために作られたのかを知らない。全く疑問の一つである。住む訳でも無いのにさ？ね、疑問でしょ？

そう言つたら、

「象徴なんだよ」

と言つ言葉が返つて来た。シンボルね。昔の人が考える事つてよく判らん。つてそんな事言つてると、東京タワーの意味は？エッフェル塔は？自由の女神像は？つて事にもなりかねない。色々意味があつて建てられた物。である事を今更ながらに自分で納得した。

それから、訶梨帝母天堂かりていぼてんどうを見た。その中に、鬼子母神を祀る物もあつた。延光もだけど、隆もそれに興味があるみたいだつた。鬼子母神とは、子供を守る神らしい。男の子なのに、変なものに興味があるものだ。女のあたしにだって、まだそんな物に興味ないつてのに……でも、あたしと、延光とはまた生きてきた道がちがうからかと、この旅で気付いてたはず。生まれた環境の違いだ。

とりあえず、安産祈願の名所？と言つ事らしい。あたしにとって、今はまだ関係の無いことだけど将来の事もあるし？なんて軽い気持ちで見えていた。

そして、詳しく説明を見ると、妊婦さんが、堂の前にある石を持ち帰り、無事出産が終わったら、石を二つにして堂に戻すと言う事らしい。

ふん。だから、ここに小石が一杯積み上げられているんだなと納得したのである。

そんな感じで石手寺を見て歩いたあたし達は、夕焼けから、七色の空に変わりつつある空の下、道後のホテルに戻り、そのホテルにも有る温泉を利用しないことにして、お風呂の準備をした。

歩いて此处、道後温泉の本館に辿り着く。かなりの年代もの。正月前には一斉に煤払いをするらしいけど、それでも、木造のこの建物は歴史という物を感じさせてくれる。こういうのもまた良いなと思う。

そして、明治をイメージするガス燈が七本周りにあつて、ここだけでも日本の文化を象徴しているようで趣があり、あたしはちよつと嬉しかったり。ロマンティックな気分酔いしれたりしちゃいました。

そして、何より、あの有名な聖徳太子も入りに来たとされている温泉であるとか！

歴史つて凄いなあなんて思いますよ。マジで。それも言い伝え、伝記として残ってる所などが特に！これもロマンの一つだなうなんてね？

そんな有名になつた温泉も、時々湯が沸かない時が有つたそう。それを考えると、残せる物を大切に思う人達の願いやら、思いと言う物は、かけがえの無いものに感じられたり。そんな事を考えた。

霊たまの湯と、神の湯、椿の湯がある。その中でも霊の湯が観光者に人気だとかで、あたし達はどれに入るか協議をした。値は、やはり霊の湯が一番張つてて、子供が六百円する。でも、この位の出費良いよね？一時間以内、貸浴衣・お茶・せんべい、貸タオル（石けん付）であるし。至れり尽くせりである。

あたし達は、それぞれ別行動。

女湯は、中央に湯船があった。でも、中は近代的でちょっとだけ外観とのイメージと違って残念だった。綺麗なんだけどね？

そして、ゆっくり体を洗い流した。もう焼けた皮膚が剥け始めている。余り擦らない様に気をつけた。だって、色が剥げた皮膚ほどみつともないもの無いじゃない？そして、時間一杯ゆっくり湯船に浸かることにした。

周りの観光客もザワザワと、入ってきたり、出て行ったり。何とも普通に旅行をしてる観光客のように自分が感じられた。が、一風変わってるんだけどね？本当は……

こう人が多いと、昨日みたいに頭の中にあの子の事が頭を過ぎることがない。

なるほど。そうか……人が居るから回りを気にしてるんだ。だから、忘れてしまう。気が張ってるんだと自覚ができた。

そして、あたしは此処の所の旅で酷使してきた脚のマッサージを湯船で行う。揉んで置くと気持ちが良い。パンパンに張っていた筋肉が解^{ほぐ}れて行く。でも、大分慣れてきたなと思う。この旅にも。そして、延光や隆にも。

なんて事を思っていると、時間が来た。

あたしは、ゆっくり湯船から上ると、貸し浴衣を身につけ、せんべいを頬張って、牛乳瓶を片手に延光達と合流した。

「さて、明日からやけど！中山から内子周りと言う事で異存なかるか？」

ホテルに戻ったあたし達は、ご飯を摂った後、湯冷めしない内話をした。

「それで良いと思うよ？こちらの上浮穴の方で行くと、もう、山だらけだしね？それに、高知の市内行きになってしまう。それじゃあ、延光寺に行くにはわざわざ戻らないといけないでしょ？」

そう言うことで、誰も、昨夜決めたルート変更を言い出さなかつ

た。

まだ、南宇和へと向かう道も有るにはある。が、かなりな遠回り。これは流石に堪える。

だから、もつと直線的な道を考えた。

中山町に行く道は確かに山道だけど、それでも、遠回りよりは良いだろう。今日の川内町への山道を考えると、力が萎えるけれどもね？それだけあの坂はきつかったからである。

そして、この旅初めての、ベッド。

ああ、自宅を思い出すよ。スプリングがちょっと違うけど、横たわったら、寝心地が、畳の上にお布団を引いたものとは全く異なつてて、懐かしい。そして、あたし達は、明日に備えて、消灯を早めにした。

というか、皆疲れきつてて、その上、気持ちの良いお湯と、ご飯で眠くて仕方なかったのだと思う。あたしは、夢見ることなくグッスリと眠ることが出来た。旅行始まって以来の快眠だ。

明日、大変な事が起こるとも知らずに。

#17 葵・心の傷・告白

朝は、今日も快晴。

また暑い日が訪れた。

あたし達は、チエックアウトをすると、直ぐに、用意万端なのを確かめて、自転車に跨った。

ここから、内子まで六十キロ。お昼頃には辿り着くだろう。

道順としては、松前町から、伊予市を通って、中山町、そして、内子と言う順だった。

あたし達は、街中を信号に阻まれつつ進み、そして、少し遅れたが、伊予市まで辿り着いた。

そこで、お昼のご飯をコンビニでゲットし、そこから中山町を目指す。その為、五十六号線と言う所を走った。

だんだんと、家が少なくなり、山へと突入する。緑豊かな山。東京で見ることもない山がそこにある。

川内町までの道でもそうだったが、何となく親しみと言うものを感じ始めている自分は、もしかしたら、都会より、田舎住まいの方が性に合っているのかも知れない？なんて思った。

山はそこに悠然とあり、川もあり、そして、蝉の鳴き声。鳥のさえずり。何もかもが心地良い。

だけど、走っていく半ば、あたしの自転車がパンクしてしまうというハプニングが起きてしまったのであった。

「ちょっと待って！何か変なんだよ！」

漕いでも漕いでも、前に進まない。重くて仕方なくなり、最後には、ガタンガタンと後輪が悲鳴を上げたのである。

あたしが大声を上げたものだから、勿論、延光達は後方を振り返り、あたしの自転車の傍までやって来た。

「どないしたん？あ、これタイヤ、パンクしてるやん！どないしよ？このまま走り続けられるわけないし、自転車屋なんてこの近くに有

るわけないわ。隆！お前パンクの直し方判るか？」

って、隆に訊いたところで直せる確立もあるまいに……

「道具を思ってないから無理」

って、道具があれば直せるのですか？隆！なんて突っ込みはともかく、困った事態が起こった。前に進めず、後ろに戻るには余りにも進みすぎた。

「よし！こうなったら、ヒッチハイクや！」

何故そうなる？

「歩いていこうよ」ヒッチハイクなんて」

そんな事して、乗せてくれる訳ないでしょ？この人数に、この自転車車の数！よほど大きいトラックみたいな車でも通らない限り無理！でも、

「ま、仕方ないね。歩くにはきついもの。後は天に祈りましょうか？」

ああ、隆までそんなあてのない事を！

あたしは呆然として、突っ立ったままだった。が、延光達は、既に自転車を道の脇に寄せて、来る車を待ち始めた。あたしは、それを、恥ずかしい気分で見、そして、同じ様に、脇に自転車を止め、車を待った。

待つ事、二時間。

その間に止まってくれた車十台。思ったより反応はあった。しかし、自転車が有る事になると、皆、『ごめんね』と言って後ろ髪をひかれるような感じでその場を去った。

「あゝあ、やはり無理だよ。そんなに都合の良い車が来るわけないよ！」

炎天下の中、少し高地で涼しい風は吹くものの、日射病にかかりそうなくらい暑い。ひ弱な子だったら一発だろう。

「もうちょつと待ってみようや！もしかしたら来るかも知れんからなあ？」

延光はまだまだ！と踏ん張っているみたい。隆にいたっては、表

情すら変えてない。

まるで二人とも、神と言う存在を信じているかのようなのである。あたしは、そんな都合が良い事なんて有るわけない！とそう思ったその矢先、

「あ、ほら！トラックや！」

高知ナンバーの大きなトラックが走って来たのである。

延光はその車の前に勢いよく飛び出した。あたしは、引かれる！と思って目を閉じたが、トラックは、ゆっくり止まったみたいだった。

「どうしたん？君達は！」

トラックから下りて来たお兄さんは、まだ二十台くらいに見えた。かなり若い。

「自転車がパンクしたんや。ここから内子まで行こうと思ってたんやけど、歩くと凄いい距離やし、荷物も多くて困つとるねん！」

延光は、必死で今困っていると言った。

するとそのお兄さんは、

「内子かゝ通るけど、乗って行くか？君等、四国の人間じゃ無さそうじゃきい、大変じゃろ？」

お兄さんは、そりや大変や！って表情であたし達を見た。そして、「オレは、高知の足摺岬まで走るけど、内子までで良いのけ？」

「足摺岬？」

どうやら、その言葉に延光は反応したらしい。

「すまんのやけど、もしかして、延光寺って知つとるか？お兄さん！」

突然お寺の事を話し始めた。よほどそのお寺に興味があるとみえる。先にこのお寺の事を聞く辺りが、もう、それしか考えてないという勢いだった。

「ああ、知ってるよ。そこに最終的に行きたいのけ？それやったら、乗って行け。自転車は後方に積めるし、こんな田舎やから、荷台に人が乗っても怪しまれる事はそうないけ、オレはかまわんよ？さあ、

はよ、用意用意！」

延光の目は、嬉しそうに見開かれた。その様子を見て、あたしはそんなに思い入れの有る所なんだ。とやっと理解したように思える。実際の所が何かは判らないけれど。

だけど、そんな延光を見る隆の目は、少し寂しそうだった。その理由は今の時点では判る筈もない、あたしであった。

自転車を積み込み。あたし達はトラックの後ろに乗り込んだ。暫くすると、

「出発するきに、なるべく体乗り出さんように気をつけるように！」
そう言つて、運転席にお兄さんは乗り込んだ。

「はい！お願いしまゝす！」

荷台に乗ったままあたし達はそう返事をした。

自転車の旅の途中に、自動車に乗っているのが何だか変な気分。そして、延光と隆と改めて面と向かつてゆっくり話をする体勢は整っていた。

が、特別話す事が無いあたしは、山の木々を視界に入れて見守っていた。だけど、過ぎ去っていく景色が、過ぎ去る時間と同じように感じられて、あたしはまた、あの子の事を思い出した。

そして、この旅の途中、決心していた事を話す事にした。

そう、あたしの過去。そして、あたしの傷。

これを聴いて、延光や隆達がどう思うか？それは判らない。けれど、高松の旅館で、隆に言ったことを思い出した。

自分を知ってもらうためには自分のことを話す。

それは気になっている、延光の過去を聴く為の平等な代価。

この先、延光寺と言う所に着いたら、過去の事を知る事になるのかも知れない。だけど、それを目にする前に、あたしは話すべきなのかも知れないと思つた。

「聴いてくれる？これはあたしが家出をした切っ掛けとなつた出来

事。もう過去の事なんだけどさ……」

流れ去る木々を見ながらあたしは、徐に話し始めた。まるで、昔話をするアニメのナレーションのようであるかのように。

それを、何も口を挟まずに、延光と隆は聴く為にあたしの方に視線を向けた。

聴く体勢を整えるといった感じは見られない。ただ、話たい事を話したら良いんだよ？という風に見ているのを、あたしは背中で感じた。

「あたしはさ、別に、家庭に問題があつて家出したわけじゃなかったの。うちは、それなりの上流家庭だし、父は警視庁の人間。母は、専業主婦といった、或る意味恵まれてる家庭なの」

そこまで言つて、延光や隆はどう判断するのか心配になった。でも、何も言葉を掛けずに話を話すようにと頷いているのが判つた。「あたしって、物心ついた時から、自分と両親以外の人間に心を許す事ができる人間じゃなかったの。どういうわけか、他人に対して本音をぶつけると言う事が出来無いし、関心を持つ事が出来なかった。そう言う自分の前に小学六年生の時、一人の女の子が現れたの……」

そう、あの子と出逢つた。

春の桜が舞い散る四月。クラス替えが有つたため、あたしは六年生の教室の在る廊下を見回つた。そして、自分の名前を見つけた。

六年三組の教室の前。

そのあたしの横で、このあたしの背よりも低い黒い瞳が丸々とした色白の女の子が、ピョンピョン跳ねながら必死で名前を見つけようとしていた。

「なんて名前なの？」

見た事がない女の子だった。

ま、あたしが人に関心がないから、ただ、今まで知らなかっただけかも知れない。

「海野ミサって言うんだけど……」

ボソリとそう言った。人ごみの中だから、貼りだした名前が見えづらいつた感じだったので、

「あたしが探してあげるよ？」

と言ってしまった。

「ありがとう見えなくて！」

話し方から察するに、小さくても元気そうな女の子だなと思った。

「あ、有るよ。名前」

あたしは見つけ出して、その子に告げた。

するとミサは、

「ありがとうえっと、あなたもこのクラス？」

と、問い返してきた。

「え、うん。そうみたい」

あたしは、そっけなく応えた。

「名前は？同じクラスなら、仲良くしてね？あたしの友人って、皆違うクラスなの！」

凄く元気一杯にそう言ったものだから、それに釣られて、

「あ、あたしの名前は葵。美空葵」

「葵ちゃんだね！あたしの事は、ミサって呼んでくれたら嬉しいな」

とても人懐っこそうだった。それに、笑顔がとても似合う子だなとも思った。

それから言うもの、学校でも、その他の個人的な遊びでも、あたし達は束の間も離れるような事がなかった。常に、一緒にいるのが自然体。まるで空気を自然に吸える感じの様に。

「今日、お泊りしていく？」

なんて事も何度も有った。

宿題と一緒にミサの家ですることが日課で、たわいない話や、噂話をする事もあった。何故だか、その時が当たり前のようになって

いた。

ミサの家は、お父さんが実業家で、お母さんはパートをしながら家庭を守っていた。

その為、ミサは一人であることが多かった。が、友人は多い。でも、何故だか、あたしと一緒にいる時間が一番長いみたいだった。不思議だった。あたしは特別面白い人間じゃ無いし、人を寄せ付ける魅力などない。そう思っていたから、ミサに一度問いかけた。

「なんで、友人多いのに、あたしと一緒にいる時間が一番多いの？あたしといて楽しい？」

そうしたら、

「何だろうね？葵ちゃんという時が一番私らしく居られるの。だって、安心するんだよ？葵ちゃんにはそう言う空気が有るみたい」と本を読みながら、あたしの背にもたれて、クスクス笑った。

「そう……なんだ？」

あたしは、自分の事を客観的に見てみるなど無かった。それに、結構突き放してると思うんだけど？それなのに、安心できる？お泊りの夜、あたしは、何気ないこの言葉にちよっとくすぐったい気分になった。

そして、一年はあたし達の仲を深め、過ぎ去り、ついにあたし達は中学生になった。

中学校も一緒に、クラスまで一緒だった。

「ほらね？何か赤い糸で結ばれてるんだと思うよ！」

そう言っ、ミサはクスクスと笑い、あたしの手を引き、クラスに入った。温かいミサの手はあたしの心を穏やかにしてくれた。

一年B組。このクラスは色んな個性の豊かなクラスメイト達で賑わった。

「海野さんと、美空さんって仲良いのね！いつも一緒！」

女子達はそう言っ、あたし達の仲を温かく見守ってくれた。

周りから見ても、そう見えるらしい。

二人揃って小柄。あたしは色黒だけど、ミサは色白。そう言う二人が揃って話をしていると、仲のよい姉妹のように見えるらしい。

何をするにも、一緒。班を作っても一緒。

運命は、まるであたし達を温かく見守ってくれているようだった。

それまでは……

しかし、運命の歯車が狂う日が来た。

ミサが何も話さなくなったのである。

あの元気でコロコロとよく笑うミサが笑わなくなった。

「どうしたの？ミサ？」

あたしは勿論心配して問いかけた。こんなミサを初めて見たからだ。

「葵ちゃん？私ね……もう駄目かも知れない。私がいなくなったら、困るよね？」

ミサはそう言っただけで無理に笑った。そう見えた。

「何言ってるの！居なくなるなんて……引越してもするの？そんな事ないでしょ？あたし嫌だよ。そんなの！」

「だよ……うん。葵ちゃんのためにも頑張るよ！」

はにかんでそう笑ったミサは、次の日学校に来なかった。

その日だった。あたしがミサの悲報を知ったのは。

お父さんの事業失敗で、家族で自殺。一家心中だったと、そう先生から話を聞いた。

あたしは、身が凍った。

ミサがもうこの世に居ない？

何故？昨日まで一緒に居たのに！

最期に聞いたミサの言葉は『頑張る』だった。それなのに……
あたし周りが闇に包まれた。そんな気がした。

あたしは、涙を流せなかった。周りの皆が涙を流していたのにもかかわらず……

だって、信じられないから。今までの記憶は何処に仕舞い込めば良いの？あたしじゃ、駄目だったの？あたしの力が足りなかったの？あたし、何もミサに自分の気持ちを伝え切れてない！

想いが空回りするばかりだった。

「クラス代表として、美空さん。あなたが代表で、葬儀に行って頂けるかしら？」

今まで話して聴かせていた教師の言葉が頭に入って無かったあたしは、

「え？」

と、疑問符を投げかけた。何を言ってるの？あたしが葬儀の代表？葬儀って何？あたしが何をするって？

疑問符ばかりが頭を回る。整理が何もつかない。誰が死んだというの？

皆があたしを見た。それが一番だとも言うかのように。無数の瞳がこちらに向けられた。

あたしは、何も考えられなくなり、ついにその場に倒れてしまった。

「人はね、余りに愛しすぎる人を失うと、生きる目的を失って、大変な事になるのよね。その後あたしは、ミサの死に顔を見ること無かったの。代表として行く事ができなかった。あたし……何も喋る事ができない失語症にかかって、一年を棒に振ったの」

そう。余りのショックで、言葉を無くしてしまった。そして一年間私立の学校だったため、単位を取れず留年したのである。

だから本当だったら、中学三年生のはずなのだ。

「でもね、やっとこの旅行で、ミサの事を走馬灯のように思い出して、そして、やっと泣く事が出来たの。そうしたら、何故だか忘れる必要は無いんだと判った。いえ、逆に忘れてはならない事だった

の。あたしはこのことを忘れようとして、逆に自分を縛ってたんだと思う。そして、心の何処かで人を好きでいられたら良いのと思うことが出来るようになった……それってどう思う？」

あたしは、ミサの事を延光と隆について話してしまった。

「葵っちの傷は、とても大好きだった人を失った事の悲しみやつたんやね。オレは、その……その、この旅を通じて、大切だった思い出を、忘れちゃいけないと思ったんやつたら、それは、葵っちが出した大切な答えやと思う。もうこの世に居ない人を思い出すことを、女々しいと思う必要は無いわ。だって、人間は誰しも弱い所があるもんやもん。このオレやつて、強くない。それを隠すために、笑って生きようと思ってるだけや。そして、いろんな人と会話して、そして、好きになって……出逢いがあれば、勿論別れだってある。旅はその典型的なものや。好きになる人間が出てきて、それを大事にする事は大切や！って思うよ。」

延光は、下を向いてそう言った。もしかして泣いてる？声が、何だか震えてるような気がした。

「ボクも、延光と同じ。人間って、絶対一人では生きて行けないんだよ。家族と言う繋がり、立ち消える事は無いけれど、その他の友人との別れは必然。一生一緒なんて事は無い。ボクの場合は血の繋がりのない家族だけど、それでも、家族だ。葵ちゃんは、とっても大切な友人を一時でも得られた。失った理由は凄く残念だと思うよ。ボクにはその気持ちを理解しろといわれても無理だけど。だけど、忘れちゃいけないよ？心にある思い出は、写真のように形に残るものではないけれど、凄く繊細に心に残る物だと思ってる。そう、きつと、そのミサちゃんという女の子も、天国で願ってくれてるはず。自分の分まで人との係わりを絶たないでねってね」

隆君の言うとおりだよな？

あたしの失語症が治って、こんな風に旅をして、得ている価値と言う物を色々心に焼き付けられている。こういうあたしを、恨んだ

りはしてないはず。もし恨んでるとしたら、顔を墓前に出してない事だ。

「うん。話してスッキリしたよ。東京に帰ったら、真っ先に、ミサちゃんの墓前に行こうと思う！嬉しい言葉を、ありがとう」

あたしは、やっと、肩の荷が下りたような気がする。

もう、泣きたい時は、自由に泣いても良いんだとそう悟った。

そんな昔話をしている頃に、内子町と言う標識が見えた。

「さて、内子だよ！まだまだ先は長い、何か面白い話でもしようか？延光君、何かネタない？」

なんて湿った会話はここで中断。

もうあたしは迷わない。ミサのためにも。

あたしはこうやって生きているのだから！

その後は、白い佇まいの家々のある道を見ながら、しりとり合戦、や、トランプをして、道中を楽しんだのである。

#18 延光の傷・告白

内子から、大洲、そして、野村町、広見町と、標識は変わっていく。景色は、ちよつとした下町になったり、山だったり。特に大きな町と言う感覚は無かったが、それぞれが、独自の町づくりをしていて見ごたえがあった。

勿論会話は弾む。他愛ない事を色々話した。

延光は、あの穏やかで頼りがいのあるおばさんの、ちよつとした失敗のお話を堂々と公表したり、隆は、いつも遊んであげている、優香ちゃんや浩二君、凜君、鈴音ちゃん、涼君の可愛い話をしてくれた。

あたしの知っている人達ばかりのお話。

きつと、気を遣ってくれてるんだとばかり思っていた。だって、知らない人の話をして、あたしにはチンプンカンプンなものだから、それも悪いなあゝなんて思ってた。

「ねえ、延光君や、隆君の学校生活の方はどうなの？」

と、今度は、個人的にどういう学校生活を送っているのかを訊いてみた。

だけど、返って来た言葉は、

「別に、大したことあらへんよ。ごく普通の学校生活や」

良い返事が返ってこなかった。

その言葉に、

「友達とかの話しないよね？何で？仲の良い子とか居るんでしょ？あたしは話してくれても大丈夫だよ？」

気を配ったつもりだった。しかしそれは間違いだった。

「葵ちゃん。ボク達はね、学校にとって、というか、級友にとって招かざる者にあたるんだ。只でさえ、こういう身の上だからね」

隆は、なるべく笑顔でそう言ってみたかった。と感じるのは、あたしがそれを聴いた瞬間、世間の冷たさを感じたからだった。

「……」

何も言葉が紡げない。あたしは、気を遣ったつもりだったのに、延光や、隆にとっては要らない世話だったに違いない。

彼等は、あたしに気を遣ったんじゃなく、話せる事はそれしかなかったのだ。

「ごめん……」

あたしは、涙が溢れてきた。

そう言うしかなかった。

「別に、葵っちが悪いわけやないんやで！泣かんでや！」

あたしは、ボロボロ溢れてくる涙を止められなかった。ミサの事を思い出してから、あたしの涙腺はかなり緩くなっている。ゴシゴシむき出しの腕で顔を擦る。でも、止まらない。

「あゝあ、のぶちゃん、女の子泣かせたゝ！」

柄に無く、隆がそんな風に延光を煽った。

「ちゃうわ！お前が言ったから泣いたんやろゝ人のせいにはかりするなや！」

なんて、二人がおちゃらけてそんな事を言い合い始めた。それが、可笑しくて、あたしは、笑いたくて、でも涙が止まらなくて、泣き笑いを始めてしまった。

「何や葵っち！気が狂ったんか？」

慌てて延光は、あたしの肩に手を伸ばしてきた。

「だって……ヒック、泣きたいのに、あんた達が笑わせてるんですよ！」

その言葉を聞いた瞬間、延光が、

「ふん！どっちかにせえ！この男女！」

怒って言ったのか？それとも、冗談なのか？あたしはもうどっちでも良いやと思い、

「男女で悪かったわね！それを言うなら、隆君なんて、女男じゃない！」

隆に話を振った。

「ちよつと待てよ！誰が女男だよ！」

とぼつちりを受けた、隆は、堪ったものじゃ無い！って、あたしに突っかかってきた。

それから、三人三様、喧嘩腰のふざけ合いが始まった。

それは、太陽が西の地平線に傾くちよつと前の高知県の県境辺りの出来事であつた。

高知県に入ってから、ふざけあつてたあたし達の会話は、少し静かになっていく。

夕暮れ間近なのに、まだ先があるみたいだつた。

「どうする？このままお寺に向かったので大丈夫？」

そつ、今夜の寢床の事が気になってきた。

「そつやなゝま、何とかなるっしょ？」

つて、延光はそう言つた。

また、お寺にテント張つて寝る気にいるのかしら？あたしは、ちよつと嫌だなあゝつて表情を見せた。

「あ、テント張らんでも何とかなるんや。心配せんでええよ？」

あたしの表情は、どうやらかなり露骨だつたらしい。

「あ、そうですか……」

見抜かれて、ちよつとしまつたと思つたけど、一体どうするんだろつ？絶対、陽は落ちてるはずだよ？なんて思う。一体この先何が待ち受けているのдарろつ？

延光と延光寺。

一体どういふ繋がりがあるのでしょうか？

それは行つて見ないとあたしには判らない。でも、さつきからソワソワしている延光を見ている隆の表情が気になる。

どう見ても、心配事がありますよ。つて言つ表情だ。

皆それぞれ思うところがある為か、何故か無口になつた。そして、あたしは、四百四号線のこの道沿いを流れる四万十川に目を向けた。説明としては、全長百九十六キロ、流域面積二千二百七十平方キ

ロメートル。四国第二の川で、本流に大規模なダムが建設されていないことから『日本最後の清流』、あるいは柿田川・長良川とともに『日本三大清流の一つ』と呼ばれるとある。

清流と言うだけ有って、水はとても綺麗なのかな？などと思っていたら、何と、飲めたものじゃ無いらしい……。それで清流って一体？なんて思ったけど、綺麗だから清流と言う訳ではないそうだ。ま、そんな物か？

でも、キャンプ場も有るらしくって、あたしはちょっと安心した。もしかして、延光はこれの事を知っていてそう言ったのかも知れないと思ったからだった。

夏の昼は長い。でも、時間が経つにつれて、もう、東の空は群青色に包まれていた。

標識に、四万十市（旧中村市）と書かれているのが目に入った時には、空はスッポリと群青色に包まれていた。

「おい、君達！自転車直してからお寺の方に行くに？」

途中の信号で、今迄運転していたお兄さんが、あたし達に問いかけるために一度車を止めて、あたし達に問いかけてきた。

「そうですね。これ以上遅くなったら、自転車屋さんも開いてない事でしょうから」

隆がキツパリ言った。あたしが女男なんて言ったものだから、汚名挽回のように男らしく。

「そうしたら、市内で探すと良いき。ちよつと、オレ、思ったより時間食ってしまっちょうけ、このまま足摺岬に行こうと思ってるんやけど、大丈夫き？」

独特の訛りのある言葉だけど、言ってる事は通じた。

「ほな、市内で探します。今までありがとうございました！」

延光は、素直に受け入れた。

「今までありがとうございました！」

「元気にな」

あたし達は、四万十市の中村で下車した。

そこから、自転車屋を探す。二〇分位後、無事見つけられた。時間は八時になるかならないかだった。そして、その自転車屋さんは、ガラガラとシャッターを下ろそうとしている最中であつた。

「すみません！お願いや！自転車のパンク直してや〜！」

延光が駆け寄つて事情を話した。

「それは凄いな。良いきに、直ぐ見てやろう？」

と言う事で、あたしの自転車のパンクは直つた。

「これからどうするき？」

自転車屋さんは、そう言つて心配していた。

「ええ、これから延光寺を訪れるつもりです。」

「そつけ。気をつけてお行きい〜」

修理代を払つたあたしは、お礼を言つて、延光達と共に、目的地、延光寺へと足を運んだ。

到着したのは、もう十時ぐらいだった。

「ねえ、どうするの？もう、お寺を見て回る時間無いよ？」

着いた瞬間、あたしは明日参拝するようにしようよ。と言つつもりで言つた。

「ええんや。ここでちよつと待つとつてんか？」

あたしは、お寺の中に入っていく延光を隆と一緒に見守つた。まるで勝手を知っているかのような行動の仕方だった。

十分後、延光は、あたし達の目の前に現れて、こつちや！と言ひ、お寺の中に導いた。

そして、お寺の中から少し離れた所の民家に入りその玄関を開いた。

「紹介するわ。オレの母さんや」

色白で、まだ若い感じだった。三十歳前後の女性に見受けられた。

「ようこそ。延光寺へ。息子の延光がお世話になりました」

見かけと違つた少しハスキーな声だった。

「え？はい。初めまして……」

あたしは、度肝を抜かれた。延光のお母さん？でも、延光は天涯

孤独なのではなかったの？疑問符が目の前にクルクル回った。

「と言う事で、ここに泊まらせてもらおうや？母さん、夕飯とお風呂あるんか？」

「ごく普通の親子のやり取りだった。

「まだ、ありますきに。ゆっくりしてき」

「そう言つと、奥の間に通してくれた。

古い檀家？なのかな？これは……」

床はギシギシ軋むし、昔ながらの裸電球が吊るされていた。その周りを虫が飛んでいる。それが凄く印象的だった。

「先風呂入るんか？それとも飯にするか？」

奥の間の二十畳近くある畳の部屋。そこに入った途端、延光は問いかけた。

「あ、うん……ご飯にしたいかな？」

まだ、自分の中で整理できない疑問。それが有ったから、あたしはまごついた言葉しか返せなかった。

「お母さん元気そうで良かったね？のぶちゃん？」

隆は、ホツとしたとも言つような表情でそう言つた。

「おかげさんで、ようなつてゐるみたいや」

二人の会話にあたしは着いていけない。

問いかけても良いのかどうなのか憚^{はば}れる。

『ねえ？どう言つ事なのかな？』

と、問いかけたい。でも、それが出来ないでいる。

「んじゃ、ご飯や！行こうや！」

あたし達は、居間に通され、そして、精進料理のようなご飯を食べた。

「どうです？美味しいですか？」

「はい。お腹空いてたから、とても美味しいです」

あたしは、正座して問いかけられた言葉に応えた。味付けの薄い料理。美味しくないわけではないのだけど、まだ、この状況が判ら

なくて、戸惑つてご飯を食べてる気がしなかった。

「隆君でしたね？いつもお世話になってます。延光がお世話になってるのでしょうか？」

「はい。そうですね。楽しく、いつも良い兄弟でいられますよ」

「まあそれは良かったきい。安心したわ」

お母さんと言う人は、隆の事も知っているみたいだ。

「こちらの女の子は？」

「うん。夏休みの間のオレの家族。お姉さんや」

バクバクご飯を食べている延光は口元を拭いそう言った。

「夏休みの？そう。また可愛いお姉さんのね？」

微笑ましいとでも言った様子で笑いかけてきた。

「そんな、可愛いだなんて事ないですよ？」

ちよつと恥ずかしくなつてあたしは頬が紅潮した。

「飯も食べたし、母さん？オレら、自分とこの部屋に戻るわ。あ、

風呂は葵っちから入りい？」

と言う事で、食べ終わつた瞬間、部屋に戻る事となる。あたしは、それに従うだけだった。

「お風呂入りに行くね？」

部屋で、準備をし、そして、部屋を出た。

「行つてらっしゃーい」

あたしは先に風呂に向かう。廊下を右に曲がつた所に有つた。中は、木造の古びたお風呂だった。

あたしは、まだ理解できない。何？このモヤモヤした気持ちは？

風呂に浸かつて、全く癒されない気分だ。

訳が判らない。だって、お母さんと呼べる人が居るのに、何故、岡山の養護施設にいるのか？離れて暮らさなければならぬ何か？がそうさせているのか？そこまで考えても、答えが導かれない。

仕方なく、あたしはすんなりと風呂を出た。

そして、着替え終わり、あの部屋へと戻つた。

「お帰り〜んじゃ、次は隆が入れや？」

「うん。判った」

あたしが風呂に入ってるうちにお風呂の用意をきっちりしていた隆は、直ぐ様この部屋を後にした。

あたしは、疑問渦巻く頭をどうにかしたくて、延光をちらりと見た。すると、延光も話す事があるから！といった表情であたしを見ていたのである。

「ビックリしたやろ？」

「あ、うん……」

肯定した所で、疑問を投げかけても良いのかと思い、言葉を編もうとしたが、先に延光が話し始めた。

「オレはな、大阪生で産まれて育ったんよ」

「うん」

「でもな、オレの母さん病持ちで、オレとは一緒に住めなかったんだよ。で、親父と暮らしてたんや」

延光は思い出すようにちよつと右上方向に目を向けた。

「うん」

「だけど、オレの父は、五歳の時に病気で亡くなってしまった。それで、離れて住んでた母さんと一緒に住もう。という話になってな、一緒に住んだんや。この家で……」

なるほど、それでこのお寺の中を知っていたのかと理解はした。

でも、どうして、また離れて住むことになったんだろ？それが判らない。

「母さんな、この寺の一人娘でな。寺の切り盛りをしながらオレを育てるのに無茶してしまったんや。で、その頃から病院通いが始まって、入院退院を繰り返したんよ。だから、オレは看病しなくちゃならなかった」

「お祖父さんやお祖母さんは？」

「おらん。とつくに亡くなつてた。高齢出産の一人娘やってん」

「……うん」

「でも、オレ当時小学一年生やったから、世話をしながら学校通いなんて出来なかった。それで、親戚の方と話し合いして、母さんの事を任せた訳やねん」

「うん」

「父さんと母さんは高知で知り合って駆け落ち状態で直ぐに結婚だったらしいわ。当時は凄くもめたらしい。うちの親類って、父方は元々居なかったし、母方は、子供の面倒まで見れるほど裕福ではなかったわけ。んで、オレは、岡山のあの施設に自ら志願して入ったという訳や」

「うん」

あたしは相槌を打つことしか出来なかった。

「オレの母さん若いやろ？実は十六の時にオレを産んでな。元々体が弱かったのに無理したん。それも双子をお腹に抱えてて。初産で、年が若いために、双子の一人を流してしまったんや」

水子地蔵の時の言った言葉が蘇った。

『可哀相にな。生まれて来ること適わんかったんやろ？それを考えると、オレらは幸せなんよな……？』

だったかな？

あの時の言葉をきちんと理解した。

「うん」

「多分、母さんは無事産みたまつたんやと思う。でも適わんかった。その心労もあつたんやと思う、疲れ果てたん。精神的に不安定やつたんやろな？」

延光はそしてこの時笑った。

「……オレ、母さんに、酷い事言われてな。一瞬ショックを受けたん。実の子供にそれを言うんか？ってね……」

「何を言われたの？」

気になった。何を言われたのか？

「どうせなら、二人とも死んでくれたら良かったのにつ！てな」
あたしはゾツとした。実の母がそう言うことを言うのかと。

「精神やられてたん。オレは、ちゃんと判つてた筈なんやけど、傷つかない訳ないやろ？どんなに尽くしても、精神的に不安定を状態をオレで埋めれんのは、きつかった。もしかしたら、オレ自身ももう限界やったのかも知れん。だから、母さんから離れたって言うのもあるんや。否、逃げ出したのかも知れないなあ」

「……」

頷く事さえ出来ない。

「だから、意地悪のつもりやった。岡山に行つたのは……オレの存在を否定した母さんに思い知らせたかったんや」

そこまで言つて、延光は深い溜息をついた。

「こつこのつのを懺悔。つて言うんやろな？意地悪をしたオレの懺悔。今、母さんは立ち直つて。オレはどうすれば良い？もし、あのままやったらもうどうでも良いと思つとつた。でも、違ふんや。ちゃんとオレと接することが出来る状態になつとる……」

あたしは、神様じゃ無い。懺悔と言われても、何もその道しるべをしてあげられない。

「あたしには判らない。だけど、延光君の思う通りにしたらいいと思うよ？……どうしたいか？何が自分に必要か？それを考えれば良いんじゃないかな……？」

ああ、何言つてるんだろ？こんな二者択一なんてあたしには重すぎる。

「どうしたいか？かあゝそうだよな？どちらが幸せか？じゃなくつてなあ」

延光は考え込むように下を向いた。

「今夜考えてみるわ。ありがとうなゝ聴いてくれて……」

そうして、延光はちよつと苦笑いをした。

「役に立たなくて、ごめん……」

あたしは、それしか言えなかった。

そんな時、隆がお風呂から上つてきた。

「出たよ」

すると、延光はスツと立ち上がり、

「早かったなあゝ気持ち良かったかゝ？」

いつもの延光に戻っていた。

あたしは、今夜下す延光の結論が気になって仕方なかった。

19 延光の決断・隆の涙

「ちゃんと聴けた？」

あたしは、隆に問いかけられた。

「うん。聴いた」

その後、あたしは隆に問いかけた。

「ねえ、隆君は延光君がどうしたら一番良いか？判る？」

隆と会話が出来る。と思うとホツとした。だって、多分隆は知っているだろうから。

「お母さんと一緒に住むのが一番良いと思ってる。だって、血の繋がった親子だしね」

無表情にそう言った。何を考えているのか全く読み取れない。顔だった。

「それで、隆君は良いの？」

「良いも悪いも無いんじゃない？」

「だって寂しくなるよ？延光君居なくなったら！岡山と一緒に居たいでしょ？一緒に居たい筈だよね？」

あたしは、此処に来るまでに何度となく寂しそうな隆の顔を見てきた。こう言う事になると知っていたからだ。そうでしょ？

「寂しいかも知れない。だけど、お母さんを選ばないと、ボク、のぶちゃんを殴るかも知れないなって思う……」

そんな……殴るだなんて……自分に素直になつてよ！

「そんなの変！選ぶのは、延光君だよ？それでも殴るっていうの？」

あたしは、今にも泣き出しそうだった。

「初めから有った物は有る筈だと、それを当然だと思つてでしょ？ボクには何もなかったから、その気持ちは判らない。葵ちゃんだって、ミサちゃんを亡くして、辛かったんでしょ？のぶちゃんはそう言うことをちゃんと判ってる。だから後悔しないように、多分お母さんを選ばなきゃならないって思うんだ」

「そんな……」

「鬼ヶ島の話覚えてる？『鬼は寂しかったんだ』って言ったの。それはのぶちゃん自身を鏡に映して見ていたんだよ。鬼として、お母さんを苛めてしまったと思った。じゃないと、あんな言葉は吐き出せない」

それはそうかも知れない。だけど、隆君の本当の気持ちはどうなの？有った者を無くしちゃうんだよ？それは、隆君にとって初めての経験となるものかも知れないじゃない？そんなの悲しいじゃない！あたしはついに涙が零れた。

「葵ちゃん。ボクは覚悟していたんだ。この日が来るのを。だから、泣かないでくれる？」

そう言って、静かに笑ってから隆は障子の向こうの外の景色を眺めていた。

夜は眠れなかった。

明日どうなるのか気になって仕方が無かった。眠れない夜。窓の外月の光が静かにカーテンの端から差し込んできて、冴え冴えとしている。綺麗なのに、冷たい。夏なのに寒さが体に走りそうだった。

眠れる呪文。そんなものがこの世に有るならば、唱えてしまいたい。そんな事を考えて、

隣で寝ている延光や隆を布団の隙間から見た。

疲れてるせいかな？グッスリ寝ているみたい。

一番関係の無いあたしが眠れないのに、何故あなたたちは寝れるのよ！毒づきたいけど、そんな事は出来なかった。

ああ、もう、知らない！布団を思いつきり被った。だけど結局、一睡も出来ずに朝を迎えてしまった。

朝は、少し靄がかかった感じだった。

というか早朝過ぎたから、霧が有ったのかもしれない。

延光のお母さんが、あたし達を起こしに来てくれた時には、もう、夏らしいガラガラとした太陽が昇っていた。

朝御飯を食べる。眠れなかったあたしのお腹は心とは裏腹にグウグウ鳴っていた。それを延光は聴いて笑っていた。あたしはこの夜にどう決断付けたのか知りたくてウズウズしてるというのに、全く暢気なものだ。

そして、旅立ちの時間が来る。

あたし達に、先にお寺の方に行つててやと言つた延光。あたしは何も言えなくて、相槌だけ打ち、そして、隆と共にお寺を見て回つた。

「ちゃんと眠れた？」

「え？」

あたしは、何でそんな事訊くのよと思つて、ちよつと膨れた。だつて判るでしょ？この顔を見たら！

隈を作つた顔。どう見ても寝てません！つて顔だろうに。

「寝たわよ！」

ちよつとイラつきながら、あたしは逆の事を言つた。

「そう」

隆は、そう言つて意味ありげに笑つた。そして、

「ほら、『第三十九番札所、赤亀山寺山院延光寺』だよ。見て回ろう！」

と、お寺の中を散策し始めた。晴れ晴れとした表情で、一点の曇りも無い笑顔を見せた。

あたしと隆は、夕べ見られなかったこのお寺を見て回る。このお寺は南国情緒ある豊かさを秘めている感じだった。

そして、広い。あたし達はくまなく歩くと、一つの亀の上にお寺の鐘みたいなのが乗っている像？を見つけた。

「これがのぶちゃんが言つてた、竜宮から持ち帰つたと言われている鐘か」

きつと、延光から詳しく話を聴いているのであろう。かなり興味

深く見ていた。

「よっ！ 搜したやん！ 此処まで来てたんか〜！」

そんな時、延光は後方から慌ててこちらに駆け寄ってきた。

「お母さんと、話をちゃんとした？」

「ああ、ちゃんとしたわ。……オレ、やっぱ、ここに帰る事はできへん。岡山の方で暮らすことにしたわ」

そう言っつて、延光は笑った。あたしはホッとした。隆が泣かずに済むと思っただからだ。

しかし、その言葉を聴いた隆は、右こぶしで思いっきり延光の右頬を殴ったのである。

ズザッと、延光は地面に転げてしまった。あたしは驚いて、延光の体を起こそうと駆け寄ったが、隆はその倒れている延光の体に馬乗りになつて、もう一発殴っていた。

「ちよつと、やめてよ！ 隆君！」

あたしは、こんなことになるなんて想像も付かなかった。確かに、隆は昨日、殴るかも知れない。って言った。それを実行するなんて

……

あたしは悲鳴に近い声を張り上げた。こんなの無いよ！ 仲の良い二人なのに！ っつて気持ち先走っていた。そして、その声に気が付いた隆は殴るその手を止めたのである。

「冗談や。冗談。もう気が済んだか？」

延光は、殴られた勢いで口の端を切つて血を流していたが、クスクス笑つて言った。

「嘘や。一度岡山に帰つて、そして、荷物を纏めたら、ここに来る事にしたんや。何発か、隆に殴ってもらつとこう思つて、言っただけや。だから、もう気が済んだやろ？」

何？ と言う事？

隆に殴らせるつもりで、あんな事を言っただけ？ そんなこと何故しなくちゃならないのよ！

所詮、女のあたしには判らなかつた。

「バカ！のぶちゃんなんか……嫌いだ！」

そう言つて、隆はボロボロ泣き始めてしまった。

もしかして、隆は、本当は……

本当は、延光との別れを切り出されるのが怖くて、そして、自分の本当の気持ちをぶつける所を見つけれなくて、ただ笑つてさようならを言つつもりで……いたのかも知れない？泣く所なんか見せなくなかつたんだろう。

それを、延光があんな事を言つたものだから、訳が判らなくて、そして、手が出てしまった。

男の子の友情なんて判らないあたしに想像出来る所というのはそこまでだつた。

でも、殴られたかつた。と言つた、延光の心境は？

「隆つて、本当に心と裏腹なんやもん。困るわ……おゝ痛てて。マジ殴りよつてからに……この貸し。忘れんなや？」

そう言つて、延光は隆を抱きしめた。

あたしは、何故か判らないけど、頬に涙が伝つた。ああ、こういうのも悪くない、さようならなのかも知れないと……

「さてと、今日は、一気に自転車で走るでゝ覚悟しときいや！」

お寺を出て、自転車に跨つたあたし達は、その延光の言葉を聴き、「え？」

と言つた。

「オレ、小学校の時から行きたかつたんやゝ室戸岬！知り合いに、高知の室戸岬にある少年自然の家つて所で星を見たつちゅう奴がいてな。それが凄く綺麗やつたつて言ふんや！それ聴いて、めっちゃ行きたかつてんよゝやから、今日はそこでキャンプや！お寺参り無しの変わりに、それで決定！」

ああ、頑固一徹。無邪気に自分をアピールしてるしさゝでも、あたしもそんなに言ふ星空を見てみたい気がする。東京の星は、地上

にあるだけで、もう夜空では殆ど見られてない。それに、延光のプラネタリウムを見てから、星に興味が湧いた気がする。だから、

「しょうがないな、付き合いましょ！」

「はいはい。のぶちゃんらしいよ」

あたしと、さっきまで泣き崩れてた隆は笑ってそう言った。

室戸岬まで、八十キロ近くある。

地図で見ると、凄いい、距離。高知の西と東って感じ？端から端まで走ると言う感じである。

まず、昼は、高知市内で食事を予定。その後夕食は、買いだめ弁当をコンビニでゲット。そう言う感じでスケジュールは組まれた。

早速自転車に跨ると、走り始めた。

昨夜、徹夜した体とは思えないほど軽く感じた。

四万十町を抜けて、世界一広い海。太平洋側の海岸線を走る。あたしは、この海岸線を走れることが凄く嬉しかった。

ミサとの出会いの時の会話で、こんな事を思い出したからだった。「葵ちゃんって、苗字が確か美空だったね？あたしは海野って言うの。海と空だなんてステキだね！」

うーん。どうだろう？なんて思った。別に、ステキだなんて思わないけどな？

あたしはその頃、かなり冷めてたから、その事に興味を示さなかった。でも、今なら言った意味が判る。

海と空は向かい合っててずつと平行線を辿ってて、交わる事のない物。だけど、どう？水平線上で、綺麗に交わる。一直線に。

遠い水平線上。きっとそこは、相対してるのかもしれないけれど、またそこから水平線上を見ると、重なり合う。その繰り返し。

海の碧さ。空の蒼さ。どちらも同じだけど、微妙な違いがある。だけど、この遙か先の光景はともキラキラ輝いてて綺麗。

ミサって、そんな風景まで想像していたのかも知れないな？可愛くて、そしてロマンチスト。女の子らしいそして、感性豊かな女の

子だったんだな。と改めてそう感じた。

今、凄く気分が良い。

この太平洋を見られて、感じられて、まるでミサを身近に感じる。この旅に一緒に来れて良かった。ありがとう。延光、そして隆。

あたしは、前を走っている二人を見て、笑顔で自転車を漕ぐ。まだまだ続く旅。あたしは何を感じるだろう？それを考えるとワクワクした気持ちは留まらない。

天気は、西から少しずつ変わりつつあったそんな事を知らずにあたしはそんな事を思っていた。

高知市内に着く前に、久方ぶりのにわか雨。

後少しで着くというところで、あたし達は、雨の中、走り続けた。汗をかいてるものだから、ちょっとぐらい濡れても平気だと思い、先を急ぐ。

そして、ついに高知市内に辿り着いた。

「ふえゝ雨なんてついてないなあゝ」

なんて話しながら、お手軽なレストランに入った。

びしょ濡れなので、服を乾かす事も出来ず、暫く店のクーラーの効いている所で乾くまで待った。

「は、は、ハックシュン！」

クーラーが効き過ぎて、肌寒い。そんな気がした。

「葵っち、平気か？タオル足りんようやったら言えや？」

あたしがクシャミをしたものだから、心配して延光がバッグからタオルを取り出した。

「グズつ。平気。それより雨。何時、止むんだろうね？」

足止めを喰らって、ちよつと気分が萎えた。

「多分通り雨だから、直ぐ止むんじゃないかな？」

「止んでくれんと！星を楽しみにしてるのにいゝ」

あたし達は、大分乾いてきた服を見て、大丈夫と思った頃に、席

に座った。

「雨、止んだら直ぐに出発や！それまでにお腹の足しになるもん食つとこな？」

延光の言葉に頷いて、三十分ほどそこに滞在した。

そして、また、走り出す。

本当に、通り雨だったみたいだ。

あたしは、ホツとして自転車を漕ぐ。でも、ちょっと、体がだるいかな？あんなに軽快な走りをしたのに、体がちょっと重い。それに喉がイガイガとしてる感じ？なんて思いながら走った。

でも気にしてるから、そう思うだけであって、あたしの思考はスツキリしている。

だから、気にせず走る。前に行く二人に負けないように……

室戸岬に辿り着いたのは、夕日が沈む頃だった。

わずかに太陽が、地平線に隠れる頃だった。

あの太陽が、地平線に沈むのを見るのは、現実では初めて見た。^{リアル}

凄い！闇のような海にオレンジとも朱色とも言つような大きな太陽が静かに沈む。

あたし達は、室戸岬の海岸でそれを目にして、言葉を失った。余りにも綺麗。

じわじわと沈んでいく太陽。まるで、スローモーションの映像を見ているかのよう。

それを心の中に止める。そして、時間はゆっくりと過ぎ去り、あたし達は、今日寝るためのテント作りに勤しんだ。

ちょっと山に入ったところで行動に移した。

テントが出来上がったのは、一時間後くらい。その中で、あたし達は、コンビ二で買っておいたお弁当を食べた。

味気ないお弁当なのに、お腹が減ってるから、とても美味しく感じられた。

延光にいたっては、食べ終わっても、まだ何か無かったか？なん

て言つて、鞆の中をゴソゴソ探し出す始末。お腹が減りすぎているらしい。食べ盛りだものね？あたしはその行動が可笑しくて、クスクス笑った。

旅を始めて一週間くらい経ったのかな？思つたより早く此処まで来れたものだ。

あたしは自分がしているこの旅を振り返る。

色んなことをしたなあゝあつたなあゝ

それらを心の中で反芻し、そして、心のアルバムに仕舞い込む。

記憶と言うアルバム。誰にも見せる事は出来ない、貴重なモノ達。もう時間は、九時近くになっていた。

#20 夜空のカルテット・そしてエピソード

「さて、諸君！天体観測のお時間です」

クラクシヨンの『パフパフ』なんて音が聴こえてきそうな延光の、号令。

あたし達は、延光に連れられて、もう少し山の方に足を向けた。
小高い丘。そこまで来ると、延光は、

「さてご覧あれ！これが、綺麗な夜空なんぜよ！沖縄まで行かなくても見れる光景や！」

なんて言って、あたし達は空を見上げた。

そこには、数えきる事の出来ない星が瞬いていた。

あたしは、こんな星空を見た事がなくて、

「うわっ」

と、言葉が漏れ出した。

凄い。こんなに空には星が有るのか？と思えるほど、何処を見てもキラキラとした星が広がっていた。

「冬の夜の方がもっと凄いやろうけど、夏の星空も、またイカシ
てるよな？」

「うん……」

隆も惚けたように、今にも落ちてきそうな星達を見上げていた。

「ほら此処！一等席やで？」

延光はそう言って、座れる所を確保して、そして、寝ころがった。

その横に、隆も寝ころがった。そして、二人して、夜空を見上げていた。

「葵っちも来いや」気分ええで？」

「うん！」

あたしも、その横に並んで寝ころがった。

見上げと、東京では見れない小さな星までくつきりと見える。周

りに明かりがないためにとてもくつきりと。

「夏の大三角形！見つけたで〜」

と言つて、延光は夜空を指差した。

「え？夏の大三角形？」

あたしは何処かで聴いた事がある単語を口に出した。

「白鳥座とわし座と、こと座のことだよ」

隆が補足してくれて、ああ〜っと思い出した。

「凄いい〜こんなに星が見えると、どれがどれだか判らないや！」
と言つて誤魔化しておいた。

「白鳥座は、デネブつて星が一番大きい。で、わし座は、アルタイル。こと座はベガ！」

延光は、それらを指差して、三角形に点と点を結ぶようにまるで夜空に線を引いてるようだった。

「何処何処？」

「葵っち、無知〜天高い、今の時間は丁度上や！」

そう言つて、あたしの目にも判るように手を使って指した。

「あれが、デネブ。んで、これがアルタイル。で、それがベガ！」
「なるほどね。判った気がするよ」

あたしは、こうやつて教えてもらえてフムフムと頷いた。

「白鳥座つて凄く大きいんだよね〜」

「そうそう！隆は良く判つてるやない！」

そう言つて、延光はケタケタ笑った。

「夏の大三角形は、有名なもの？」

「そうですね。あたしが無知で悪うございましたね。ちょっとだけムツとした。」

暫く眺めていると、

「オレ等みたいやな？」

「どうして？」

あたしは何に對してそう言ったのか判らないので、延光に寝っころがつたまま問いかけた。

「三つの点。それが人。で、今は夏。さしずめ、こと座は女の子の葵っちで、白鳥座は優雅な隆。んでもって、一風変わったわし座はオレ」

なんのこっちゃ？あたしは頭を捻りそうになった。

「離れた所でも、これらは星座として自分達と言う形をとってな、いつまでも空にあるんや。それらは過去の遺物かも知れへん。でも、共鳴してる。ずっと、この宇宙そらにある」

あ、なるほど。離れても、自分達はずっとこの地球に居ると言いたいわけね？延光ってば、遠まわしにロマンティックな事を言っくとあたしはクスリと笑った。

「あ、気が付いたんだけど、確か……こと座のベガは七夕の織姫で、わし座のアルタイルは牛飼いだったんじゃない？で、白鳥座はその天の川の架け橋となる星座でカササギの橋……だったよね？ふふん。のぶちゃんは、知っててそんな事言ったのかなあ？」

「え？」

隆は意味ありげな事を言った。

「何でこんな奴と！」

あたしと延光は、一緒に否定した。あたしの頬はちょっと高潮してたかも知れない。

「あつやしいって、ま、ボクは客観的に応援してるよ」

なんて言っただけだから、延光は、隆の頬をつねった。

「痛いー！」

「この口が言うからや！」

全くロマンチストも、子供じみてるとちょっとかつこ悪いかも。

「さて、こと座のベガさん？何か歌っていただけかい？」

隆は、まだ延光とじゃれあっているが、話をあたしに振った。

「音痴だから嫌！」

「んじゃ、オレ達も歌うわ」

「え？マジですか？」

「マジマジ！」

「うんうん」

なんて事で、三人で、合唱。まるで、延光の言葉を借りれば、夜空のカルテットって所だ。

「遠く山々に陽がおちて……」

キャンプ場なんかで歌われる歌を歌って、あと少しの旅を盛り上げる。そう、今夜はお祭。思いっきり騒ごう！

この時を忘れないために……

「ヒック・シユン」

夜のパーティーは盛り上がった。

でも、あたしの体はちよつと異変が出始めていた。

「大丈夫なの？ 葵ちゃん？」

テントに戻る時、隆が心配してあたしに問いかけた。

「らいじょうぶ。ちよつと鼻風邪みたい……寝たら治るよ。きっと

……」

テントに戻ったあたし達は、直ぐ様寝る準備をした。勿論歯磨きもしたからね。

「おやすみ」

消灯して、眠る。

そして、あたしは、徹夜の疲れも有りグッスリ休んだ。

次の朝、大変な事になるとも知らないで。

「葵っちゝまだ寝とるんかい？ おきいや」

耳元で延光の声が聴こえた。でもあたしは覚醒できない。喉が痛くて、ガンガンと頭に響く。何これ？ 気持ちが悪いよ

「なんやこれ！ 熱が凄い！ どうしよう？ 隆！」

耳元で、雑音混じりに延光の声が響く。

そしてバタバタとした足音が、耳に響く。

その後のあたしの記憶は無かった。

目を醒ましたあたしの目に映ったのは、お父さんとお母さんだった。

「葵！大丈夫？」

お母さんが、あたしの顔に手を寄せた。

「あれ、ここは？」

あたしは見た事のある天井を見上げた。

「そうだ、あたし旅をして……？」

記憶がぶっ飛んでる。変だな？何でここにお父さんとお母さんが居るんだろう？

「良かったわ。葵ちゃん三日も眠り続けてたのですもの……ここは、須藤さんのお宅よ？葵、あなた旅で無茶して肺炎起こしかけてたのよ！」

お母さんが血相を変えて喚いている。

「延光君達が、須藤さんのお母さんに連絡を取って、家に連絡してくれたの。全く人騒がせな子……」

あ、そうなんだ！あたしの頭はまだちょっと覚醒しきれてなかった。

「ちゃんと、お礼を言うのよ？病院まで運んでくださって、大変だったみたいだわ」

とお母さんは涙目でそう言った。

「ん」と……延光君と、隆君は？」

「今、下にいる。ちゃんと反省をする事！」

お父さんは、怒りたい所を我慢しえるみたいだった。

「呼んで来てくれるかな？あたし、二人の旅の邪魔しちゃったんだよね？ちゃんと謝るよ」

あたしが此処に居て、信光や隆もいると言う事は、旅はその時点で終わったと言う事かも知れない……ああ、楽しみにしてたのに、ぶち壊しちゃった！はあ。

父とは母は、一階に一緒に行った。

その後、一分くらいで二人が部屋に入ってきた。

「あ、元気になったんか？」

延光は、心配そうな顔で笑った。

「あの後どうしたの？旅続けられなくてごめんね？」

「のぶちゃん、タクシー呼んで、病院運んだんだ。それから、熱が引いたから、葵ちゃんおんぶして、汽車で高松まで出て、岡山の此処まで運んだんだよ」

あ、凄い迷惑掛けちゃったんだ……

「ごめんなさい。延光君……」

あたしは、恥ずかしくなって布団を少しずりあげた。

「謝らんでええよ。葵っちくらい軽いもんや。保険証無かったから、実費だったけど、何とかなったわ。マジ心配したで？オレ等がもつと気を遣えば良かったんやし……」

延光は、自分を責めている感じで苦笑いをした。それを見てあたしは自分を恥じた。

「そんな……体調悪いのに気がつかなかったあたしも悪いのよ。謝らないで！……それより、自転車は？」

そう、旅で使った自転車はどうしたんだろう？

「運送屋さんに運んでもらったわ。その辺りは隆がしてくれたんよ。運送屋って手もあったんやな？」

そうか、旅はあそこで終わっちゃったんだ。

「そっか……」

すると、隆が、

「お母さん達もいらしてるんだし、もう少しお話したら？帰っても話せるだろうけど……今話しておく事ってあると思うよ？」

ここは、自分達より、家族で話をしたら？と隆は持ちかけた。

「うん。そうする……ありがとうね。色々……」

「良いって事よ！んじゃ、今日のところはこれで！」

延光達はそのまま去った。

そして、お父さんと、お母さんは再びこの部屋に戻ってきた。

「話は終わったの？」

お母さんは問いかけてきた。

「うん。話した。そして、謝ったよ？」

あたしはこの気持ちをどう説明すれば良いのか迷った。が、謝る事にした。

「家出なんて勝手な事してごめんなさい！」

それに関しては、お父さんが、

「全くだ！この親不孝者が！」

と言つて、怒っていた。でも、

「自分で納得行く旅が出来たかい？」

今度は優しくそう問いかけてきた。

「うん。良い旅が出来たよ。自分自身を知るには丁度良かった。色んなことが有った。それが、今後どう自分に結びつくか判らないけど、今までの事を振り返れたし、身に着いた事もある。本当に良い旅が出来たと思う」

あたしは珍しくお父さんと向き合つて話してる気がした。

「それは良い事だ。その年で見たり聴いたりすると、一生の価値だ。お父さんは、今後その成果をどう藝が生かすか？それを見たいと思う。とにかく、休みなさい。此処に帰りの運賃と、お世話になった分のお金を置いておく。使いなさい！」

お父さんはそう言つて、緩やかに微笑んだ。

「あ、お父さん？須藤さんへのお金は、あたしがちゃんと返すから良いよ？これはあたしの事だから。だから、運賃だけにしてくれるかな？」

そう、旅行で使ったお金は、自分で返したい。

「そうか。わかった。好きなようにしなさい。体が完治したら、帰つて来るんだぞ？」

「はい」

お父さんは、世間体を気にするかと思つたのに、あたしの意志を汲んでくれた。

「ありがとう。お父さん……」

あたしは、お父さんに微笑んだ。

「あのねお母さん。心配掛けてごめんなさい。あたしがミサチャンの事で失語症に掛かった時、お母さんの言葉で色々立ち直る事が出来たって事も話してなかった気がする」

そう言つて、あたしは過去の話を持ち出した。

「喋れなくて、家に閉じこもってた時、お母さんの顔を見る事が出来なかったんだよ。でもね、夜にお母さんいつも泣いてた。それを見て、早く立ち直らなきゃって思ったの。」

そうしないと、お母さんが駄目になっちゃうと思ったんだよ。そうしたら、少しずつ回復して行つてね？そして、話に耳が傾くようになって話が出来た。ありがとう」

そう言つた瞬間に母の目から涙がこぼれた。

「もう良いのよ？今、元気に話せるようになってる葵ちゃんを見ていられるんですもの。お母さんは、それだけで十分よ……」

今が大切。って言いたいのだと判つた。

「さて、そろそろお暇する。一人で今度は帰れるな？」

「うん。もう一人で何でもやれるようにならなきゃいけない年だからね？あ、帰ったらね、お母さん。料理の仕方を教えてもらえる？」

「ええ、良いわよ。早く良くなりなさいね！」

そう言つと、お父さんとお母さんは須藤家を後にした。

あたしが、病氣から完治して、この家を出るのは三日後だった。

「葵ちゃん。おうちに帰つても、元気で居るのよ？もし、こちらに来ることが有つたら、是非足を向けてくださいね？皆、待っているからね？」

おばさんは、旅行から帰つてきて、帰省するあたしに玄関口でそう言つた。

「はい！それから、旅行の代金も必ずお返しします！」

「葵おねえちゃん、きつとだよ？」

優香ちゃん達もそう言つて笑つて見送つてくれた。

「延光と隆は、一緒に岡山駅行かつて言つていたから、外で待つて
いるわ。道案内してもらいなさいね？」

最後の最後まで、色々ご迷惑掛けちゃつてゐる。あたしは苦笑いす
るしかなかった。が、

「ようゝ早くせんと、列車出ちまうで？」

玄関から出たところで、延光は自転車に跨つてそう言つた。

「のぶちゃんの後ろに乗つたら良いよゝ」

二人乗りはいけません！

なんて思つたけど、最後くらい羽目を外すか？

「宜しくゝ」

あたし達は、一気に岡山駅へと向かつた。

「元気でなゝオレも、三日後には高知に戻る事になつてゐるん。でも、
また逢えると思うわ！楽しい時間ありがとうなゝ」

プラットホームにＪＲ西日本のアナウンスが聴こえて、あたしは
新幹線に乗り込んだ。

「ボクは、岡山にずっと居るから！手紙でも書いてね？のぶちゃん
も、住所ちゃんと渡しなさい！持つて来てるんでしょ？」

つつ突かれて、延光は日焼けした顔を染めて白い紙を手渡してく
れた。

「うん。手紙書く！じゃあ、元気でね！」

あたしは、閉まるドアの向こうで、手を振り続けた。また逢う事
を誓つて。

旅もこれで終わり。此処岡山に辿り着いた事は、ある意味幸運だ
つたのかも知れないな。なんて思う。あたしは、一般車両の座席に
着いた。ああ、これから東京に戻つて生活をする事になる。

あの慌しい毎日は心の奥に仕舞い込んで、あたしは、荷物を肘に
置いた。

すると、何処かで聴き覚えのある声を聴いた。

「お譲ちゃん？隣、良いかな？」

あたしは、良いですよ。と言うつもりで頭を上げた。

「あ~~~~~！」

そこには、あたしの財布とカードを抜き取って行ったあの、おじさんが居た。

「返して！あたしの財布とカード！」

あたしは、この奇妙な偶然を、神様の贈り物だと思った。今は新幹線の中。もう、この人の逃げ場所などありはしない！

「げっ！」

っと退くおじさんの手首をあたしは驚掴んで、しっかりとしがみ付いてやった。

「勘弁！もうしないから！」

おじさんは、周りの乗客の視線が自分に注がれている事を確認して、しょんぼりと、あたしにお財布と、カードを返してくれた。

「もう絶対しませんよね？誓いますか？そうしたら、あたしは警察には通報しません。言っておきますが、あたしの父は警視庁で働いてますよ？」

にっこり笑ってあたしはおじさんを見た。

おじさんは、『もうしません』と言って、そそくさと違う車両に去って行った。

「さてさて、どうだか？」

あたしは、これからのあのおじさんの行動を想像して呟いた。ちよつとただけだけど、あの間抜けなおじさんに感謝していたりしている自分がいたりしてね？

新幹線の中、あたしは品川までずっと車窓から外の景色を見ていた。

実家へ戻る前に、あたしは、ミサの眠るお墓を訪問する事にした。色々話したい事がある。

そして、謝りたい事も。

ミサのお墓は、あたしの家から南に位置する少し小高くなっているお寺の傍にあった。

そして、お寺の住職の方に案内して貰って、あたしはミサの墓前に立つ。

「不幸な出来事でしたよ。娘さんまで道ずれにして。ええ。本当に……」

住職さんは一礼し、あたしに一言添えて立ち去った。それから、あたしは此処まで来る間に買った白い百合の花を添えて、手を合わせた。

「今まで一度も来てあげられなくてごめんね。ミサ……怒ってる？今さ、話したい事が沢山あるんだよ。あのね。あたし、ミサの事を忘れようと思ってた。だって、凄く辛かったんだよ。ミサがこの世に居ないって事を信じたくなくて……でも、違ってた。延光や隆と出会って旅をして、気付いた。あたしは、ただ逃げてただけなんだってことに。そんなの虫が良すぎるよね？幻滅する？かな……やっぱり。だけど、今は違うよ？鮮明に、色褪せないミサとの思い出を胸に焼き付けて、これから生きて行きます。ミサの分も。ミサがやりたかった事。感じたかった事。それら全部を、あたしは変わりに体験してあげる。そして、全てを今日から日記にしたためます。それは、ミサへの天国への手紙。見ていて？あたし頑張るから！」

あたしは、堪え切れない胸の奥の涙を押し止めて笑った。ミサの前で泣いちゃだめ。きつと、心配するから。

「今日も天気が良いね。空が綺麗だよ。海が見えたらもつと良いのね？知ってた？海の碧さは、空の蒼色が反射してるんだってこと。あ、ミサは知ってたのかもね？あたしは、知らなかった。そう、あたし達はちゃんと繋がってる。だから、絶対忘れない！ここに誓います！」

あたしは、にっこり笑って、何も返事をしてくれないお墓に向かって宣言した。

もう二度と、泣かない。そして、ミサの事を忘れない。
やっと、新鮮な空気を吸った気がした。肩の荷が下りた感じだった。

「じゃあ、また来るね。うん！」

あたしは、すっかり地に足を着けて歩く。帰って色んな事をしなくちゃならない。

学校の宿題も残ってるし、岡山の須藤さんに送金もある。

現実世界を肌感じて、そして、生きていく。そう、これはあたしの人生なのだから、自分で切り開かなければならない。頑張ろう。

そうして、家に帰ってまずしたこと。

押入れの奥に仕舞い込んだアルバム。

心の奥に封じてしまおうとして、一度も開く事の無かった物。

その中の一枚を取り出して、フォトスタンドに入れた。

六年生の時の運動会の写真。

確か、あの時あたしは後ろの方に並んでクラスの端で興味なく映ろうとしてたっけ？それを、ミサが、あたしの腕を掴んで中央に入るようにして引っ張って行った。

驚いて何するの？って問いかけたけど、

「ほら、優勝に貢献したクラスの立役者！笑って笑って！」

と言って、押し出した。あたしは、立役者という大げさな言葉に可笑しくなって、大きな口を開け笑った。ミサはそれを嬉しそうに見ている。

その瞬間のクラス写真。

それを勉強机の上に飾る。

「良い顔しているじゃない。あたし！」

貰った時は、変な顔って思った。でもこうして見ると、幸せな顔。あたしはそれを見て、真新しいノートに日記を書く。

ミサへの手紙として。

それから七年後。あたしは社会人として　しをしながら、施設団体のボランティア活動に参加している。

「おい、葵っち！明日は時間取れるんやろ？飯作って！」

そう。どう言う訳か、延光は東京の大学を受けて上京してきた。

「自分で作りなよ」人にばかり頼ってさ」自覚足らないんだからもう、君も大人なの！」

「あはは」もう結婚したら？殆ど同棲してるような感じじゃん！」

そして此処にも見知った顔。隆である。

「誰が誰とよ！」

「誰が誰とや！」

同時に言い放った。

大人になってもまだまだあの頃のように子供染みたあたし達。

でも、判ってる。大人になっても子供の頃の心で居られる幸せを大人は持ち合わせているのだと。

そして、いつでも子供時代を懐かしく思う心があることを。

いつしか時は流れ、あたしは延光と結婚するだろう。隆も今の彼女と結婚することになると思う。

あたしたちは幸せな家族を作る。

そして、人はまた初めましてと子供を産んで、さようならと、死んでいく。

出会いと別れ。その両方は絶対にある。

まるで物語の始まりと終わりのように。

だけどそれは人生の旅なのだ……

人生は　旅を重ねて　出会いと別れ　それを知って　またぞ旅する

美空　葵　作

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8100c/>

夜空の三重奏

2010年10月8日15時08分発行